性器を完全に破壊され、泣きながら処刑される西園寺弥生

高杉晋太郎

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
性器を完全に破壊され、泣きながら処刑される西園寺弥生

【Ｎコード】
Ｎ３１６２ＪＪ

【作者名】
高杉晋太郎

【あらすじ】
連載中の作品の主人公でヒロインでもある魍魎討伐者“青姫“の西園寺弥生。セーラー服にミニスカートで妖怪と戦う弥生が拉致され連れ去られ拷問される所からお話は始まります。弥生が性器を徹底的に拷問され破壊され惨殺されてしまうエピソードです。かなり酷い内容なのでＲ１８にしました。
弥生が拷問や性器を破壊されて泣き叫ぶ描写ばかりなので苦手な方は絶対に読まないようにして下さい。気分が悪くなる可能性があります。

連載中の作品のエピソードの１つとなります。弥生が惨殺される所でお話は終わりますのでご了承下さい。
その後は弥生が永遠に性器を拷問され続けるお話をＲ１８でのみ掲載していきます。

36話　性器を鞭で打たれ号泣し、膣も焼かれてしまう弥生（前書き）

“青姫“弥生が敵に捕らわれ“駿河問い“の拷問で痛め付けられるシーンからスタートです。

今回の拷問

駿河問い

鞭打ち

性器鞭打ち

焼きごて

膣焼き

駿河問い：両手首足首をまとめて一つに縛られ吊るされる拷問です。さらに腰に重りを下げられ回転させられてしまいます。この回転で頭の血管が破裂し目、鼻、口、耳から血が流れ出すという恐ろしい拷問です。

性器破壊の描写など出てきますので苦手な方は読まないようにして下さい。

３６話　性器を鞭で打たれ号泣し、膣も焼かれてしまう弥生

３６話　性器を鞭で打たれ号泣し、膣も焼かれてしまう弥生

弥生は腰から二つに折れそうな程の錘を吊り下げられ身体を独楽のように何度も回転させられていた。

「あばばばば　だずげでぇぇぇ　」

弥生は全身の骨が軋み、目や鼻、耳から血管が破裂し出血し朦朧とする意識の中、必死に許しを乞いていた。

「いだいぃぃ　ぐるじい　じぬぅぅぅ　」

もう、まともに言葉も喋れなくなっている弥生に、さらに苦痛を与える為に腰に吊り下げる錘が追加される。

「うぎゃぁぁぁぁぁぁ　折れる、折れる、折れるぅぅぅぅぅぅ　だじげでぇぇぇぇぇぇ　」

絶叫する弥生の股間からチョロチョロと尿が漏れだしていた。

「だじげでぇぇぇぇぇ　もう、ゆるじでぐだじゃいいいいいいいいぃ　」

無様に尿を漏らしながら泣き叫ぶ弥生の姿に〝千餐王〟は笑みを

浮かべる。

「よし、まわせ」

容赦のない命令が下され弥生の身体がくるくると回されていく。

「だじげでぇぇぇぇぇ　もう回さないでぐだじゃいいいいいいいい」

しかし、弥生はまた独楽のように回される。

ブッシャァァァ！！

「あっばぁぁぁぁぁーーーーーー」

弥生の目、鼻、口、耳から血が噴出し、弥生の周囲に血と尿が飛び散った。それでも容赦なく弥生は回されていき、口からブクブクと血の泡を吹き白眼を剥いて無様に失神していた。そして、ようやく弥生の身体が降ろされていく。しかしそれは弥生が許されたのではなく、〝千餐王〟の命令で次の拷問する準備を整えるためだった。弥生は気付け薬で目を覚まされると、弥生は再び両腕を背中に回され高手小手に縛り付けられる。そして、弥生の首にロープが巻かれ弥生が爪先でやっと立てる位置まで首に巻いたロープが引かれる。弥生はギリギリ首吊り寸前の状態で立たされていた。

「オーソドックスな拷問だが効果は的面だ　古代ヨーロッパを始め各地で行われていた拷問だよ　ショックで死ぬ者もいたらしいな」

〝千餐王〟は楽しそうに笑いながら弥生に嬉々として説明する。

「何、簡単な事だ　貴様はそのまま立っていればいい　足を滑らせたりすると首が吊られて死ぬぞ、気をつけるんだな　」

弥生は首にロープを巻かれた状態でガタガタと震えていた。これ以上まだ自分が拷問されるのかと思うと恐怖で震えが止まらず、弥生の股間からシャーッとまた尿が漏れだした。

「お願いします　もう許してください　」

弥生は恐怖で尿を漏らし泣きながら震える声で〝千餐王〟に懇願するが、押さえ付けられ口に猿轡が噛ませられてしまう。

「ふごっふごっふごっ　」

口を塞がれた弥生の前に鞭を持った河童が現れ、弥生に向かって鞭を構える。河童の持っている鞭は革製の一本鞭だった。鞭にも様々な種類があり、その中でもこの一本鞭は凶悪な鞭の部類に入る。処刑用の棘鞭程ではないが、一本鞭で打たれショックで死んだ人間はかなりの数に上る。いくら魍魎討伐者〝青姫〟を名乗る弥生とはいえ、それにどれくらい耐えられるのか、それはまるで未知数だった。そして、一本鞭が物凄い風切り音と共に弥生の裸の体に叩き込まれる。

ビシィィィ！！

「ふごぉぉぉぉーーーー　」

一撃で弥生の体には赤黒いみみず腫れが出来ていた。

「ふー、ふー、ふー、ふー　」

息が荒くなる弥生に今度は連続で一本鞭が叩き込まれる。

ビシィィィ！！ビシィィィ！！ビシィィィ！！ビシィィィ！！ビシィィィ！！ビシィィィ！！

「ふがぁ、ふがぁ、ふがぁ、ふがぁぁぁ　」

弥生の体に幾つものみみず腫れが刻み込まれ、弥生はぶるぶると震える脚で辛うじて立っていた。

「なかなか頑張るじゃないか　おい、こいつの脚を広げて押さえ付けろ　」

〝千餐王〟の命令で弥生の首のロープの長さが調整され、脚を大きく開かされたまま押さえ付けられた。弥生の股間が無防備に晒される。

・・・まさか……　嘘ですよね……　・・・

弥生は次の鞭の狙いが何処なのか想像し、恐怖でぶるぶると震えていた。いくら何でもそんな事する筈がない。弥生はそう思ったが、相手は人間ではなく人外である。普通の考えが通用する相手ではなかった。

ヒュン

鋭い風切り音が響き、一本鞭は弥生の想像する所へ叩き込まれた。

「ふんごぉぉぉぉーーーー　」

弥生の大きく開いた股間に鞭は叩き込まれ、弥生の股間には無惨にも一筋のみみず腫れが出来ていた。そして、連続で弥生の股間に鞭が叩き込まれる。

ビシィィィ!!ビシィィィ!!ビシィィィ!!ビシィィィ!!ビシィィィ!!ビシィィィ!!

「ふん、ふん、ふん、ふんごぉぉぉぉーーーー!!」

絶叫する弥生の顔面は苦痛に歪み、涙と鼻水で激しく汚れていた。

「どれ、尻子玉の成長具合を確認してみるか」

弥生は、うつ伏せにされ尻を持ち上げられると、尻を付き出した格好でさらに尻を広げられ肛門を晒される。〝千餐王〟は弥生の肛門に鋭い爪で狙いを付けると一気に腕を伸ばした。

ドスゥッ!!

「は、ぶぅぅぅーーー」

弥生の顔が苦痛で歪み目玉が飛び出しそうなほど見開かれる。弥生の肛門がバリバリと裂け血が大量に噴き出したが構わず〝千餐王〟は腕をグイグイと弥生の肛門に押し込んでいく。

「おお、いいぞ　こいつはもっと成長する　この尻子玉を喰えば、十鬼神など凌駕出来る　我らの時代がやってくるのだ」

〝千餐王〟の言葉に周囲の河童も興奮したように雄叫びを上げ始

める。それは大きなうねりとなり洞窟内に広がっていった。

「くくく、この人間をもっと痛め付けるのだ　殺しては成長が止まってしまう　殺さないよう気を付けて痛めつけるのだ　」

ズボッと弥生の肛門から腕を抜いた〝千餐王〟は次の拷問の指示を出す。

「今度も中世のヨーロッパで行われていた刑罰の一つだ　この人間の体にも与えてやろう、全身にな　人間という者は残酷な事を考えるものだ　」

そして、火が起こされろと、その中に何本も焼きごてが入れられ熱せられていく。焼きごての先端が赤くなっていく間に弥生は脚を開かされ逆さに吊られ、焼きごてを体に押される準備が整えられていった。弥生は、これから自分が何をされるか理解し、恐怖に震えながら涙を流し塞がれた口で必死に必死に許しを乞い、逃れようとするがそれは無駄な努力といえた。弥生が許される事はあり得ないし、厳重に拘束された弥生が逃げる術は残されていなかった。

「ふごっふごっふごぉぉーー　」

それでも必死に許しを乞う弥生の目に、数本の焼きごてがすでに真っ赤になっているのが入ってきた。その内の1本が火の中から取り出され、弥生の頭が押さえ付けられる。

「ふごぉぉーー　」

大きく目を見開く弥生の顔面に真っ赤に焼けた焼きごてが近付いてくる。そして、弥生の額に焼きごてが当てられた。

ジュュューーッ

「ふごぉぉぉぉぉーーーーーー！！」

皮膚の焼ける音と弥生の絶叫が洞窟の中に響き渡る。焼きごてはすぐには離されずに、ゆっくりと１０秒以上も押し付けられていた。もちろん、それで終わりではない。額の次には弥生の左右の頬にも焼きごてが押し付けられた。

「ふごぉぉぉぉぉーーーーーー！！」

額も頬も赤く火傷爛れケロイド状になり号泣する弥生の猿轡が外される。それは弥生が許される訳ではなく、さらに残酷な仕打ちを行う為の準備に過ぎなかった。猿轡を外された弥生の口が開かされたまま閉じられないように、拷問用の金具が口に取り付けられる。そこへ真っ赤に焼けた直径３０ミリはある鉄パイプが狙いを付けた。弥生は、これから自分がされる逃れようのない拷問のあまりの恐怖と、鉄パイプが発する凄まじい熱気で号泣しながら過呼吸になり失神しそうになっていた。弥生の体はこれ以上ないほど大きくブルブルと震え、股間からは再び透明な液体が湯気を立てて噴水のように大量に漏れだしていた。そんな哀れな弥生の姿を楽しむように真っ赤に焼けた鉄パイプは弥生の大きく開いたまま固定された口中に容赦なく突き入れられる。

ジュバァァーーッ！！

「おごぉぉぉぉーーーーー！！！！」

なんと焼けた鉄パイプは弥生の喉の奥の奥まで突き入れられ、そ

して、弥生の胃まで突き入れられていった。弥生の口中や喉や食道の焼ける音と臭い、そして白煙が立ち上る。鉄パイプは弥生の口中や喉を焼き尽くすように突き入れられたまま放置された。弥生は白眼を剥いて無様に失神しビクンビクンと体を痙攣させていたが、〝千餐王〟は再び弥生の尻に腕を突き刺し尻子玉の具合を確認する。

「おお、良い具合だ　素晴らしいぞ　もっと痛め付けろ　徹底的にだ」

〝千餐王〟も興奮していた。弥生の尻子玉は〝千餐王〟でさえ感じたこともないほど成長を遂げていた。この尻子玉を喰らえば十鬼神にさえ対抗出来ると〝千餐王〟は考え、弥生をさらに痛め付けるよう指示を出す。弥生は喉を焼かれた鉄パイプを突き入れられたまま、また焼きごてで焼かれる事になった。今度は直径５０ミリはある真っ赤に焼けた鉄パイプと直径１０ミリの焼けた鉄パイプが用意された。気付け薬を嗅がされた弥生は自分の体の一点に近付く物凄い熱波に恐怖し号泣していた。

・・・そこだけはマンコだけは許してくださいぃぃ　・・・

開脚され逆さに吊られている弥生の股間の中心に狙いが付けられていた。

・・・私、まだ経験がないんです　お願いぃぃ、マンコは許してくださいぃ　・・・

弥生は号泣するが、弥生の性器が開かれテープで中身が見えたまま固定される。そして、露にされた弥生の膣口と尿道口に同時に無情にも真っ赤に焼けた鉄パイプが容赦なく突き入れられていった。

ズボズボズボウウウッ

ジュバァァァァァーーーーー！！

「ふんごぉぉぉぉぉーーーーーーーーー！！　」

弥生の処女膜が破られ膣が焼ける凄まじい音と、弥生の絶叫が響き渡る。尿道に入れられた鉄パイプも尿道を焼きながら膀胱に入るまで突き入れられ、膣に入れられた鉄パイプは子宮の中にまでズブズブと突き入れられていた。弥生は生まれて初めて膣に入ってきた物で、その膣を破壊されてしまっていた。弥生は膣を焼かれる激痛と、拷問具で処女を奪われたショックで発狂したように泣き叫んでいた。その弥生の膣の肉が焼ける匂いと煙りが辺りに漂う。真っ赤に焼けた鉄パイプを挿入されるという残酷な拷問で弥生の膣壁も尿道も二度と使用できない程破壊されていたが、鉄パイプは一度抜かれると、再び真っ赤に焼けた鉄パイプが新たに突き刺されていく。

「中世ヨーロッパで魔女狩りに使われた拷問“膣焼き“だ　膣が黒焦げの炭になるまで何度でも入れてやる　」

“千餐王“は高らかに笑う。

「ふんごぉぉぉぉぉーーーーーーーーー！！　」

新しい真っ赤に焼けた鉄パイプが膣に挿入され弥生は心の中でも絶叫する。

・・・うぎゃぁぁぁーーー　マンコ、じぬぅぅぅぅ　だじげでぇぇぇ　・・・

弥生は恐怖と苦痛と絶望で普段の大人しい弥生からは想像もつかない叫びを上げていた。

37話　縫われた性器を鞭で打たれ、針も刺されてしまう弥生（前書き）

今回、弥生の性器に対する容赦のない拷問が行われます。弥生の性器が泣きながら壊されていく救いのない内容ですので苦手な方は気を付けて下さい。両腕を縛られ抵抗出来ない女の子が一方的に痛め付けられる内容なので気分が悪くなる可能性があります。

今回の拷問
子宮酸責め
性器縫い
性器針責め

37話　縫われた性器を鞭で打たれ、針も刺されてしまう弥生

37話　縫われた性器を鞭で打たれ、針も刺されてしまう弥生

弥生は開脚され逆さに吊るされ、その無防備に晒す性器に凄まじい拷問を受け子供のように号泣していた。生まれて初めて自分の内に入ってきた真っ赤に焼けた鉄パイプで処女膜を貫通された上、膣壁も焼かれ破壊されていく。それを何度も何度も繰り返され弥生の膣と尿道は焼け爛れ黒焦げになっていった。弥生は自分の一度も使った事のない性器が破壊されていく絶望と、その無様な自分の姿に号泣していた。しかし、弥生の性器への拷問はこの程度でまだ終わりではない。ようやく開始されたという所であった。

「ふんごぉぉぉぉぉぉぉーーーーーーーー」

狂ったように絶叫する弥生の膣と尿道に突き刺さる鉄パイプに漏斗が取り付けられ、そこからなんと高濃度の塩酸が注がれていく。

「人間の拷問史を見ると性器に対する拷問が圧倒的に多い　どうやら人間を痛め付けるには性器を拷問するのが一番のようだ　お前の性器を徹底的に拷問し完全に破壊してやろう　“膣焼き“の後は“酸責め“で性器の内部を焼いてやる　」

しかし弥生はそんな“千餐王“の言葉など耳に入らず子宮と膀胱を塩酸で焼かれ溶かされる耐え難い激痛で全身汗だらけになり逃れようと必死に暴れていた。

「ふんごぉおおおおおーーーー　」

・・・だじげでぇぇ　わだじのマンコがいだいぃぃぃ　もお、じぬぅぅぅぅ　・・・

弥生の悲鳴が悲痛に響くが、弥生の腰は押さえ付けられ塩酸がドボドボと注入されていく。弥生は子宮と膀胱を溶かされ煙と異臭が漂い、人間とは思えない絶叫を上げていたが、そこで弥生の猿轡が外される。

「苦しいか、人間　一つチャンスをやろう　私にお願いしてみろ　私が満足するようなお願いだったら一思いに殺してやろう　よく考えろ　私が何をしたいか考えれば分かる筈だ　」

「ううっ……　はい、分かりました　」

子宮を塩酸で焼かれながら弥生は考える。こんな苦痛はもう耐えられない。いっそのこと早く殺して欲しい。弥生は激痛で朦朧とする頭で必死に考える。

「どうした　何もお願いしなくていいのか？　」

「い、いえ　それでは……　」

弥生は泣きながら震える声で話し出す。

「弥生のマンコを徹底的に拷問して破壊して下さい　二度と使用出来なくして頂くのは勿論、弥生のマンコが形すら残らない程、完全に破壊して頂ければ嬉しいです　」

普段なら絶対に口にしないだろう言葉を弥生は口にしていた。弥生の精神はそこまで追い詰められていたのだ。

「お願いいたします　弥生のマンコの完全破壊　それが望みです」

「うはは、よく言った　私が満足する答えだ　それでは望み通り貴様の性器を徹底的に破壊してやろう」

「そ、そんなぁ　一思いに殺してくれるのでは」

「そのつもりだったが、そこまでお願いされては性器を破壊する以外ないだろう」

「ひぃぃぃぃーーー」

悲鳴を上げる弥生の性器から鉄パイプが抜かれ、次の拷問の準備が進められる。太い大きな針と木綿の糸が用意されていた。

「これもヨーロッパで実際に行われていた“性器縫い“という拷問だ　いや、これは現在でも密かに行われているようだな」

“千餐王“は笑いながら、始めろと合図を送る。作業がやり易いように弥生の脚は水平まで無理矢理開かされ、小陰唇が摘まれ引き伸ばされる。そして、その小陰唇に糸の付いた太い針が突き刺された。

「ひぎぃぃぃぃーーーー！！」

弥生が悲痛な声を上げるが、弥生の腰は押さえ付けられ、今度は

反対側の小陰唇に針が突き刺され糸がズルズルと通される。

「ひぎぃぃぃぃーーーー　もお、だじげでぇぇぇぇーーーー」

神経の集中する小陰唇に針を貫通され糸を通されるという凄まじい拷問をされ、弥生はもう妖怪を討伐する青姫ではなく普通の女子になっていた。無様に泣き喚く弥生の小陰唇が容赦なく縫い合わせられていく。幾度となく弥生の小陰唇に針が突き通され、ずるずると木綿の糸が通された。

「ひぎぃぃぃぃーーー　マンコ、いだいぃぃぃぃーーーー」

弥生の小陰唇は厳重に縫われていく。そして、弥生の小陰唇がピタリと縫い合わせられ、糸が切られた。弥生の性器は見事に縫い合わせられていた。

「何をされたか、分かるか　言ってみろ、人間」

「ううっ……　はい……　弥生のマンコを縫っていただきました」

「うはは、ちゃんと分かっているな　次は〝性器鞭打ち〟だ　きちんとお願いしろっ！」

「や、弥生の縫われたマンコを鞭で打って下さい」

泣きながらお願いする弥生の前に、すぐに革の凶悪な一本鞭を持った河童が現れ、弥生の縫われている性器に狙いを付ける。

ヒュン！！

鋭い風切り音が鳴り一本鞭が弥生の縫われた性器に叩き込まれる。

ビシィィィ！！

「ひぃぎぃぃぃぃぃーーーーーーーー！！！」

弥生の縫われた性器から血が飛び散った。しかし、一本鞭は休みなく弥生の性器に叩き込まれる。

ビシィィィ！！ビシィィィ！！ビシィィィ！！ビシィィィ！！ビシィィィ！！ビシィィィ！！

「ひぃぎぃぃぃぃぃーーーーーーーー！！　マンコ、じぬぅぅぅぅぅーーーーー！！　ゆるじでぇぇぇぇぇーーーーーーー！！」

弥生の縫われた性器は激しい鞭打ちで小陰唇が所々引き千切れ血が溢れだしている。大陰唇にも新たな赤いみみず腫れが幾つも出来ていた。

「ひぎぃぃぃぃぃーーーー！！　マンコ、もうゆるじでぇぇぇぇぇーーーーー！！」

しかし、弥生の懇願など何の意味もなさない。弥生の性器にさらに激しく鞭が叩き込まれる。

ビシィィィ！！ビシィィィ！！ビシィィィ！！ビシィィィ！！ビシィィィ！！ビシィィィ！！

連続で思い切り叩き込まれる鞭の打撃で、ついに縫われていた弥生の小陰唇が千切れ、またぱっくりと性器が口を開けていた。そこ

で一旦、弥生の性器への鞭打ちが止められ縫っていた糸が取り除かれる。

「よし、次は“針責め”だ　お前の性器を針山にしてやる　ほら、お願いしろ　私の言うことを聞かないと酷い事になるぞ」

「弥生のマンコに針を刺して下さい　針山になるほどたくさん針を刺してもらえると嬉しいです　ううぅ……」

号泣している弥生の小陰唇が左右に大きく開かれ針で大陰唇に開いたまま留められる。針は長さ１５０ミリもある拷問用ニードルだ。先端には容易に抜けないように返しが付いている。そのニードルで小陰唇が開いたまま留められた後、弥生の性器で一番敏感な部分が狙われる。弥生のその小さな突起に超強力な即効性のある媚薬が塗られていった。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あぁぁぁぁ」

こんな目にあっていながら弥生は顔を上気させ乳首も固く勃起させ無様に声を出してしまっていた。もし膣が破壊されていなければ、びっしょりと濡らしてしまっていたのは間違いなかった。弥生の突起は固く大きく勃起している。その突起が摘まれニードルの針先が当てられる。そして、周り中から腰を押さえられ、ニードルに力が込められる。

プツゥ！！

「ひぎぃぃぃぃ　いぐうぅぅぅーーーー！！」

信じられない事に、媚薬を塗られ勃起したクリトリスにニードル

を刺され弥生は生まれて初めて絶頂に達してしまっていた。ニードルはそのまま弥生のクリトリスを貫通される。

プツゥ！！

「いぐ、いぐ、いぐうぅぅーーーー　もっとマンコ刺してぐだぢゃいぃぃぃ　」

媚薬を塗られ敏感なクリトリスを貫通され弥生はまるで狂ったように懇願する。弥生に懇願されたからではないが、２本目のニードルが弥生のクリトリスを１本目と交差するようにプツッと貫通する。さらに３本、４本、５本と弥生のクリトリスはニードルを貫通されていった。経験のない弥生には媚薬の効果が絶対的だった。５本ものニードルでクリトリスを貫通されながら弥生は、クリトリスを固く勃起させ息を荒くしていた。しかし、弥生が拷問を忘れ快感に酔っていられたのはここまでだった。クリトリスの次に弥生の性器の会陰部にニードルが当てられ深く突き刺されていく。

「ひぎゃぁぁぁぁぁーーーーー！！　」

再び弥生は絶叫する。弥生は膣前庭窟に次々にニードルを深く刺されていった。

「ひぎぃぃぃぃぃぃーーーーー！！　」

ポロポロ涙を溢しながら弥生は性器を針山にされていく。弥生の膣前庭窟にはもう５００本ものニードルがびっしりと突き刺されていた。さらに大陰唇にもニードルが突き刺され、弥生の股間には計１０００本ものニードルが刺され、正に針山の状態になっていた。

「いだい、いだい、いだい、いだい、いだい」

呪文のように泣きながら呟く弥生に、さらに次の拷問が容赦なく襲いかかる。

38話　恥丘に釘を打たれウンコを漏らし、小陰唇も切断されてしまう弥生（前書き）

今回も本編の主人公でヒロインでもある西園寺弥生の性器破壊がメインになります。もう、性器拷問というより性器処刑になります。今回は弥生の隠された性癖も暴露されます。本編を読んでいた方はショクを受けると思います。

今回も弥生の性器が一切の容赦なく破壊されていきます。苦手な方は気を付けて下さい。それと今回、弥生の排便シーンも出てきますので、そちら方面が苦手な方も注意して下さい。

今回の拷問
恥丘釘打ち
小陰唇短冊切り
小陰唇切除
陰核包皮切除

３８話　恥丘に釘を打たれウンコを漏らし、小陰唇も切断されてしまう弥生

３８話　恥丘に釘を打たれウンコを漏らし、小陰唇も切断されてしまう弥生

開脚逆さ吊りで両腕を背中で高手小手に縛り上げられた弥生の無防備な性器に１０００本ものニードルを突き刺され号泣する弥生。弥生の股間一帯はびっしりと針の山になっており見るだけでも痛々しく、敏感な性器にこれだけ針を刺されている弥生がどれ程の苦痛に襲われているのか想像する事は難しかった。

・・・いだいぃぃぃ　私のマンコ、もう殺されてしまうんだ　・・・

自分の大切な性器に容赦なく集中して与えられる拷問に弥生は泣き続けていたが、すぐに残酷に次の拷問が開始される。

「ほら、早く自分でお願いしろ　もう次に何をされるか分かるだろう」

「ううっ……　ゆるぢでぐだぢゃいぃぃ」

弥生はもちろん次に自分が何をされるか分かっているが恐ろしくてそれは言葉に出来なかった。今までの例からみて次には必ずこうされる。

・・・そんな事されたら、私のマンコ死んじゃいます　・・・

自分の口からそんな恐ろしい事を言えない弥生は泣く以外なかった。

「ほう、分からないのか　それならこれを打ってやろう　おいっ」

〝千餐王〟は近くの河童を呼び寄せると長さ１５０ミリある五寸釘と呼ばれる黒い釘を渡す。

「これは、呪いの五寸釘だ　これを打たれた人間は未来永劫地獄の激痛に苦しめられる　これを打ってやろう」

「いやあぁぁぁ　ゆるじでぇぇぇぇーーーーー」

泣き喚く弥生の腰が押さえられ、弥生の形の良いつるつるの恥丘の中心に五寸釘が当てられる。そして、金槌が振り上げられ思い切り弥生の恥丘に五寸釘が打ち込まれていった。

ガーン、ガーン、ガーン、ガーン

「いだい、いだい、いだい、いだいぃぃぃ」

弥生の恥丘に五寸釘が打ち込まれていく。五寸釘は弥生の恥骨を突き抜け弥生の体の中に深く打ち込まれていった。その打ち込まれた五寸釘を中心に電流が流されたような激痛が弥生を襲う。

「あう、あう、あう、あう、だれがぁだずげでぇぇ」

ぶるぶると体を震わせ弥生は号泣する。

ぶりぶりぶりぶりぃぃぃ

なんと弥生は恥丘から五寸釘を打たれた激痛で大便を漏らしていた。弥生の肛門が広がり太い大便が顔を出し悪臭を放ちながら、ぼとぼとと地面に落ちていく。

「いやあぁぁ　見ないでくださいぃぃぃ　」

弥生は泣いて訴えるが、その時自分が撮影されている事に気が付いた。よく見ると弥生を取り囲んでいる河童の中にカメラを構えた者が何人もいる。

・・・私、うんち漏らしてる姿を撮影されている　・・・

弥生は拷問を受けている最中でありながら羞恥で顔が赤くなっていた。

・・・いやあぁぁ　恥ずかしい　・・・

弥生の大便を漏らす肛門が大きく接写されていた。

「なんと……　人間の女はわきまえていると思っていたが、この女は何処でも平気でウンコする女なのか　」

”千餐王　”は呆れた顔でぼとぼとと排便する弥生を見つめているが、弥生がまだ答えない事に苛立ちを覚えていた。

「まだお願いしないか　それなら、もう1本打ち込め　」

「いやだあぁぁ　いいます　いいまずがらあ　」

必死に許しを乞う弥生の恥丘に2本目の五寸釘が当てられ金槌で打ち込まれる。五寸釘は根元まで弥生の恥丘に打ち込まれた。さらに強い電流のような痛みが弥生を襲う。

「あぎゃぁぁぁーーーー　いだいぃぃぃぃーーーー　弥生の針山のマンコ　鞭で打ってぐだぢゃいぃぃぃーーーー」

とうとう弥生は言ってしまった。弥生が叫んだ瞬間、待ちかねたように一本鞭を持った河童が弥生の針山にされた性器に鞭を思い切り叩き込んだ。

「あっびゃぁぁぁぁぁぁーーーーー!!!!」

弥生の性器に突き刺さるニードルは鞭の打撃でさらに深く突き刺さり弥生の性器の肉を抉り、血が飛び散る。

ビシィィィ!!ビシィィィ!!ビシィィィ!!ビシィィィ!!ビシィィィ!!ビシィィィ!!

「あぎゃぁぁぁぁぁぁーーーーーー　いだい、いだい、いだい、いだいぃぃぃぃーーーー!!」

弥生の性器に１０００本突き刺されていたニードルが鞭の打撃で半分の５００本くらいが叩き落とされていた。ニードルが抜ける際に弥生の性器はさらに深く傷付けられ、弥生の性器は血塗れになっていた。

「あぎゃぁぁぁぁーーーー　いだい、いだい、いだいよぉぉぉぉーーーー!!」

弥生がいくら泣き叫ぼうと、弥生の性器は鞭で打ち続けられる。
そしてその後一時間も弥生は針山の性器を鞭で打たれ続け、ようやくすべてのニードルが鞭で叩き落とされ、弥生の性器への鞭打ちが終了した。

「はひゅーはひゅーはひゅーはひゅー」

息を荒くして泣きじゃくる弥生に〝千餐王〟が残酷に告げる。

「次のお願いはどうした？」

「ひっ……」

弥生は息を呑んだ。まだ自分は拷問されるのだ。その残酷な事実に弥生は絶望で言葉が出なかった。

・・・私のマンコ、もう壊されているのに、まだ拷問されるのですか　もう早く殺して欲しい　もうマンコ痛め付けられるのは耐えられない　・・・

言葉のない弥生に、〝千餐王〟は仕方がないというように近くの河童に指示を出す。弥生の周りにまた河童が集まり逆さ吊りの弥生の腰を押さえ付ける。

「答えられないとは想像力のない女だ　次は〝小陰唇短冊切り〟だ　これも相当痛いぞ　耐えられるかな　前にやった女は途中で発狂してしまったからな　ははは」

・・・ひいいいいいい　・・・

弥生は恐怖で震えていた。その弥生の木綿の糸で縫われてから鞭で打たれ酷い状態の小陰唇が摘まれ思い切り引き伸ばされる。

「くくく、ずいぶん伸びるものだな　短冊に切断するのが楽しみだ」

笑みを浮かべていた〝千餐王〟だったが顔を近付けると、その弥生の小陰唇のヒダに白い滓が溜まっておりツーンとした悪臭がする。

「なんだ、この女は性器を洗いもしないのか」

〝千餐王〟は不快な表情で弥生を汚いものでもあるかのように顔を背ける。弥生はそんな自分の汚い性器をアップで撮影され大声で泣き出していた。

「いやだぁぁぁ　これ以上弥生を虐めないでくださいぃぃぃ」

弥生は自分の汚れた性器を詳細に撮影され、精神の方も追い詰められていった。

「もう早くやれ　汚い」

びろーんと大きく引き伸ばされた弥生の小陰唇が鋭いハサミで挟まれた。弥生はその冷たい鉄のハサミの感触に、これから自分の性器に起こる事態を想像し、さらに激しく泣き出す。

・・・いやだあ　こわい　そんなこと止めてくださいぃぃぃ　・・・

小陰唇を切断されるなど想像した事も経験した事もない弥生は激

しく怯えていた。まだ性器を縫われたり針を刺されたり鞭で打たれる事は想像出来た。弥生は誰にも言った事はないし、これからも絶対誰にも言うつもりはないが、弥生は一人で自慰する時、自分の性器が鞭で打たれたり針を刺されたり縫われてしまう事を妄想をして自慰していた。そして、一度だけ本当に性器に針を刺した経験があった。勃起したクリトリスに2ミリ程、本当に針を刺した。その時弥生は体を突き抜けるような快感で始めてイッテしまった。弥生は誰にも気付かれないようにしていたが、真性の変態であるのは間違いなかった。そんな弥生でも小陰唇が切断されるなど妄想した事もなかったのである。そして、弥生の小陰唇を挟んだハサミに力が込められていく。

「うっ、ううっ　」

弥生が小さく声を上げる。その次の瞬間、とても耐え難い激痛が弥生の性器を襲う。

ジョキーン

「あっ、びゃぁぁぁぁぁぁぁーーーーーー!!!!!　」

弥生の小陰唇が縦に切断された。弥生は自分の性器を襲う耐えられない痛みに体を海老のように反らせたまま固まっている。涙は滝のように流れ、鼻水も垂れている。そんな弥生の小陰唇が無情にも1センチ間隔で短冊のようにハサミで切断されていく。

ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン

「いだい、いだい、いだい、いだいぃぃぃぃ　もおゆるじでぇぇぇぇぇーーーーーー　」

小陰唇を短冊切りにされ弥生は泣き叫ぶが、今度は反対側の小陰唇が同じように大きく引き伸ばされる。

「いやだあぁぁ　もお、ゆるじでぐだぢゃいいいいーーーー」

泣き叫ぶ弥生の腰はがっしりと押さえ付けられ、弥生の小陰唇はハサミで短冊状に切断されていく。

ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン

「いだいいいいい　いだいよぉぉぉぉーーーー　だれかあ、だずげでぇぇぇぇーーーー！！」

敏感な左右の小陰唇を短冊状に切断されてしまった弥生は、顔中涙と鼻水とよだれで汚し号泣している。相手が人間であれば性器を血塗れにされて激しく泣いている弥生を哀れに思うところであるが人外の河童にそんな感情は微塵もなかった。号泣する弥生の腰は厳重に押さえられ、短冊に切断された小陰唇が一つずつ引き伸ばされ、今度はその先端から根本に向かって5ミリ間隔で切除されていく。

ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン

「いだいいいいーーーー！！」

短冊にされた弥生の小陰唇が一つ、根元まで残酷に切除されてしまった。そして、次々に弥生の短冊にされた小陰唇がハサミで先端から根元までスライスされていく。

ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン

「あっぴゃぁぁぁぁぁーーーーーー　いだい、いだい、いだい、いだい、いだい、いだいいいいいい　いだいよぉぉぉぉーーーーだれかぁだずげでぇぇぇーーーー！！」

そして、とうとう小陰唇を全て切除されてしまった弥生は助けを求めるが、当然だが助けなど現れる筈がなかった。それにまだ弥生の性器破壊は終わらない。最後に残った小さな突起が次のターゲットだった。その弥生のクリトリスを剥き出しにするために、クリトリスを包んでいる包皮も切除される。メスを使い弥生のクリトリスを包む包皮が切り裂かれていった。

「いだぁぁぁぁ　いだいよぉぉぉぉーーーーー　ゆるじでぐだぢゃいいいいいーーーー」

しかし、弥生のクリトリスの周りの包皮は全て切除されてしまい、弥生の股間の割れ目の中で剥き出しにされたクリトリスがポツンと、その存在を強烈に主張していた。

38話　恥丘に釘を打たれウンコを漏らし、小陰唇も切断されてしまう弥生（後書き）

読んで頂きありがとうございます。
弥生の隠していた性癖も暴露しました。弥生は肉体だけでなく精神も壊されていく予定です。今まで運が良かった弥生ですが今回は容赦なく徹底的に辱しめ破壊します。弥生が助かる余地は1ミリもありません。誰かが助けに来る事もありません。

アイデアや一言でも感想頂けると嬉しいです。

よろしくお願いします。

39話　オナニーを強制され無様に潮を吹き、浣腸され焼き印も捺される弥生（前書き）

今回も引き続き弥生は拷問されるのは勿論ですが辱しめられてもいきます。
弥生の本性も表れ、弥生はもう二度と元の弥生には戻れなくなります。

今回の拷問
自慰鞭打ち
浣腸
焼き印

３９話　オナニーを強制され無様に潮を吹き、浣腸され焼き印も捺される弥生

３９話　オナニーを強制され無様に潮を吹き、浣腸され焼き印も捺される弥生

弥生の小陰唇を切除してしまった〝千餐王〟は面白い趣向を思い付いていた。

「少し面白い事をしてやろう」

〝千餐王〟は先程の弥生の痴体を思い出し笑いを堪えていた。弥生はまた剥き出しのクリトリスに媚薬を塗られるが、さらにクリトリスに注射器で針を打ち込まれ媚薬を注入されてしまう。それだけではない。媚薬の錠剤を口から大量に飲まされ、２つの乳首にも媚薬が塗られ、さらに乳首からも注射器で媚薬が注入されてしまう。これだけでも通常量の１００倍以上に相当するが、さらに弥生は左右の胸の膨らみに５本ずつ媚薬を注射され注入され、会陰や膣前庭窟や大陰唇にも２０本以上媚薬を注射されてしまった。弥生は全身が真っ赤に火照り汗ばんでくると声を上げ始めていた。乳首とクリトリスはこれ以上ないほど固く大きく勃起している。

「あっあっあっあっあっあっあっあぁぁぁ」

その弥生の痴体を眺めていた〝千餐王〟は驚愕する。黒焦げにして破壊したと思われた弥生の膣が濡れてきていたのだ。

「ぬう、信じられん　どういう事だ　試してみるか　人間の世界の性具を用意しろ」

”千餐王”の元に人間の世界で使用するバイブレータやローター等の性具が用意されてきた。そして、”千餐王”は弥生の膣に、長さ４００ミリ直径５０ミリの巨大なバイブレータを挿入する。弥生の膣はしっかりと濡れていて、巨大なバイブレータを難なく呑み込んだ。”千餐王”はさらに弥生の剥き出しのクリトリスにローターと云われる性具を貼り付け、２つの乳首にもローターを貼り付けた。そして、弥生の肛門の中にも肛門用のバイブレータを挿入する。”千餐王”は準備が整ったのを確認し全ての性具のスイッチが入れられた。

「おっおっおっおっおっおぉぉぉ」

すぐに弥生が声を上げ始める。弥生の膣に挿入されている性具の動きが”強”に設定され振動とうねる動きが弥生の膣に刺激を与え、肛門のバイブレータも弥生の肛門から直腸を刺激し腸液も漏れ始めていた。

「おっぱぁぁぁぁーーーー　いぐ、いぐ、いぐぅぅぅーーーーー！！」

弥生は大勢の河童の見る前で絶頂に達しようとしていた。開脚逆さ吊りにされている弥生は腰を突き出し、体を海老のように反らせて喘いでいる。

「いぐう、いぐう、もういぐぅぅぅーーーーー」

弥生の体が一瞬硬直したように動きを止める。”千餐王”が弥生

の膣に挿入しているバイブレータを抜き取ると……。

プッシャァァーーーー

弥生は膣から激しく大量に潮を吹いていた。

「こんな黒焦げの膣なのにバルトリン腺は生きているのか」

〝千餐王〟はまた弥生の膣にバイブレータを入れスイッチを入れる。そして、今度はバイブレータを握り激しく高速でピストン運動させた。

「おおっおっおっおっ」

弥生はすぐにまた声を出し始め、弥生の膣からは白濁した粘液が溢れ出てきた。

「いぐ、いぐ、いぐぅぅぅぅーーーーー　あっばぁぁぁぁーーーーー」

弥生はまた頂点に達していた。

プシャァァーーーー

弥生はまた激しく大量に潮を吹く。口を開いたまま放心したような弥生は吊られていたロープを外され地面に転がされたが、よろよろと起き上がると〝千餐王〟の前まで上気した顔で歩いてくる。そして、そのまま跪くと〝千餐王〟の足を舌で舐め始め、段々と上にあがっていくと〝千餐王〟の股間に顔を埋め、王の性器を口に含んで奉仕していた。弥生は両腕を高手小手に縛られたまま口だけで奉

仕する。

「うぐ、うぐ、うぐ、うぐぅぅぅ　」

顔を上気させとろんとした目で必死に奉仕する弥生の頭が押さえ付けられ、腰が激しく振られる。弥生の口の中で〝千餐王〟の性器は巨大化し、弥生の食道を突き抜け胃にまで達していた。〝千餐王〟の性器は表面に棘があり、興奮するとそれが突き出てくる。弥生はその棘で口中も喉も食道も破壊され、歯は全て抜け落ち、顎も外れてしまっていたが、弥生は頭を押さえ付けられたまま激しく喉を犯されていた。そして、弥生の胃の中に〝千餐王〟の精液が放出される。

ドピュドピュドピュ

弥生の口から性器が抜かれ、弥生の顎がガチッと嵌められる。弥生はしばらく放心したように動かなかったが、そのうちに自分で大きく脚を開き割れ目だけになった性器を晒す。

「もっと弥生を犯して下さい　マンコもお尻の穴も……　」

〝千餐王〟はそんな弥生の姿を見つめ、地面に長さ８００ミリ太さ５０ミリはある性具を突き立てる。

「くくく　そんなに欲しいなら、それを使って私を興奮させてみろ　」

弥生は頷くと両腕を縛られたままその巨大な性具の前まで歩いていき、先端を口に含んで唾液で性具を濡らしていく。そして、後ろを向くと自分の肛門に性具を突き刺した。

「あうっ　」

小さく声を上げた弥生はそのまま腰を落としずるずると性具を肛門に挿入していき、その後、激しく腰を上下に動かしだした。そのあまりに激しい動きで弥生の肛門が裂け血が飛び散るが、弥生は構わず腰を動かす。

「あうっ、あうっ、あうっ、あうっ、あうぅぅぅーーーー　」

プシャァァーーーー

弥生は自分で肛門を犯し、潮を吹いていた。

「ハァハァハァハァハァハァハァ　」

息が荒くなった弥生は、ズボッと肛門から性具を抜き、その汚れ具合を確認する。弥生の肛門から抜かれた性具は、弥生の唾液と大便と腸液と血で激しく汚れていた。弥生はそれをうっとりとした目で見ると、今度はその汚れた性具を膣に入れていく。

ズズズズッ

「マンコ痛め付けるの最高に気持ちいいです　弥生はもう魍魎討伐なんか辞めて、毎日休みなくマンコ痛め付けられて犯されたいです　」

弥生は膝を曲げ性具を膣の最奥まで突き入れる。そして、膝を上下に動かし性具をピストン運動させる。

「あびゃぁぁぁぁーーーー　弥生をこのまま痛め付けてくださいぃぃぃぃーーーー」

弥生の希望通り弥生の乳首に重りの付いた釣り針が突き刺されぶら下げられる。それも、一つではない。右の乳首に5個、左の乳首にも5個の重りがぶら下げられた。弥生が腰を上下に動かす度に重り同士がぶつかりカチンカチンと音が鳴る。そして、弥生の肛門にイルリガートルから伸びるゴム管が抜けないように深く長く挿入されグリセリンの原液が注入される。さらに一本鞭が弥生の体に叩き込まれた。

「あひゃ、あひゃ、あひゃ、あひゃ、あひゃ　」

弥生は乳首に重りをぶら下げ、一本鞭で打たれ、浣腸もされながら狂ったように腰を上下に動かし自慰に溺れていた。

プシャァァーーーー

弥生はまた潮を吹いて絶頂に達していた。膣に性具を入れたまま口を開け放心したように立ち尽くしている弥生の周りに河童が集まってくると弥生の頭が押さえられ口が大きく開けられ舌が摘まみ出される。そして、その舌に重りの付いた釣り針が突き刺された。その数5個。弥生は舌を出したまま無様によだれを垂らしている。さらに下唇に5個、上唇にも5個の重りが釣り針でぶら下げられる。なんと弥生の鼻中隔にも重りが2個も下げられた。次には弥生の腰が押さえ付けられる。弥生の外性器で最後に残っているクリトリスにも釣り針で重りが下げられる。１０個もの重りが弥生の小さな突起にぶら下げられた。

「いひっ、いひっ、いひっ、いひっ　」

自分の体にそんな凄まじい事をされながら弥生は興奮して声を出していた。そして、もう1リッター近く浣腸されている弥生に、更に大量にグリセリン液を注入する為イルリガートルにグリセリン液が補充された。これが全て注入されれば弥生は3リッターものグリセリン液を浣腸される事になる。浣腸されてしまった弥生はもう肛門から汚物を噴き出す姿を撮影されるのは確定していた。セーラー服にミニスカートで雄々しく戦う青姫の画像の横に、この弥生の肛門から汚物を噴き出す動画が掲載されればインパクトを与える事は必至だった。そして、さらに弥生を辱しめる為、弥生の体に焼き印が捺される事になった。まず弥生のわずかに膨らんだ胸に焼き印が捺される。4文字の焼き印が1文字ずつ真っ赤に焼けている。自分が何をされるか理解していない弥生の体が押さえ付けられ1文字目が捺された。

ジュバァァァーー!!

「お、ぎゃぁぁぁーーーー!!」

さすがに変態の弥生でも絶叫するが、きっちり30秒焼き印は弥生の胸に捺され続けた。そして、2文字目も続けて弥生の胸に捺される。

ジュバァァァーー!!

「あっ、ぴゃぁぁぁーーーー!!」

さらに3文字目、4文字目と弥生の胸に焼き印が捺されていった。弥生の胸に捺された文字は片仮名で〝ヘンタイ〟と焼き印されていた。二度と消せない文字を胸に焼き印されてしまった弥生は、次に

腹部にも焼き印される。弥生の腹部には縦に〝弥生〟と大きく本名が焼き印された。これで終わりではない、弥生の恥丘にも焼き印される。弥生の恥丘には〝マンコの穴〟と焼き印され、その文字の下には、下向きの矢印が焼き印された。弥生は焼き印を捺され無様な姿になった自分を姿見で見せられ興奮していた。

そして、最後の仕上げとばかりに弥生の2つの乳首に電線がつなげられ、弥生のクリトリスにも電線がつなげられていった。さらに弥生の会陰には電線の付いた針が深く突き刺されていく。弥生は乳首と性器の2ヶ所に電流も流される事になる。そして、弥生の無様な姿をさらに強調するため、弥生が穿いていた汚れた白い綿の下着が弥生の頭に被せられた。弥生の割れ目の形に染みが付いた股間の当たるクロッチ部の臭いが嗅がれ、その強烈な悪臭に河童たちは顔をしかめるが、そのクロッチ部が弥生の鼻と口に当たるように被せられる。焼き印され乳首とクリトリスに重りを下げられ汚れた下着を被っている弥生の姿はどこから見ても変態で頭のおかしい女の子としか見えなかった。この弥生が、あの魍魎討伐者〝青姫〟であると言っても誰も信じないのは間違いないが、こんな姿にされ興奮している弥生こそがあの〝青姫〟であるのは間違いない事実だった。

39話　オナニーを強制され無様に潮を吹き、浣腸され焼き印も捺される弥生（後書き）

青姫としての使命も忘れ、ある意味、拷問され喜んでいる西園寺弥生に、一言罵りの言葉を与えて下さい。

こんな変態女は青姫として働く資格がありません。存分に罵ってやって下さい。皆さんの罵倒の言葉受け付けます。

もう、こんな変態の女は性器を破壊され惨殺される以外使い途はないでしょう。

期待して下さい。弥生の性器はタイトル通り完全に破壊されます。

４０話　肛門からウンコを噴出し、性器に火を点けられ燃やされる弥生（前書き）

弥生の異常な変態性がだんだんと表れてきます。あの凛々しい青姫が、こんなに変態だったとは……。
もう二度と彼女を今までのような目で見る事は出来ないですね。

今回の拷問
電流責め
陰核圧砕
性器焼き

４０話　肛門からウンコを噴出し、性器に火を点けられ燃やされる弥生

４０話　肛門からウンコを噴出し、性器に火を点けられ燃やされる弥生

無様な格好だった。弥生は自分の汚れた下着を被せられ、乳首やクリトリスに重りをぶら下げられ、〝ヘンタイ〟と焼き印され、本名も大きく焼き印されてしまっている。さらに乳首と性器に電線をつながれ、イルリガートルで浣腸もされている。そんな姿で弥生は脚を開き地面から突き出た性具を膣に挿入し立っている。

「くくく、無様な姿だな　よし、また自慰するのだ」

〝千餐王〟の命令で弥生の周りから河童たちが離れて行き遠巻きに弥生を観察する。そして、スイッチが入れられ弥生の乳首と性器に電流が流された。

「はひっ、はひっ、はひっ」

ビリビリと自分の体に流される電流に弥生は反応する。それでも弥生は大量の重りをぶら下げられ、浣腸され、電流を体に流されながらも腰を上下に動かし自慰を始めた。

まったく無様な姿だった。セーラー服とミニスカートにサイハイソックスで妖怪を倒していくあの魍魎討伐者〝青姫〟の凛々しい姿はここにはもうなかった。ここにいるのは西園寺弥生という一人のどうしようもなく異常な変態の女子だった。その弥生はこれから更

に徹底的に性器を壊されていくのだが、弥生は性器が完全に消滅し失くなるまで責め続けるという言葉に興奮してしまっていた。性器を拷問され泣き叫ぶ自分の姿を想像しどうしようもなく性器を濡らしていたのだ。

「私、西園寺弥生は今オナニーしています　変態の弥生のオナニーを撮影して全世界に発信して下さい　そして、この後弥生のマンコは完全に破壊して頂きます　期待して下さい　」

弥生は撮影しているカメラに向かって大声で宣言し、腰を上下に激しく動かし自慰していた。顔面や乳首、クリトリスに付けられた重りは弥生が腰を上下に動かす度にカチカチと大きな音を鳴らす。イルリガートルからゴム管で浣腸されている肛門からは弥生が腰を上下に動かす度にピュッピュッとグリセリン液が肛門から漏れていた。そして、浣腸され続けている弥生の腹は大量のグリセリン液で太鼓のように膨れ、腹部に焼き印されている〝弥生〟の文字が歪んでいた。

「いひっ、いひっ、いひっ、いひぃぃぃぃ　」

汚れた下着を被り自分の性器の匂いを嗅ぎながら声を上げ自慰する弥生の姿は、胸に焼き印された〝ヘンタイ〟の文字に相応しいものだった。その時、弥生の肛門に深く入れられていたゴム管がニュルリと抜けてしまう。そして、腰を上下に動かして自慰している弥生の肛門から液状のウンコが噴水のように噴き出した。

ビッシャーーーブリブリブリブリブリッ

「あっびょぉぉぉぉーーーーー　」

弥生は肛門から激しくウンコを噴出しながら腰を動かし自慰をする。辺りに悪臭が漂い周りの河童は顔をしかめるが、弥生はウンコを噴出しながら、さらに興奮したように自慰をしている。まさに変態の極みだった。媚薬の効果だけで、普通の人間がここまでの痴体を演じる事はあり得ない。これは弥生本来の性癖が表面化しているのは間違いなかった。弥生は本当は異常な事に興奮する変態だったのだ。そこへ再び一本鞭が弥生の体に叩き込まれる。弥生の体に釣り針でぶら下げられた重りが一本鞭の打撃で引き千切られ飛んでいく。

ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシィィィーーーー!!

「あひぃぃぃぃ　いぐ、いぐぅぅぅぅーーーー」

プッシャァァァーーーーー

なんという事か変態の弥生は自慰しながらウンコを噴出し鞭で打たれ、また潮を吹き頂点に達していた。弥生の胸とクリトリスの重りは全て鞭の打撃で叩き落とされていた。頂点に達した弥生は大きく股を開いて性具を膣に入れたまま放心したように立っている。その弥生の性器に最大出力にした電流が流される。

「あばばばばばばばばばばばばば　」

弥生はぶるぶると激しく震え性器からは煙が上がってきた。そこへ乳首へも電流が流される。

「あっぴゃぁぁぁぁ　ぷぷぷぷぷぷぷぷ　」

弥生は一際高く悲鳴を上げると、がに股になり、覚醒したようにまた激しく腰を上下に動かし始めた。

「マンコ壊して、マンコ壊して、弥生のマンコ壊してぇぇぇぇぇーーーーー」

ぶりぶりぶりぶりぃぃぃ

弥生は大声で絶叫すると、またウンコを漏らしながらさらに激しく腰を動かす。そのあまりに激しい腰の動きと、性器に通電される電流で弥生の性器は損傷し血が流れ出していた。

「あばばばばばばばば　いぐぅぅぅぅーーーー」

プッシャァァァーーーーー

弥生はまた潮を吹き、白眼を剥いてガクッと気絶した。次に弥生が気が付くと両腕の拘束が解かれ、逆に足首に枷が装着され、その枷から出ているチェーンは巨大な岩につなげられていた。

「ふふふ、両手を自由にしてやった　意味が分かるだろう　もうすぐ貴様のクリトリスともお別れだ　両手を使って存分に自慰しろ」

弥生は被っている自分の下着をとると、なんとそれを味わうように重りを付けられた口に入れ、充分に自分の性器の味を味わった後、今度は黒焦げにされた膣に押し込んでいき、大きな綿の下着全て膣の中に押し込んでしまった。そして、包皮を切除され剥き出しにされたクリトリスを指で転がすように刺激しだした。

「おっ、おっ、おっ、おっ、おっ　」

弥生の口から声が漏れだし、下着を詰めた膣は白濁した粘液で激しく濡れていた。弥生は膣に詰めた下着をずるずると取り出すと、その白い綿の下着は弥生の分泌した粘液でぐっしょりと濡れている。弥生はその下着を恍惚の表情で眺めると、また頭に被った。そして、後ろに倒れ仰向けに寝転ぶと脚を大きく開き、ブリッジのように腰を高く持ち上げ右手で地面に転がっている石を握り締めた。

「うひぃうひぃうひぃ　マンコ、マンコ、死ねぇぇぇーーー」

弥生は握り締めた石で自分のクリトリスをガンガンと叩き潰す。常軌を逸した行為だった。弥生の異常性欲が如実に表れている。弥生の小さな突起は弥生自身の手でグシャグシャに叩き潰されていく。

「うひっ、うひっ、うひっ、うひっ　いぐ、いぐぅぅぅーーーー!!」

弥生のブリッジが爪先立ちになり、さらに腰を高く上げ、狂ったように自分のクリトリスを石で叩き潰す。

ガン、ガン、ガン、ガン、ガン

グシャ、グシャ、グシャ、グシャ、グシャ

もう弥生のクリトリスは無惨に潰れ、肉片となって石にこびりついていた。それでも弥生は自分の性器を石で思い切り打ち続ける。膣前庭窟も裂け血が流れ出している。

「あぴゃ、あぴゃ　ぎもぢいいでずぅぅ」

弥生は、もう潰れて消滅した自分のクリトリスと割れ目をまだ石で殴り続け頂点に達しようとしていた。

「あぴゃ、あぴゃ　イキますぅぅぅ　あぁぁぁぁぁーーーーー！！」

プッシャァァァーーーーー

噴水のように潮を吹いた弥生は力尽きたように地面に大の字になり動かなくなった。

「自分で自分のクリトリスを潰すとは、なかなか頭のおかしい面白い女だ　お前らのこの人間の女を好きなように犯すがいい」

〝千餐王〟の言葉に河童の群れが大の字になっている弥生に群がっていく。弥生は膣と肛門を同時に犯され声を上げていた。弥生はそれから数時間に渡り休みなく犯され続ける。弥生はもう膣も肛門も感覚が失くなっていた。そして、注入された媚薬の効果が薄れてくる。

「いやあぁぁぁぁぁーーーーーー」

正気に戻った弥生は河童に犯されている自分に気付き悲鳴を上げた。そして、焼き印を捺された自分の姿にも気付き絶望する。もし、ここから逃げ出せたとしても、この恥ずかしい焼き印を捺された体では二度と普通の生活をおくる事は出来ない。弥生は自分の膣、肛門からドロッとした白い粘液が溢れているのを見て泣き出していた。

「くくく、ようやく夢から覚めたようだな　ここからはもう苦痛しかない事を覚悟しておけ」

弥生はまた性器を破壊される為、両腕を高手小手に縛られ開脚逆さ吊りにされた。もう、クリトリスも小陰唇もない弥生の性器が晒される。

「次は古代の西洋で行われた〝性器焼き〟という拷問だ　わざと答えられない質問をして、性器が焼かれるのを楽しんでいたらしいぞ」

青ざめる弥生の〝性器焼き〟の準備が進められていく。弥生の性器にベッタリとした固形燃料がたっぷりと塗られていく。性器の割れ目にもたっぷりと塗られ、膣や尿道の中にも塗り込められた。そして、会陰から肛門にかけても塗られていき、肛門の中にも燃料が詰められた。弥生は恐怖でぶるぶると震えていたが、そんな弥生に、また自分で拷問をお願いしろと命令される。

「ううっ……　や、弥生のマンコに火を点けて燃やしてくださいマンコが完全に黒焦げになるまで消火しないようお願いします」

弥生は自分で言いながら、その残酷な拷問に震えが止まらなかった。が、一方で性器が焼かれる自分の姿を妄想し興奮していた。

・・・弥生のマンコ、本当に燃やされるんだ　ここまで徹底的にやって貰えると嬉しいです　・・・

弥生は自分で考えながら、ドキッとして頭を振ってその考えを追い出すが、自分の中に芽生えてしまった気持ちを否定する事は出来なかった。

・・・私、本当はマンコ壊されるの期待しているの　本当はマンコ

壊されるのが嬉しいの　・・・

そんな弥生の気持ちなどまるで関係なく、弥生の性器に火が点けられる。弥生の性器が一気に燃えあがった。

「ひぎぃぃぃぃぃーーーーー！！　あづいぃぃぃぃぃーーーーーーー！！！　」

性器に火を点けられる前に考えていた事など全て吹っ飛び、弥生は断末魔の悲鳴を上げる。逆さに吊られた弥生は必死に腰を動かし火を消そうとするが、そんな事で火が消える筈がなかった。弥生の性器はジリジリと火で燃やされていく。弥生は激しく腰を前後にブンブンと動かし火力を弱めようとするが、それは逆に火力をアップさせていた。

「あづ、あづ、あづぅぅぅぅーーーーー　もおだじげでぇぇぇぇーーーー！！　なんでもじまぢゅうぅぅぅぅーーーーー　」

弥生は無様に泣き叫び、火を消してくれるなら本当に何でもする覚悟だった。弥生を知る者が見たら、こんな惨めで無様な弥生の姿は信じられないだろうが、これが現在の弥生の嘘偽りのない本当の姿だった。

「あづぅぅぅぅーーーー！！　ゆるじでぇぇぇぇーーーーーー！！　」

両腕を縛られ開脚逆さ吊りで性器を燃やされている弥生。弥生は生きながら性器を燃やされ狂ったように咆哮し両腕の拘束を解いて火を消そうと必死に腕に力を入れるが、簡単に拘束が解ける訳はなく縛られている縄と腕が擦れ血が滲んでいた。それ程の苦痛を弥生

は与えられていたのだ。泣き叫び暴れる弥生の股間で無情に激しく火が燃える。

「あづいよぅぅぅぅ　だれがだずげでぇぇぇぇーーーー」

股間で火が燃え上がり泣き叫ぶ弥生の姿を河童たちは笑いながら見ていた。そこへ一本鞭を持った河童が弥生の前に立つ。弥生はその河童の存在に気付く余裕もなかった。河童は弥生の股間で燃えている火を見つめると鞭を構えた。どうやら弥生の燃やされている性器を更に痛め付けるつもりらしい。

ヒュン

鋭い音の後、弥生の燃やされている性器に鞭が叩き込まれる。それはちょうど弥生の割れ目をぴったりと打ち据えた。

「はぎゃぁぁぁぁぁ！！　いだいぃぃぃぃーーーー！！」

弥生は絶叫し、また身体を海老のように反らせて泣いた。泣いても許される訳はないが、それでも涙が止まらずに流れ落ちていた。そして、一本鞭は続けて弥生の性器に叩き込まれる。

バシィ、バシィ、バシィ、バシィ、バシィ、バシィ、バシィ、バシィ

「あばぁぁぁぁぁーーーーー　いだい、いだいよぉぉぉぉーーーー！！」

弥生の性器はもうぼろぼろになっていた。燃やされながら鞭で打たれるという凄まじい拷問が続けられ、鞭で打たれる度に弥生の焼け爛れた性器の肉片が飛び散っていた。そして、ようやく弥生の性

器を燃やしていた火が消えた。弥生の性器は黒焦げになり、辛うじて割れ目があるのが分かる状態だったが、更に弥生は責められる。

「さて、これはサンダーという人間が開発した機械だ　回転ヤスリというのか　表面を削り取る事が出来るものだ　もう分かるだろう　このサンダーをお前の体にかけてやる　この先端に円筒形のヤスリを装着して、もう濡らす事も出来ないようにバルトリン腺毎、完全に削り取ってやるからな　」

まだそんな事をされるのかと弥生は恐怖と絶望で言葉もなく泣いていたが、別の事も考えていた。

・・・私のマンコ、そこまで徹底的に壊されてしまうんだ　でも、どれだけ痛くて苦しいの　早くやって欲しい　・・・

薬の力とはいえ、一度覚醒してしまった弥生の異常な性癖は、その拷問を期待してしまっていた。開脚逆さ吊りにされた弥生の膣にサンダーに取り付けられた円筒形のヤスリが挿入されていく。ヤスリは弥生の膣にすっぽりと収まっていた。弥生は、ドキドキと胸を高鳴らせ、その時が来るのを期待していた。

・・・もうすぐ、私のマンコの穴、処刑されて失くなります　・・・

弥生のバルトリン腺からは最後の粘液が大量に分泌されていた。

４０話　肛門からウンコを噴出し、性器に火を点けられ燃やされる弥生（後書き）

ついに弥生のクリトリスが消滅し、いよいよ次回では弥生の膣が削り取られ完全に破壊されます。

性器を完全に破壊される哀れな弥生に一言かけてやって下さい。

41話　ついに子宮が爆破され、性器を完全に破壊される弥生

（前書き）

ついに弥生の性器が完全に破壊されてしまいます。いくら変態の弥生とはいえ、ここまでやられたら、もう生きてはいられないでしょう。

今回の拷問
膣切削
ノコギリ曳き
三角木馬
子宮爆破

４１話　ついに子宮が爆破され、性器を完全に破壊される弥生

４１話　ついに子宮が爆破され、性器を完全に破壊される弥生

開脚逆さ吊りにされた弥生の膣にサンダーに取り付けられた円筒形のヤスリが挿入されていく。直径５０ミリの円筒形のヤスリは弥生の膣にすっぽりと収まり、サンダーのスイッチが入れられるのを待っていた。スイッチが入れられ切削が始まれば弥生の膣はバルトリン腺毎全て削り取られ、もう二度と濡らす事は失くなる。弥生の性器で小陰唇とクリトリスはすでに切除や潰されて消滅していた。これで膣が消滅すれば、弥生の性器で残っているのは子宮と卵巣と残り少なくなっていた。

「くくく、覚悟が出来たら合図するのだ　過去に膣が削られた女で生きていた女は少ない　ほぼ全員、激痛と自分の膣が削られるショックで無様に死んでいった　貴様はどうかな　」

楽しそうに〝千餐王〟は笑う。開脚逆さ吊りの弥生は涙を流し震えていた。膣が削られる。これも弥生の中では想像した事もない拷問だった。

「はひゅー、はひゅー　」

弥生はこれから起こる事態を想像し耐えようとするがそれは無駄だった。

ギュイーン！！

弥生の膣の中でサンダーが高速で回転を始める。弥生の膣壁がサンダーで削り取られていった。弥生の股間からは肉片と血が辺りに激しく飛び散った。

「あぎゃぁぁぁぁぁぁーーーーーーー！！」

とても耐えられるものではない。この拷問を受けた女性がほぼ、ショックで死んでいるというのも、実際に経験して弥生は納得出来た。膣壁を削られるという実際の痛みに、自分の大切な膣が削られていくという精神的なショックはかなりのもので弥生が普通の少女であったなら間違いなく発狂して死んでいただろう。弥生が辛うじて生き残れたのは、自分の膣が削られるという拷問に弥生は期待して興奮していたからに他ならない。弥生が正真正銘の変態だったから、なんとか生き残る事が出来たのである。しかし、現実に弥生の膣はどんどん削り取られ肉片になっていく。

ギュイーン！！

「あぎゃぁぁぁぁぁぁーーーーーーー！！」

弥生の膣壁はもう完全に消滅し、股間にあるただの穴になっていた。弥生の股間はクリトリスも小陰唇も失くなり、残っていた膣も弥生の股間にぽっかりと口を開けた黒い穴にされていた。

「あぁぁ　あぁぁぁ　あぁぁぁ　」

弥生の泣き声が響いている。弥生はショックで死ぬことなく生き残っていたが、それでも自分の膣が消滅した事で衝撃を受けていた。

しかし、当然だがまだ弥生は許されない。

「膣を削られて良く生きていたものだ　くくく、次は〝ノコギリ挽き〟という拷問だ　まあ拷問というより処刑だが、殺す前に止めてやるから心配するな　これも江戸時代の日本で行われていたものだ　これを考えた先祖の奴らに感謝するんだな　なあに貴様の股間の割れ目を本当の割れ目にしてやるだけだ」

弥生の脚が今まで以上に大きく開脚され、弥生は〝T〟の字の形に吊られていた。当然、弥生はこの拷問を知っている。〝千餐王〟が言っているように、これは拷問ではなく処刑だった。日本だけではなく中世のヨーロッパで実際に行われていた処刑である。魔女だと疑われた少女が逆さに吊られ、性器をノコギリで曳かれて殺される。弥生は当時の資料でその様子を描いた画を見た記憶がある。弥生はそのノコギリ曳きの処刑を、今自分が実際に執行されようとしている事に恐怖していたが、同時に興奮もしていた。もし、弥生の膣がまだ残っていたら激しく濡らしてしまっていた事だろう。弥生のそんな思いなど関係なく拷問の準備が進められていく。脚を水平まで無理矢理開かされ、Tの字に固定された弥生は、今まで以上に体をがっしりと押さえられる。そして、弥生の僅かに確認出来る性器の割れ目にノコギリの刃が当てられた。

「ひいぃぃぃぃーーーーー！」

そのノコギリの刃の冷たい感触に恐怖で悲鳴を上げる弥生だが、ノコギリを手にした河童は楽しそうに笑っている。そして、躊躇なく弥生の性器を割れ目をノコギリで挽きだした。

「あぎゃぁぁぁぁぁぁーーーーーーーー！！！」

絶叫する弥生の性器がノコギリでどんどん挽かれていく。河童はまるで木材でもノコギリで挽くように弥生の割れ目をノコギリで曳いていく。弥生の恥骨がノコギリで削られていく耳障りな音が響いていた。弥生の切り裂かれた割れ目からは血が溢れだし、弥生の体を赤く染めていった。

「いいぞ　もっと苦しむのだ　ゆっくりとノコギリを挽け　この女に最大の痛みを与え続けてやれ　」

弥生はえびのように体を大きく反らせ絶叫しながら性器をノコギリでゆっくりと挽かれていく。それは地獄の激痛だった。

「あっびゃぁぁぁぁぁーーーーー！！　だじげでぇぇぇーーーー！！　」

性器ノコギリ挽きの拷問は弥生の割れ目、膣前庭窟を真っ二つに切り裂き、会陰や肛門も切り裂いていく。

「あっびゃゃゃゃゃーーー！！　いだいぃぃぃーー！！　もお、ごろじでぐだぢゃいぃぃーーー！！　」

無様に泣き喚く弥生の恥丘を半分程切断したところでノコギリ曳きは止められた。弥生にはまだ次の拷問が待っていたる為だ。逆さに吊られていた弥生がようやく降ろされ、性器から血を流しビクンビクンと痙攣し死んだようにごろんと横になっている弥生の横に次の拷問の道具が運ばれてきた。

「人間というのはよく考えるものだな　これは貴様も見ればすぐに分かるだろう　三角木馬だ　人間の女の性器を痛め付ける為だけに特化した拷問具だ　女の性器責めの道具の中でも“洋ナシ“と並ん

で王道の一つだろう　これで拷問にかけられた女は痛みに耐えられず、すぐに口を割ったというが、後年は女は口を塞がれ、ただ性器を痛め付けて楽しむ為に使用されていたようだ」

弥生のすぐ横には鋭利な角度の三角木馬が用意されていた。

・・・私のマンコ、ノコギリで切られてるのに……　・・・

弥生は信じられない思いだったが、すぐに高く持ち上げられると脚を開かされ三角木馬に跨がらせられてしまう。ノコギリ曳きで切断されている弥生の性器に三角木馬の鋭角が鋭く食い込んでいく。

「ぼぎゃぁぁぁぁぁぁーーーーーーーー！！」

裂かれた性器を三角木馬でさらに裂かれ弥生が再び大きく絶叫する。弥生の股間からは激しく血が溢れだしているが、その弥生の足に容赦なく重りが下げられていく。ノコギリで切り裂かれた弥生の性器が、さらに三角木馬で裂かれていった。

「あぎゃぁぁぁぁーーーー　じぬぅぅぅぅーーーーー！！」

弥生の股間に三角木馬が食い込み、どぼどぼと血が流れている。普通に三角木馬に跨がされるだけでも女性にとって耐え難い激痛であるのに弥生はノコギリ曳きで性器を切り裂かれてから三角木馬に跨がされている。それは並の女性には耐えられないレベルの苦痛だった。

「もっと重りをさげろ」

”千餐王”は残酷に命ずる。弥生の足にはさらに重りが追加され

ていく。３０キロ、４０キロ、５０キロ。

ブッシャァァァ！

弥生の性器から血が噴き出し、弥生は白眼を剥いて口からぶくぶくと泡を吹いている。弥生の脚はピーンと伸びきり骨がギシギシと鳴っていた。

「ひぎぃぃぃぃーーーー　いだいぃぃぃぃ　裂ける、裂ける、本当に裂けるぅぅぅぅーーーーー！！」

弥生の性器が裂かれていき血が大量に溢れだすが、弥生の足にはまた重りが追加された。６０キロ、７０キロ、８０キロ、９０キロ、そして１００キロ。

「あっびゃぁぁぁぁーーーーーー！！！！」

容赦なく重りを追加され弥生はもう頭の中が真っ白になり何も考えられなかった。弥生の足の間接は伸びきり、弥生は動く事も出来ず天を仰いで絶叫している。その弥生にさらに苦痛と絶望を与える為、弥生が大切にしていた日本人形のような長い綺麗な黒髪がバッサリと切られていき、ざんばら髪にされてしまう。そして、弥生の頭に電極が装着され、電流が流された。

「あばばばばばばばばばばばばば　」

そして、弥生の下腹部ビキニラインにも電線が付いた釘が根元まで打ち込まれ、そこにも電流が流される。

「あばばばばばばばばばばばばば　」

飛び出しそうなほど大きく目を見開き、舌も突きだしぶるぶると体を震わせる弥生の恥骨がついにパリーンと割れてしまう。それまで弥生の体を支えていた恥骨が割れ、弥生の性器は一気に裂かれていき、血が噴き出した。

「あっびゃぁぁぁーーーーーー　じぬ、じぬ、じぬうぅぅぅーーーー！！　」

恥骨が割れ弥生の性器は三角木馬の鋭角が食い込み本当に裂かれていた。その上、頭と下腹部に電流も流されている。弥生がどれ程の苦痛に見舞われているのか、それは筆舌に尽くし難いものだったが、弥生はさらに一本鞭で体を打たれる。まさに地獄だった。このまま放置され弥生の腰骨も折れてしまえば弥生の体は残酷に少しずつ裂けていき、絶命してしまうのは間違いなかった。が、弥生をこの三角木馬で殺すのが目的ではない。弥生は三角木馬から降ろされていく。そして、三角木馬から降ろされた弥生は脚を大きく広げられ、裂かれた性器を晒される。〝千餐王〟は笑みを浮かべると、ぐったりと虫の息で地面に横たわる弥生に次の拷問を告げた。こんな状態の弥生でも、当然まだ許される事はないのである。

「次は子宮爆破だ　女の大切な部分を爆破してやる　過去にここまできた女は数人いたが、みんなここで死んだ　子宮が爆破される恐怖と激痛と精神的なショックは相当なものらしいぞ　弥生、お前はこれを耐えられるかな　」

〝千餐王〟は初めて弥生の名を呼んだ。おそらく弥生もここで絶命すると考えていたのだろう。性器を裂かれた弥生はガタガタと震えていた。今まで弥生は自分の性器が痛め付けられる妄想で自慰していたが、さすがに性器が破壊される事は想像していなかった。け

れど、今弥生は実際に性器を破壊され残った最後の子宮も破壊されようとしている。

「ううぅぅぅーーーーー」

弥生は泣いていた、ここまでされても、まだ許される事はない。自分の性器は間違いなく完全に破壊されるのだ。そして、それはすぐそこまで迫っている。弥生は涙が止まらなかった。弥生は両腕を高手小手に縛られたまま、また開脚逆さ吊りにされた。そして、弥生の痛々しく裂かれている股間に開創器の爪がかけられグイッと広げられたまま固定される。

「うぎゃぁぁぁーーーー　いだいぃぃぃぃーーーー」

裂かれた性器をさらに広げられ弥生は泣き叫ぶが、裂け目の奥に赤黒い子宮が確認され、小さな子宮口に乱暴にチューブが挿入され、爆薬が子宮に詰められていく。弥生の性器破壊もついに最終段階にきていた。弥生の子宮に大量の爆薬が詰め終わるとチューブが抜かれ導火線が付けられ開創器が外される。弥生も自分の性器の最後を悟り嗚咽している。弥生のその哀れで痛々しい姿を見れば人間であれば同情心が起こるものだが、その泣いている弥生の顔の前で導火線に点火された。

「あぁぁぁーーー」

火の点いた導火線を見て弥生が声をあげる。

シューーッ

恐怖で固まる弥生の前で導火線がどんどん短くなっていく。

「ふぅぅふぅぅふぅぅふぅぅぅぅ　」

息が荒くなる弥生の前で導火線は弥生の股間の中に消えていった。
次の瞬間だった。

パアァァァン！！

ビシャアァァァァ

爆発音が響き弥生の下腹部が一瞬大きく膨らみ、裂かれた弥生の性器から血と肉片が噴火のように噴き出した。

「あっびゃぁぁぁぁーーーーーー　あびゃびゃびゃびゃ　」

一瞬遅れて弥生の絶叫が響き渡たる。弥生の子宮は爆破され一瞬でミンチ状態になり消滅していた。

「子宮を爆破されて生きているとは素晴らしい　これは最高の尻子玉を取得出来そうだ　いよいよ最後の性器拷問だ　股間穿孔　これで貴様の股間一帯は全て消滅する　」

洞窟内の岩の上に、直径５００ミリはある巨大なドリルがセットされ試運転が開始される。ドリルは回転しながら降ろされていき、ドリルは岩に簡単に穴を空け、また上に上げられた。岩にはぽっかりと丸い大きな穴が空いていた。

「もう分かっていると思うが、このドリルで貴様の股間を穿孔するふふふ、貴様の股間から下腹部はこれで消滅するわけだ　」

ドリルは弥生の開脚した股間の真上に移動されセットされる。あとは操作盤のボタンを押すだけで弥生の股間から直径５００ミリあるドリルは穴を空け、まだ残っている弥生の膀胱や卵巣、直腸などを全て肉片に変え消滅させるのだ。もちろん、そこまで破壊されて弥生が生きていられる訳がない。弥生の周辺にはもう死の匂いが漂っていた。

４１話　ついに子宮が爆破され、性器を完全に破壊される弥生（後書き）

次回、弥生は処刑され完全に絶命します。あの魍魎討伐者“青姫“の無様な末路を楽しんで下さい。

一言感想頂けると嬉しいです。お願いします。

最終話　巨大なドリルで完全に性器にトドメを刺され無様に絶命する弥生（前書き）

このエピソードの最終話であると同時に「移ろう季節に想いを馳せる君2部」の最終話になります。
ついに弥生の最後の時がやってきます。本編を読んでいる方は色々ショックなエピソードだったかも知れませんが西園寺弥生は、ここで無様に処刑されて絶命します。弥生が戻ってくる事は二度とないでしょう。
今まで以上に弥生が残酷に殺害されていくので苦手な方は読まないようにして下さい。

今回の拷問
両腕切断
木杭の刑
乳首切除
乳房切除
顔面破壊
股間穿孔
串刺し
火炙り

最終話　巨大なドリルで完全に性器にトドメを刺され無様に絶命する弥生

最終話　巨大なドリルで完全に性器にトドメを刺され無様に絶命する弥生

逆さに吊られている弥生は頭を動かして自分の真上にある巨大なドリルを確認した。弥生はごくりと唾を呑む。あんな大きなドリルが降りてきたら弥生の股間から下腹部は全て抉り取られてしまうだろう。つまり、弥生の性器が完全に消滅するのは勿論、両脚も太ももから千切れてしまうのは間違いないと思われた。

「ううっ　怖い　怖いですうぅぅ　」

性器を破壊されるのも勿論怖かったが、弥生はその一方でどこかそれを期待している自分に気が付いていた。以前、玉藻の前に股裂きされ、性器が裂け小便と血を噴出した時、下着は脱がされていなかったのが幸いして、見ていた刹那も気が付かなかったが、弥生は興奮して潮も吹いていたのだ。刹那に急いで着替えを頼んだのも、それを気付かせない為だった。弥生は性器を裂かれて興奮する。そんな異常な性癖を持つ自分を今はハッキリと自覚していた。

・・・もしかしたら私、いつかこうして性器が破壊されるのを期待して“青姫“になったのかも知れない　どうしようもない変態だ
先輩、ごめんなさい　・・・

とはいえ殺されるのは勿論怖かった。弥生の理想は生きて性器を

痛め付けられ続ける事。殺されてしまっては全てが終わってしまう。だから、殺されたくなかった。なんとしても生きていたかった。が、弥生の生きていられる時間はもう残り少なくなってきている。助けが来る事はあり得ないし、こんな体にされてはもう生きてはいられないというのも本心だった。

「ふふふ　この股間穿孔で西園寺弥生、お前の命は尽きるだろう股間穿孔の前にお前の目も口も塞いでおく、見えない恐怖に怯えるがいい　なのでこれから何をされるか伝えておこう　このドリルの大きさを見ればお前の下腹部は全て消滅するのが分かるだろう　その前にもう両腕もいらないだろうから切断してやる　穿孔が終了しても生きていた場合には股間から口まで串刺しにしてから火炙りにする　弥生、お前が完全に絶命するまで徹底的に痛め付けてやるからな　どれだけ素晴らしい尻子玉が手に入るか　楽しみだ　うははは」

〝千餐王〟は震える弥生の前で楽しそうに笑う。

「そうそう、私はアイテム〝命の雫〟というものを持っている　使った事はないが、これは死んだ者を生き返らせるという効果があるらしい　今まで使い途がなかったが、いい考えが浮かんだぞ、弥生　お前を殺した後、このアイテムで生き返らせる　そして、またお前の性器を拷問して殺す　これを永遠に繰り返してやる　私はその度に尻子玉を手に入れレベルアップ出来るという訳だ　それにここは亜空間、誰も入っては来れない　ゆっくりと時間をかけて痛め付ける事が出来るのだよ」

〝千餐王〟の言葉に弥生は希望を見出だしていた。永久に性器を拷問され続ける。その甘美な想像に弥生は腰を前に突き出していた。

「いひっ、いひっ　」

弥生はもう本人も気付かないうちに発狂してしまったのかも知れない。弥生は永遠の牢獄で性器を拷問され続ける事に興奮していたのだ。

・・・私、ずっとマンコを破壊され続けるのですね　青姫の名を汚した変態の私に相応しい末路です　卯月先輩、ごめんなさい　それに、みんなもごめんね　・・・

弥生は、刹那や八千穂、柚希の事を思い出していた。もう二度と彼女たちに会うことはないだろう。色々な事が思い出される。居酒屋でお酒を飲んだこと。カラオケで歌ったこと。一緒に強敵と戦ったこと。懐かしく思い出される。そして、先輩の神宮寺卯月。卯月にあれだけ期待されていたのに自分の不甲斐なさに涙が止まらない。卯月は命をかけて、あの崇徳上皇を倒したというのに、自分はこんな所で誰にも知られず何も出来ず性器を破壊され始末される。

・・・ごめんなさい　弥生はもう終わりです　ふふ、私、どこで発狂するのかな　マンコを壊され続けて多分頭も狂っていくんだろうな　それとも私の頭、もう狂っているのかな　どうせなら早く狂って欲しいな　そうすれば、何も考えないで済むから　・・・

開脚逆さ吊りで弥生は号泣していた。思い出とこれからの自分が想像されて涙が溢れてきて止まらなかった。そんな弥生の思いなどに関係なく、弥生はノコギリ曳きの時と同じ様に両脚を水平まで開かされ〝T〟の字にされ固定される。その上には直径５００ミリのドリルが弥生の股間を狙っている。５００ミリと云えば弥生の胴とほぼ同じ太さだ。そんな物で股間を抉り取られたら弥生の下腹部は消滅してしまうのは当然だった。今までの性器という局所的な破壊

ではなく、弥生を殺す事が目的の処刑だ。それに万が一、これで生き残っても次の処刑が待っている。

・・・串刺しに火炙り……　はは、どうしようもない変態だ、私はそれもされてみたいと思っている　きっとマンコが残っていたら、ぐっしょりと濡らしていたんだろうな　・・・

自嘲する弥生の性器にいよいよ最後の処刑が開始された。弥生の目にガムテープが貼られ、次に口にもガムテープが貼られ塞がれる。弥生の真上にある巨大なドリルは高速に回転を始め、弥生の性器に向かって降りてくる。

ギュウーーーン

「ふぅふぅふぅふぅふぅふぅ　」

ドリルの回転音とそれが近付いてくる雰囲気で弥生の鼻息が荒くなり、遠目にも分かるほど弥生の体は大きくぶるぶると震えていた。そして、ドリルの尖端が弥生の股間に接触する。わずかに血と肉片が飛び散った。

チュイーーーン

「ふごぅふごぅふごぅぅぅぅーーーー　」

恐怖で弥生が塞がれた口で絶叫するが、ドリルはその位置で停められていた。

「ふごっふごっふごっふごっふごっふごっ　」

何も見えない弥生は必死に何か叫んでいる。ここで弥生の両腕の拘束が解かれ左右に広げられる。〝千餐王〟の言葉通り弥生の腕が切断されるのだ。ここで弥生の脇の下にワキ毛が生えているのが確認された。処理忘れという事ではなく、明らかに伸ばしている。恥丘の陰毛はきちんと脱毛処理を施しているのに、何故ワキ毛は伸ばしているのか、弥生本人に訊かなければ理解出来ない事であった。そして、弥生の腕を切断する準備が整う。といっても腕だけが一回で切断されて終わりではない。弥生に苦痛を与える事が目的なので、指、手首、肘、肩口と順番に切断されていく。まず弥生の左右の人差し指がニッパーで挟まれた。

バチィィィ

「ふごうぅぅぅーーーー！！」

弥生の指が左右同時に切断されコロンと地面に落ち転がった。次は中指だ。

バチィィィ

「ふごうぅぅぅーーーー！！」

続けて連続で弥生の指が切断される。

バチィィィ、バチィィィ、バチィィィ

「ふごごごぅぅぅーーーー」

弥生の指は全て切断されてしまった。すると今度は太い木の枝を切断する巨大な枝切りバサミで弥生の手首が挟まれる。

ヂャキーーン！

「ふんごぉぉぉぉぉーーーーーー！！！！！　」

弥生の手首があっけなく切断された。次にハサミは肘に移動し、弥生の肘の関節毎腕を断ち切る。弥生の絶叫が響くが、ハサミは肩口に移動する。これで弥生の両腕は完全に失くなるが、肩の骨を断ち易くするため、まず折られる事になった。弥生の肩が押さえられ無理矢理反対方向に曲げられる。

バキィィィッ！

「ふごごごごぅぅぅぅーーーーー！　」

ヂャキィィーーン！

「ふんごぉぉぉぉぉーーーーーー！！　」

骨が折られた次の瞬間、弥生の腕が切断された。切断面には焼きごてが当てられ出血が止められる。両腕を失った弥生が〝T〟の字に吊られ哀れに揺れていた。

「いい姿じゃないか　せっかくだ　〝木杭の刑〟も与えてやろう　」

弥生はドリルで性器を完全に破壊される前に、木杭を打たれる事になった。直径１５０ミリの太い木杭の尖った先端が弥生の恥丘に当てられ、ハンマーが用意される。そして、ハンマーが容赦なく振られる。

ガィーン！！

ブシャァァァーーーー

「ふんごぉぉぉぉぉーーーーーー！！」

弥生の恥丘に太い木の杭が打ち込まれ、血と膀胱に残っていた尿が噴き出す。続けてハンマーがガンガンと木杭を弥生の恥丘に打ち込んでいく。

「ふがあぁぁぁぁーーーーー！！」

一際高い弥生の絶叫の後、木杭の先端が弥生の尻に突き抜けた。木杭は弥生の膀胱や腸を破壊し、尻の割れ目から突き出て、先端からは血が滴り大便がこびり付いていた。弥生は恥丘から尻まで太い木杭を貫通され、呻き声を上げながら体をビクンビクンと大きく痙攣していた。弥生の唯一自慢出来るかも知れない形の良いツルツルの恥丘は観る影もなかった。弥生の恥丘から尻まで木の杭が貫通し突き出ている光景は異様だった。

「腕も失くなって杭も恥丘に貫通されて、無様でいい体になったではないか　後はこの小さな胸か　こんな小さな胸、切断しておかないと死んでから可哀想かな　それと……　おい　」

〝千餐王〟は近くの河童を呼び指示を出す。河童は鋭利なハサミを持って弥生に近付き、弥生の乳首を摘まみハサミで挟む。

「ふぐぅ　」

弥生がビクッと体を震わせるが、ハサミは容赦なく閉じられ弥生

の乳首は乳輪毎切り取られる。

「ふぐうぅぅーー！」

もう弥生は死の寸前なのか悲鳴にも力が失くなっていた。しかし、当然ながらそんな事には関係なく弥生のもう一つの乳首も残酷に切除されてしまう。乳首の失くなった弥生の胸の膨らみが哀れに震えているが、弥生はその乳房も切除される。カッターのような鋭い薄い刃のナイフが弥生の小さな胸の下に当てられ切り取られていく。

「ふぐうぅぅーーーー」

弥生が力のない悲鳴を上げるが、弥生の小さな乳房は左右続けてベロンと切除される。嗚咽する弥生の鼻が摘まれ、なんと鼻もナイフで削ぎ取られた。続いて左右の耳も削ぎ取られてしまう。まだ終わりではない。弥生の顔面に棍棒が叩き込まれた。何度も何度も容赦なく。弥生の頭蓋骨にヒビが入り、眼球は潰れてしまった。そして、いよいよ５００ミリの巨大ドリルが高速に回転し降りてくる。

チュイーーーン

ブチ、ブチ、ブチ、ブチ、ブチ、ブチ、ブチイィィィィィーー！！

「ふんがぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーー！！！！！」

弥生の股間の肉がドリルで千切られ抉り取られ、血と共に肉片となって飛び散っていく。弥生はエビのように大きく背中を反らせ絶叫している。しかし、もうドリルは止まらない。弥生の股間を全て肉片に変えるまで、もう処刑が停止する事はないのだ。

「ふんがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーー！！！！！」

まさに断末魔の絶叫。さらにドリルは下がっていき弥生の大陰唇はもう消滅し、恥丘を貫通していた木杭は簡単に粉砕された。そして、弥生の卵巣や膀胱、腸が粉々の肉片となって消滅していく。ドリルの回転で弥生の尿や大便も一緒に飛び散っていた。

「ふんごぉぉぉぉーーーーー！！」

大きく絶叫し続けている弥生の悲鳴に力が失くなってきた。そして、下腹部が消滅した弥生の脚が太ももの付け根からブチィィッと千切れる。弥生の体は地面に落下して芋虫のように転がり、消滅した下腹部の内からは内臓がこぼれ落ちた。弥生の体は、ヘソから下が失くなっていた。

「あひゃひゃひゃひゃひゃひゃ　」

地面に転がる弥生の口からガムテープが剥がされると弥生は小さく声をあげていた。しかし、それはもう常人のものではなかった。弥生の精神は苦痛に耐えきれず崩壊し発狂してしまっていた。性器を拷問され続けて発狂した挙げ句に殺される。異常な性欲を持った弥生には相応しい惨めな末路といえた。もう、弥生の頭の中には、先輩も仲間も何もない。この後、無様に処刑されて殺されるのを待つだけだった。

「ほう　発狂したとはいえ、まだ生きているとは途轍もない生命力だ　嬉しいぞ　よし、急いで串刺しにしろ　」

すぐに弥生の消滅した下腹部から鉄パイプが突き入れられ、先端が口から突き出される。

「ゴッパァァーー　」

鉄パイプが口から飛び出し、胃を貫通された弥生は激しく血を吐き出した。

「よーし　次は火炙りだ　じっくりと回転させてこんがりと焼いて殺してやれ　」

弥生は燃え盛る火の上に串刺しにされたまま置かれる。そして、豚の丸焼きのようにクルクルと回されていった。弥生の髪の毛はあっという間に火が付き嫌な臭いを出して燃えていく。そして、弥生の肌も焼かれていき全身が赤く爛れ、体毛も燃え尽きる。ついに心臓も止まり、脳も焼き尽くされた。どこまで弥生が生きていたのか不明だが、弥生は黒焦げになるまで念入りに焼かれていき残酷に殺害された。性器を完全に破壊された弥生は、処刑されもう完全に絶命していた。消し炭のようになった弥生の体の中から〝千餐王〟は嬉しそうに尻子玉を取り出すと一気に呑み込んだ。

「おお、素晴らしい　力が無限に湧いてくるようだ　」

満足する〝千餐王〟の傍らで、腕と下半身の無い黒焦げになった弥生の体が無惨に転がっていた。

最終話　巨大なドリルで完全に性器にトドメを刺され無様に絶命する弥生（後書き）

如何でしょうか。
弥生は性器を破壊され完全に絶命します。もう、二度と青姫として活躍する事もないでしょう。
要望があれば、この後の弥生の顛末も書いてみたいと思いますが、あくまで番外編としてです。
本編の方はこの後もまだ続きますので興味のある方はそちらもお読みになって下さい。

一言でも感想頂けると嬉しいです。評価、ブックマークも出来ればお願いします。

最後まで読んで頂き、ありがとうございました。

番外編　男に小便を飲まされ全身を小便塗れにされながら、性器を激しく濡らし潮を吹く弥生（前書き）

番外編です。
今回は弥生の性器破壊のシーンはありません。期待されていた方、申し訳ありません。今回はスカトロ系がメインになりますので苦手な方は気を付けて下さい。

番外編　男に小便を飲まされ全身を小便塗れにされながら、性器を激しく濡らし潮を吹く弥生

番外編　男に小便を飲まされ全身を小便塗れにされながら、性器を激しく濡らし潮を吹く弥生

西園寺弥生は全裸で両手を上げ、脚を大きく開いていた。弥生の体には捺された焼き印が残っている。何度も生き返らされている弥生の体は修復されているが、焼き印の痕と処女膜だけは再生されていない。おそらく、それは弥生の心理が働いているのだろう。一度貫通された処女膜は元には戻らない。一度捺された焼き印は消える事がない。弥生がそう信じているために、その部分は元に戻らないという事のようだ。

「私、西園寺弥生はマンコを拷問して破壊してもらうと興奮する頭のおかしい変態です　今回もまた変態弥生のマンコを残酷に壊して下さい　」

「ククク、もう１０回目になると、随分、従順になったものだな、弥生　そんなに性器を壊して欲しいか　」

「はい、〝千餐王　〟様　変態の弥生のマンコはもうびしょびしょです　早く痛め付けて壊して下さい　弥生はマンコを破壊して頂く為に存在しているのです　」

瞳を潤わせ懇願する弥生の前に一本鞭を持った河童が現れ、鞭を構える。弥生は限界まで大きく脚を開くと腰を前に突き出し、頭上に上げた手を握りしめた。弥生の性器はぱっくりと口を開けだらし

なく分泌液を垂れ流していた。

「はふっ、はふっ、はふっ、はふっ　」

弥生の息が荒くなっていく。小さな胸で乳首は固く勃起し、股間のクリトリスもこれ以上ないほど固く大きく勃起していた。そして、バルトリン腺からは大量の粘液を分泌し、弥生は太ももの内側まで激しく濡らしていた。

「どうぞ、弥生のマンコをいつものように血塗れになるまで思い切り打って下さい　」

ヒュン

パシィィィ

「あぎゃぁぁぁぁーーーー　」

絶叫する弥生の性器に連続で鞭が叩き込まれる。いつものように容赦なく……。

パシィィィ、パシィィィ、パシィィィ、パシィィィ、パシィィィ、パシィィィ!!

「うびぃぃぃぃーーーー　」

弥生は脚をプルプル震えさせながら相手が鞭で自分の性器を打ち易いように腰を前に突き出す。弥生はもう完全に異常性癖を持つ変態の女になっていた。弥生の性器から分泌された白濁した粘液が鞭に打たれ周囲に飛び散っている。

「うびいいいいーーーーー　イギます、イギます、イギますうぅうぅーーー　」

弥生は性器を鞭で打たれ絶頂に達しようとしていた。これが、あの青姫だとはもう誰も思わないのは間違いなかった。この弥生の姿を卯月が見たら嘆き悲しんで死んでしまうだろうし、タダユキが見たら衝撃でショック死してしまう程の変態ぶりだった。

「いぐぅ、いぐぅ、いぐぅぅぅーー　」

ぶりぶりぶりぶりいいいい

プッシャァァァァーーーー

弥生は鞭で性器を打たれ絶頂に達し、激しく潮を吹くと同時に無様に大便も漏らしていた。

「あはは、気持ち良くてウンチも出てしまいました　弥生のウンチ汚くて臭いです　」

弥生は恍惚とした表情で次の性器拷問をおねだりする。

「次は何してくれるのですか　弥生のマンコを出来るだけ痛め付けて壊して下さい　」

大きく手を上げて股を開いた弥生は、頭の中で次にされる性器拷問を期待して、また性器を濡らし始めていた。

「その前に自分で汚した物を始末しろ　食えっ、食うのだ　」

地面に四つん這いになった弥生は、直接口を付けて自分の漏らした大便を食べ始めた。自分の大便を大きく口を開けて食べている弥生の姿はもう救いようのない変態の女の姿だった。しかも、弥生は大便を四つん這いで食べながら股間に手を伸ばし自慰をしている。

「んぐ、んぐ、んぐ、んぐ　」

ぶりぶりぶりぶりぃぃぃぃ

信じられない事に弥生は大便を食べながら自慰をし、そしてまた大便を漏らしていた。弥生の肛門が大きく広がり太い大便がむりむりと排泄され地面に落ちる。

「はふっ、はふっ、はふっ、はふっ　」

一心不乱に自分の大便を食べながら弥生は、新たに漏らした大便を手で掴み、なんと膣にぐりぐりと詰め込んでいき、性器にも塗り込んでいく。そして、大便を食べ尽くし膣にも詰め込んだ弥生は立ち上がると両手を上げ脚を大きく開いた。

「あはっ、ウンコ食べ終わりました　早く弥生のマンコ処刑して下さい　」

日本人形のような黒髪で大人しそうな顔の弥生からは想像出来ない事を口走る弥生。その弥生の前に性器を勃起させた全裸の人間の男が近付いて来た。それも一人ではない。１０人の全裸の男が歩いてくる。

「この人間の男どもに指示を出してある　私の指示通りに執行すれ

ば命は助けるという約束でな　弥生、お前は一切の手出しを禁じる
耐えられるかな　ククク、今回は人間同士で楽しんでもらおう」

〝千餐王〟は楽しそうに笑う。弥生の前に立った男たちは、弥生の両腕を背中に回し高手小手に縛り上げ、頬をいきなり平手で打つ。

パァーン

高い音がして弥生の頬が赤く染まる。

パァン、パァン、パァン、パァン、パァン、パァン

弥生は後ろから頭を押さえ付けられ、頬を打たれ続けた。弥生の頬が赤く腫れ上がっていき、口から血が流れ、瞳から涙が零れた。それでも、弥生は脚を開いて立ったまま動かない。

「どうぞ、弥生を痛め付けて楽しんで下さい」

そんな事を言いながら弥生は自分の性器を濡らし始めていた。散々頬を打たれた弥生は腕を縛られたまま正座させられる。

「上を向いて口を開けろ」

男が弥生に命令する。弥生は従順に命令された通り、上を向いて大きく口を開いた。そこへ男はジョーと放尿した。弥生の口の中に小便を入れる。たちまち弥生の小さな口の中は男の小便で一杯になる。

「飲めっ！」

男は弥生に命令する。弥生は口を閉じると、ゴクリと男の小便を飲み干した。そして、また口を開ける。そこへまた男の小便が注ぎ込まれる。

・・・私、男の人のおしっこ、飲ませていただいてる　・・・

生まれて初めての飲尿経験に弥生はまた性器を激しく濡らしていた。両腕を縛られていなければ自慰していたのは間違いなかった。弥生は男の小便をゴクゴクと飲まされ続けながら妄想していた。今、自分に小便を飲ませているのは、一度デートした事のある甲斐くん（本編2部、32話参照）だ。弥生はそう思うと、さらに興奮してきた。

次の男は弥生の頭から小便をかけ、さらに顔面、胸と弥生の体に小便を浴びせていく。これも弥生にとって初めての体験〝浴尿〟だ。弥生の日本人形のような黒髪も男の小便でびっしょりと濡れていく。弥生はこの浴尿の時も口を大きく開け、少しでも口の中に男の小便が入ってくるようにしていた。

・・・弥生、男の人のおしっこ塗れにされてる　気持ち良いです
もっと弥生を辱しめて下さい　・・・

弥生は口から舌を突き出し、舌で小便を受けながら味わうように飲んでいる。弥生が真性の変態であるのは間違いなかった。

「えひっ、えひっ、えひっ、えひっ　」

小便を浴び興奮する弥生が仰向けに寝かされ、両脚を頭の横まで上げられ、弥生の性器が上を向くように縛り付けられた。弥生の性器と肛門が晒される。今度はそこに小便が浴びせられた。弥生の性器と肛門についた大便が、男の小便で洗い流されていく。

「えひっ、えひっ、えひっ、えひぃぃぃぃーーーー」

弥生は性器に勢いよく小便を浴びせられ絶頂に達しようとしていた。が、そこで放尿は止められ、弥生は頂点にいく寸前で止められ狂ったように哀願する。

「お願いしますぅ　弥生におしっこかけて下さい　弥生のマンコにおしっこかけてぇぇぇ」

しかし、弥生の願いなど叶えられる筈がなかった。

「弥生、小便をかけて欲しければ昔の仲間に挨拶しろ」

〝千餐王〟が河童にカメラを向けさせながら意地悪く言う。

「みんな、元気ですか　弥生は性奴隷として毎日マンコを壊してもらっています　今日は初めて男の人のおしっこを飲ませて貰いました　今、弥生の汚いマンコをおしっこで洗ってもらっているところです　もう弥生は何回もイッテしまいました　これからマンコをまた壊して貰える予定です　マンコを壊される時の絶望的な痛みで弥生はきっと激しくイッテしまうでしょう　もう青姫には戻れません　弥生はマンコを壊してもらう事だけが生きがいになりました　みんなも一度壊してもらうと私の言ってる意味が分かると思います」

弥生が恍惚とした表情で言うと、また弥生の勃起したクリトリスに小便が浴びせられる。

「あっぴゃぁぁぁぁーーーー」

プシャーーーー

弥生は絶叫すると激しく潮を吹いていた。

番外編　男に小便を飲まされ全身を小便塗れにされながら、性器を激しく濡らし潮を吹く弥生（後書き）

弥生は小便をかけられるだけでイッテしまうド変態になりました。
次回はさらに変態になった弥生に罰として苦痛を与える予定です。

喉、膣、肛門を犯され潮を吹くが、最後の穴を犯され号泣する弥生（前書き）

番外編の続きとなります。
今回、弥生は最後に性器を破壊され絶命します。
苦手な方は御注意下さい。

喉、膣、肛門を犯され潮を吹くが、最後の穴を犯され号泣する弥生

喉、膣、肛門を犯され潮を吹くが、最後の穴を犯され号泣する弥生

全身を小便で洗われ潮を吹いてイッテしまった弥生に次の凌辱が行われる。弥生は台の上に仰向けで乗せられ、頭だけ台から出され倒され固定された。口から喉が一直線になる。普通の女であれば、もう自分が何をされるか一目瞭然なのだが、経験のない弥生には自分がこれから何をされるのか皆目見当もつかなかった。

「口を開けろ」

命令された弥生が大きく口を開けると男は弥生の口の喉奥深くまで自分の性器を突き入れる。

「おごぉぉぉ」

いきなり性器を突き入れられた弥生は思わずむせるが男は構わず弥生の喉の奥深くまで突き入れ腰を前後に動かす。

「おごっおごっおごっおごっ」

弥生にとって初めての経験〝イラマチオ〟だ。外から見ても弥生の喉の中を男の性器が動いているのがはっきりと分かる。

「おごっおごっおごっおごっおごぉぉぉぉ」

弥生は呼吸も出来ず涙を流して苦しむが許される事はない。男の腰が激しく弥生の顔面にぶつかり、弥生は鼻血も出していた。

パン、パン、パン、パン、パン、パン、パン！

男は激しく腰を振り弥生の喉を犯し続ける。弥生は意識が薄くなってきたが、なんと無意識に自分の腰を振っていた。

プシャーーーー

ぶりぶりぶりぶりぃぃぃ

ドピュ、ドピュ

弥生は喉を犯され潮を吹くと同時に肛門から大便も噴出していた。

時を同じくして男も弥生の喉に射精していた。

「おげえぇぇぇぇ　」

男の性器が口から抜かれ、ようやく呼吸が出来た弥生だが、すぐに次の男の性器が弥生の口から喉を突き刺す。再び弥生は呼吸が出来なくなり、顔面が真っ赤に染まってくる。

ゴキュ、ゴキュ、ゴキュ、ゴキュ、ゴキュ、ゴキュ

弥生が喉を犯される音が周囲に響いていく。弥生の顔は涙とヨダレと鼻血で酷い状態だったが、その後も弥生は喉を犯され続ける。

そして、ようやく解放された弥生は脚を大きく開かされ性器を晒される。弥生は陰毛を脱毛処理している為に恥丘はもちろん性器周辺

もツルツルで、その股間で割れ目が存在感を放っていた。弥生の性器は小振りで可愛いと言えるほど小さな貝のようであったが、膣からは分泌された粘液が多量に流れ出し、すでにびしょびしょになっていた。そして、弥生の膣口に男の勃起した性器が当てられ、ズンと突き入れられた。

・・・弥生、男の人に犯していただいてる　・・・

弥生は自分の中に生まれて初めて入ってきた男の性器に興奮していた。処女膜は拷問され破られてしまったが、人間の男の性器で犯されるのは初めてだった。

「おっ、おっ、おっ、おっ、おっ　」

無意識に声を出してしまう弥生は、性器を拷問されるのとは、また違う快感に頭の中が真っ白になっていた。その弥生の膣内に男が射精する。自分の体の中に広がる熱い感覚に弥生も絶頂を迎えていた。男が性器を抜くと、また次の男が弥生の膣に性器を突き刺す。今度は弥生は膣を犯され続け、弥生の膣はだらしなく口を開けたまま精液を垂れ流していた。

次に弥生は四つん這いにされ尻を高く突きだされる。さすがに弥生も次に自分が何をされるか理解していた。変態の弥生は、幼い頃から自分が肛門を犯されまくる事を夢想していた。その弥生の夢がかなったとも云える。

・・・弥生、お尻の穴も犯していただける　・・・

弥生は早く自分の肛門に男の性器が突き刺されないかと、今か今かと息を荒くして待っていた。

「はひっ、はひっ、はひっ、はひっ　」

弥生の肛門に冷たいローションが塗られ、男の性器が根元まで突き入れられた。

ばこ、ばこ、ばこ、ばこっ

弥生の腰が押さえられ男の腰が激しく振られる。

「いぐぅ、いぐぅぅぅーーー　」

弥生は肛門を犯され絶頂に達しようとしていた。そして、男が弥生の腸内に精液を放出する。

プッシャァァァーーーー

弥生もまた肛門を犯されて潮を吹いていた。弥生は、その後も肛門を犯され続け、ぐったりと横たわっていたが、仰向けに固定され口にもガムテープが貼られ塞がれる。今までと違う様子に弥生は何が始まるのか分からず、キョロキョロと頭を動かしていた。

「ククク、最後の穴を犯すのに少し加工するからな　うるさいと不快なので口を塞いだ　」

仰向けに固定されている弥生には見えなかったが、弥生の股間の前に鋭いメスを持った男が弥生の性器に狙いを付けていた。そして、弥生の小さな貝のような性器を開く。クパァと性器が開かれ、弥生の桜色の膣前庭窟が剥き出しにされる。弥生の小さな尿道と膣口が姿を見せている。男は弥生の尿道口にメスを突き刺した。弥生の尿道が切りさかれ血が溢れだす。

「ふんごぉぉぉーーーーー！！」

尿道を裂かれる激痛に弥生が悲鳴を上げる。しかし、男は弥生の尿道を奥まで切り裂いていく。そして、次には反対側も切り裂き始めた。

「ふごぉぉぉーーーーーー！！」

泣き叫ぶ弥生の尿道は切開されていき、男は切開された弥生の尿道に性器を当てると、容赦なく挿入した。

ズボウゥー！

「ふんがぁぁぁーーーーー！！」

絶叫する弥生の尿道に男の性器が根元まで突き刺され、男は弥生の腰を押さえ激しく腰を振る。弥生は膀胱の中まで性器を突き入れられ発狂したように泣き叫んでいる。

パン、パン、パン、パン、パン、パン

男が腰を振る度に弥生の尿道から血が飛び散る。弥生は興奮するどころではない。尿道を犯される激痛に号泣していた。そして、激しく動いていた男の腰の動きが止まる。

ドピュ、ドピュッ

弥生の膀胱の中に男は大量に精液を放出した。そして、また次の男が弥生の尿道を犯し始める。その後も弥生は尿道を犯され続けた。

弥生は股間の3つの穴から男の精液を垂れ流し放心したようにぐったりと転がっていた。その弥生のもとにハサミを持った男たちが群がってきた。そして、弥生の貝のように小さな性器の小陰唇を摘まみ引き伸ばす。

ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン、ジョキン

「ふごぉ、ふごぉ、ふごぉ、ふごぉ、ふんごぉぉぉーーーー！！」

引き伸ばされた弥生の小陰唇が一斉に切断されていく。そして、弥生の豆のように小さなクリトリスがペンチで鋏まれ思い切り力が込められる。

プチィッ！

「ふんごぉぉぉぉーーーーーーーー！！」

弥生の小さなクリトリスが潰され、弥生はビクビクと体を痙攣させている。しかし、ペンチは弥生のクリトリスを鋏んだまま、グリグリと捻られ思い切り引かれる。

ブチィッ

「ふんごぉぉぉぉーーーーーーーー！！」

弥生のクリトリスは無惨に引き千切られた。弥生の性器はどんどん破壊されていく。しかし、弥生は号泣しながらもバルトリン腺から大量に粘液を分泌し性器をグショグショに濡らしていた。そのぐ

っしょり濡れた弥生の性器に直径１５０ミリの電動ドリルが狙いを付けていた。仰向けにされている弥生の腰がさらに厳重に固定される。金属の金具でカチャカチャと体を固定されていく異様な雰囲気に弥生は、これから自分に身に起こる事がとんでもないものだと感じていた。もう、クリトリスも小陰唇も壊された。残りは膣と子宮だと弥生は理解していた。

キュイーン

電動ドリルのスイッチが入れられ弥生の膣にドリルの先端が軽く触れる。

チュイーン

ドリルに触れた弥生の膣が僅かに抉り取られ肉片となって飛び散っていく。

「ふごぉおおおおーーーーーーーー！！」

弥生が恐怖で絶叫し体がぶるぶると震えだす。そして、弥生の膣に高速で回転するドリルが押し込められていった。

ギュバァァーー！！

「ふがぁぁぁぁぁーーーーーーーー！！！」

プシャァァーーーー

ぶりぶりぶりぃ

弥生の膣が抉り取られ肉片と血が激しく飛び散る。弥生は大小便を漏らしながら膣にドリルで穴を空けられていく。もう１０センチ以上ドリルは突き入れられ、先端が弥生の子宮にも穴を空け始めた。

「ふごぉぉぉーーーーーー！！！」

人間のものとは思えない凄まじい絶叫が響き渡る。弥生の性器には、もう３０センチ近くドリルが突き入れられていた。膣は破壊されているのは勿論、子宮もドリルで貫通され肉片と化している。弥生はビクンビクンと体を大きく痙攣させ、死へのカウントダウンが始まっていた。

弥生の性器に穴を空けていたドリルが抜かれると、弥生の股間にはぽっかりと大きな穴が口を開け、血が溢れだしていた。その弥生の股間に空けられた穴にＣ４プラスチック爆薬が詰められていき、雷管がセットされる。

「ふぐぅぅぅぅーーーー」

力なく泣いている弥生の姿を笑いながら起爆スイッチが押された。

ボンッ！！

鈍い音が響き弥生の性器が爆破された。弥生は下腹部が消滅し絶命していた。

喉、膣、肛門を犯され潮を吹くが、最後の穴を犯され号泣する弥生（後書き）

お読みくださりありがとうございます。
不定期に何かアイデアが思い付いたら更新していきたいと思っています。
気長にお待ち頂ければ幸いです。
感想等もぜひお願いします。

ありがとうございました。

性器の割れ目から股を裂かれ無様に絶命する弥生　前編（前書き）

今回も弥生は性器を痛めつけられて破壊されていきます。
悲惨な事ばかりされますので、苦手な方はスルーして下さい。

性器の割れ目から股を裂かれ無様に絶命する弥生　前編

前編

弥生は首輪に繋がれ犬のように四つん這いにされ歩いていた。そして、弥生の処刑場に到着する。もう何度目になるのか弥生は考えてみたが分からなかった。性器を拷問されては処刑される。そんな事を無限に繰り返されているうちに弥生の中では、もう生まれてからずっと性器を拷問されていたのではと思うようになっていた。

もう自分が魍魎討伐者の〝青姫〟だった事を思い出す事もほとんど失くなっていた。仲間だった刹那たちの顔もぼんやりと浮かぶ程度で、もし今会ったとしても分からないだろう。弥生は性器を破壊され尻子玉を回収される為だけに生かされている。生きている弥生の性器に出来るだけ苦痛を与える事が最優先事項だった。今日も当然、性器を破壊されるのは間違いなかった。

弥生は処刑場の中央で両手を上げ大きく脚を開いていた。弥生のツルペタの胸には〝へんたい〟、寸胴の腹部には〝弥生〟、つるつるの恥丘には〝マンコ〟と矢印が焼き印されている。弥生はこれから行われる事を想像し顔を上気させていた。

「弥生のマンコを何時ものように鞭で打って楽しんで下さい」

弥生は懇願するように言う。弥生の性器はぱっくりと口を開け、鞭で打たれるのを今か今かと待っているようであった。そして、もう恒例となった弥生の性器への鞭打ちが開始される。

パシィ、パシィ、パシィ、パシィ、パシィ、パシィ、パシィ、パシィ、パシィ

弥生の性器を打ち据える乾いた音が響き渡る。弥生は性器を鞭打たれる激痛に涙を流しながらも口を半開きに開け恍惚の表情をしていた。

ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ

すぐに弥生の性器を鞭打つ打撃音が変化する。弥生は性器を鞭打たれる興奮でバルトリン腺から大量に粘液を分泌し性器を激しく濡らしていた。

「弥生は今、マンコを鞭で打たれています　マンコを鞭で打たれる無様な弥生の姿を思い切り笑ってください　」

弥生はアヘ顔で叫び、自分の性器を鞭で打ちやすいように腰を前に突き出す。まさに変態の極みだ。

ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ、ビシャッ

「あばばばばぁ　いぐ　いぐ　いぐうぅぅぅ　」

救いようのない変態の弥生は性器を鞭で打たれて絶頂に達しようとしていた。ちょうどその時強烈な鞭の一撃が弥生の性器に見事にフィットし割れ目の中身に直撃する。

バシィィィッ！！

「あっ、びゃぁぁぁぁーーーー！！」

プシャァァーーー

弥生は性器を鞭打たれ潮を吹いて頂点に達していた。

「かはは、まったくお前は楽しい女だ　これを見ろ」

〝千餐王〟は処刑場の外に立つ二本の柱を示す。柱は対象の位置に立ち、柱の上端から丈夫なロープが垂らされそれは柱の下のウインチに巻かれていた。そのロープのもう一方の端には革製の足枷が付いていた。弥生は柱とロープとウインチを見て即座に理解した。

・・・これは間違いなく股裂き器　私のマンコを裂く為の処刑具だ・・・

弥生は見ているだけでバルトリン腺から粘液を大量に分泌させていた。

「どうだ　これが何か分かるか？」

「はい　これは股裂き器　これで弥生のマンコを引き裂くのですね」

「さすが弥生だ　よくわかった　嬉しいだろう　お前は性器からビリビリと裂かれていくのだ」

自分の股を裂かれる姿を想像して頬を赤く染めている弥生は両腕

を背中に回され高手小手にきつく縛られていく。そして、弥生の両足首に足枷がきつく装着されていった。

「始めろっ　」

弥生の足枷の装着されたロープが左右にウインチで引かれていく。弥生の脚は徐々に開いていき、立っている事が出来なくなり空中に逆さに吊り下げられた。弥生の股間の中心で、弥生の性器が口を開け粘液を溢れさせている。

ゴキュゴキュッ

弥生の股関節から嫌な音が響き、弥生の脚は左右一直線にピーンと開かれていた。

「いだい、いだい、いだいぃぃぃーーー　」

弥生の両目から涙が零れ落ちるが、構わずにウインチは巻かれロープは引かれていく。

「ただ性器を裂かれるだけでは不満だろう　性器を裂きながら痛めつけてやろう　」

ウインチは少しずつロープを引き弥生の股を裂いていくが、それと並行して弥生の性器拷問が進められていく。まずスチーム式の熱したアイロンが弥生の性器の上に当てられる。

ジュウゥゥゥーーー

「あづうっ、あづっ、あづっ、あづいぃぃぃーーー　」

弥生が悲鳴を上げるがアイロンは弥生の性器の上に置かれたまま放置される。その弥生の姿は克明に撮影されていた。

「せっかく撮影してるのだから、きちんと喋れ　自己紹介もするのだ」

弥生は股を裂かれていく激痛とアイロンで性器を焼かれる激痛に耐え、泣きながら口を開く。

「こんにちは　西園寺弥生といいます　勿論本名です　２３才です処女でしたが、ここで拷問具で処女膜を貫通し焼いて頂きましたご覧のように体にも焼き印を捺して頂いています　変態の弥生に相応しい体で嬉しいです　今、弥生はマンコから股裂きされようとしています　変態の弥生は股から裂かれて殺されるというのにマンコを濡らして喜んでいるのでお仕置きされています　マンコをアイロンで焼かれているのです　とても熱いです　でも、もっとお仕置きしてくれるそうで楽しみです　それでは弥生が無様に絶命する姿を最後までお楽しみ下さい」

弥生の挨拶が終わると、一旦性器に乗せられていたアイロンが除かれ弥生の小陰唇が伸ばされる。そして、その小陰唇が左右別々に１８０度に温度設定されたヘアアイロンで挟まれた。

ジュゥゥゥゥーーーーー

「あぢゃぁぁぁぁーーーーー　あづいぃぃぃぃーーーー」

ヘアアイロンで挟まれ小陰唇を開かれた弥生の性器の膣前庭窟に直にアイロンが置かれた。しかも、ギュウッと押し付けられる。

ジュワァァーーーー

「あぢゃぁぁぁーーーー　あぢゃ、あぢゃ、あぢゃぁぁぁぁーーーー　ゆるじでぇぇぇぇ　マンコ、あづいぃぃぃぃーーーー　あぢゃぢゃぢゃぢゃぁぁ」

弥生は体を反り返らせ目は飛び出る程大きく開かれ涙を溢れさせ泣き叫ぶが、弥生は性器を破壊される為だけに生かされている。当然、許されるわけもなく、弥生の性器破壊は進行していく。弥生がアイロンで性器を焼かれている間もウインチは少しずつ弥生の足に付けられたロープを引いていき確実に弥生の股が裂かれていくのだ。

「だじゅげでぇぇーーーー　あじゅいぃぃぃーーーー」

いくら弥生が変態であっても性器を破壊される激痛に慣れる事などない。性器を破壊されていく度に弥生はその地獄の苦痛に泣き喚き苦しみ抜くのだ。

「よーし、次はこれを使ってみよう」

〝千餐王〟は部下に箱に入った物を渡すと耳打ちする。箱を受け取った部下の河童は弥生の前に立つと、箱の中から取り出した物を弥生に見せる。

「人間の世界で爆竹と呼ばれている物だ　どういう物かは知っているだろう　これで弥生の性器を爆破する　といっても前のプラスチック爆弾のような殺傷力はない　せっかく股から性器を引き裂いて殺すのに、爆殺してしまっては意味がないからな　これで殺しはしない　もちろん、かなりのダメージは受けるがな　すぐに死にはし

ない　どうだ、嬉しいか　」

「はい、弥生のマンコを爆破して頂けるなんて嬉しくて興奮してしまいます　あっ、あうぅぅーーー　」

ブチッブチッ

股裂きされている弥生の股間の筋肉が少しずつ千切れていき、弥生は呻き声を上げる。

「ふはは、股を裂かれながら性器を爆破されるか　楽しい見せ物だな、弥生　」

”千餐王　”が手を振ると部下の河童がきびきびと動き始める。まず、爆竹は弥生の割れ目の小さな尿道に入れられていく。

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふぅぅ　」

弥生の息が荒くなっていく。そして、導火線に火が点けられた。

シューーーッ

導火線が燃えていく音が聞こえる。

パァァーーン！！

プシャーーー

「あっ、びゃあぁぁぁぁーーーー　」

高い音と共に弥生の尿道が爆破され、小便が噴水のように噴き出した。火薬臭が漂い、弥生の尿道付近には白い煙も漂っていた。

「こんな事で漏らしては駄目だろう　締まりのない穴だな　おい、補充してやれ」

自分で弥生の尿道を爆破しておきながら、弥生の尿道を締まりのない穴と言い放つ〝千餐王〟だった。弥生は補充の意味が分からなかったが、すぐにその意味を思いしり絶叫する事になる。弥生の尿道に漏斗（ろうと）が差し込まれ膀胱まで突き通される。そして、弥生の腰が厳重に押さえ付けられ、漏斗（ろうと）の中にぐらぐらに沸騰した熱湯が注ぎ込まれた。弥生の膀胱の中に容赦なく熱湯が注がれていく。膀胱が爆発したような、とんでもない激痛が弥生を襲った。

「あっぢゃあぁぁぁぁーーーー　あぢゃあぢゃあぢゃ、あじゅいぃぃぃーーーー　あぢゃぢゃぢゃぢゃぁぁぁーーーー」

ぶりっ、ぶりぶりぶりぃぃぃーー

弥生は白目を剥き口を開け舌を付き出したまま絶叫し、大きく反り返りながら大便を漏らしていた。弥生の頭が自分の尻につきそうな程反り返り、自分が漏らした大便が頭に乗っている。惨めな姿だった。それほどの苦痛を弥生は味わっていたのである。しかし、この程度の事で弥生の性器拷問は終わらない。弥生は性器から股を裂かれ絶命するまで、徹底的に性器を痛め付けられ破壊されていくのだ。

性器の割れ目から股を裂かれ無様に絶命する弥生　前編（後書き）

次回、弥生はタイトル通り股から性器を裂かれ惨めに絶命する予定です。
今後、弥生をこんな風に処刑して貰いたいという要望が有りましたら感想欄やメッセージで送って下さい。私の筆力でどこまで上手く再現出来るか分かりませんが反映していければと思っています。
よろしくお願いいたします。

性器の割れ目から股を裂かれ無様に絶命する弥生　後編（前書き）

弥生の性器処刑も佳境に入りました。弥生は性器を破壊され股を裂かれ惨殺されます。
苦手な方は読まないようにして下さい。

性器の割れ目から股を裂かれ無様に絶命する弥生　後編

後編

「はひゅー、はひゅー、はひゅー」

過呼吸になっている弥生を落ち着かせる為、口にビニール袋が当てられ、弥生の呼吸が整うまで性器以外の箇所を痛め付けられる事になった。

弥生の右の乳首の両側を爆竹で挟みガムテープで固定される。左の乳首にも同様の処置がされ弥生の二つの乳首に爆竹がセットされた。弥生のツルペタの胸で勃起する乳首が爆破されようとしていた。そして、容赦なく導火線に点火される。

シューー

弥生は首を曲げて自分の胸を、燃えていく導火線を見つめた。弥生は怖かった。性器を破壊されるのは変態の弥生にとって願ってもないことだったが他の所を破壊されるのは怖くて堪らなかった。

「ひぃぃぃ　」

小さく悲鳴を上げる弥生の胸で導火線が燃え尽きる。

パンッ!!

乾いた音が響き弥生の乳首が吹き飛ばされた。

「あぴゃぁぁぁーーーー」

弥生の乳首が肉片となり消滅していた。弥生のツルペタの胸が本当にツルペタになっていた。

「うっ、うっ、うっ、うっ」

泣いている弥生の前に、炉と焼きごてが用意される。

「せっかく、ツルペタな胸になったんだ　この焼き印も捺してやろう」

ジュゥゥゥーーーー

「あづぅぅぅーー　あじゅいぃぃぃーーー」

弥生の胸に容赦なく二度と消せない焼き印が捺され、はっきりと捺された文字が分かるように３０秒間弥生の胸に焼きごては押し付けられた。焼きごてが離された後には、くっきりと文字が捺されていた。弥生の胸には上部に〝ヘンタイ〟、今捺された下部には〝ツルペタ〟と焼き印されていた。その弥生の惨めな姿も高解像度で撮影されている。

ブチッ、ブチッ、ブチッ！

その時、弥生の股間でまた筋肉が千切れる音がした。

「あびゃぁぁぁーーーー　いだいぃぃぃーーーー　マンコざげるぅ

うぅーーーー　」

弥生の開脚された脚はピーンと一直線にのびきり、逆さに吊られ両腕を縛られている弥生は苦しそうに身をよじる。

「おっと、いけない　急がないと性器を爆破する前に裂けてしまうな　」

〝千餐王〟はすぐに弥生の性器を爆破するよう指示を出す。弥生の大きく開かれた脚の中心、膣の中に爆竹が詰められていった。もちろん、尿道と違い爆竹が1本という事はない。弥生の膣には4本もの爆竹が入れられ導火線がまとめられた。そして、導火線に点火される。

シューー

導火線はあっという間に燃えていき爆竹に火が点く。

パァァーーーン！！

「あっ、びゃぁぁぁーーーーー　」

ビシャァァーーー

弥生の膣が爆破され、一瞬大きく拡がった弥生の膣から血と肉片が飛び出す。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ　」

弥生はビクビクと体を痙攣させていたが、今度は子宮口から子宮

の中にまで爆竹を入れられてしまった。弥生は子宮まで爆破されるのだ。しかも、膣を爆破した時は４本だったが、子宮には倍の８本もの爆竹が詰められた。弥生は膣を爆破された激痛と股を裂かれている激痛で自分が何をされているのか理解していなかったが、その弥生の眼前に導火線が垂らされる。そして、火が点けられた。弥生は、また自分の何処かが爆破されるのだと思ったが、それが自分の子宮だとは思いもしなかった。

シューー

導火線はどんどん短くなり弥生の膣内に消えていく。そして……。

パァァーーーン！！！

「あっびゃぁぁぁーーーーーーーー！！」

ブシャーーーー

一際高い音が響き弥生の子宮が爆破された。絶叫する弥生の膣から、また血と肉片が噴き出した。

「あばばばばばばば」

ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ！！

「あっばぁぁぁぁーーーー　いだいぃぃぃーーーー」

子宮を爆破され、さらに股を裂かれていく弥生の顔は涙と鼻水とよだれでグショグショに汚れていた。しかし、弥生の性器への拷問はまだ終わりではない。

「さあ、次は弥生の大好きな小陰唇切除だ　嬉しいか」

しかし、弥生は頷くのみで体が震えてしまって答える事が出来なかった。しかし、そんな事には関係なく弥生の性器への拷問は粛々と進行していく。弥生の左の小陰唇が摘まれ、びろーんと伸ばされ、その根本にハサミが当てられる。

「ふーっ、ふーっ、ふーっ、ふーっ」

次に何が起こるか察した弥生の息が荒くなっていく。もう弥生にとって恒例となっている小陰唇切断だが、その激痛に慣れる事などない。むしろ、その痛みを知ってしまったが為に、よけいに恐怖に捕らわれてしまうのである。恐怖に震える弥生の姿を楽しみながらハサミは閉じられる。

ジョキーン

「は、ぴゃあぁぁぁーーーー　あぶぶぶぶぅ」

ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ

「あびゃびゃびゃびゃあ　いだい、いだいよおぉぉぉーーーー」

泣き叫ぶ弥生の左の小陰唇が根本から完全に切除され、次に右の小陰唇がハサミで挟まれる。

ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ

「だじげでえぇぇぇーーー　ゆるじでぐだぢゃいいいいーーーー」

しかし、弥生の小陰唇は右側も容赦なく切除された。小陰唇を左右とも切除された弥生の性器からは血が流れ出ているが、そこへ熱した焼きごてが当てられ、焼き潰されて血が止められる。

ジュウウウーーーー

「あっぶうぅぅぅーーーー　あぢゅいいいいーーーー」

弥生は全身汗まみれになり苦しむが、まだまだ弥生の性器への拷問は続く。小陰唇が切除され、残ったクリトリスが無事で済む訳がない。弥生のクリトリスはカッターで縦割りに切り裂かれていく。

「あっびゃぁぁぁーーーーー　いだいよおぉぉぉーー　だじげでえぇぇぇーーー」

さらに弥生のクリトリスは交差するように十字に切り裂かれ、ペンチで挟まれると思い切り引き千切られた。

ブチィィーーッ!!

「あばばばばばばばばぁぁ」

弥生は口からブクブクと泡を吹いていたが、今度は弥生の性器に向かって鞭が構えられる。小陰唇が切除され、守るものが失くなった弥生の性器の中身に鞭が直接叩き込まれるのだ。

ヒュンッ!!

鋭い風切り音の後、弥生の性器を打ち据える高い音が響く。

ビシィィーーーー!!

「あんびゃあぁぁぁーーーーー」

弥生の無防備な性器に鞭は連続で休みなく叩き込まれていく。

ビシィィ、ビシィィ、ビシィィ、ビシィィ、ビシィィ、ビシィィ、ビシィィ、ビシィィ、ビシィィ

弥生の性器は血塗れになっていた。

ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチィィィーーッ

そして、ついに弥生の性器が裂け始めた。まず、弥生の会陰部がビリビリと裂けていき、血が流れ出した。そこへ、鞭の激しい一撃がヒットする。

「あびゃぁぁぁーーーー　もお、ゆるじでえぇぇぇーーーーー」

股を裂かれながら性器を鞭打たれ、弥生は半狂乱になっていた。それも無理はなかった。小陰唇が完全に切断されてしまった為に、全ての鞭の打撃が柔らかな膣前庭に直に叩き込まれるのだ。それも、裂け始めている弥生の割れ目、膣前庭に容赦なく叩き込まれている。ただ性器を鞭打たれるのとは訳が違う、苦痛の度合いが段違いだった。

弥生はまた尻に頭が着くほど大きく反り返り、全身から汗が流れ出し、目からは滝のように涙が溢れ、大きく開いた口からは舌が突

き出されたまま、よだれがだらだらと垂れていた。

ビシィィ、ビシィィ、ビシィィ、ビシィィ、ビシィィ、ビシィィ

ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチィィーーッ

「あびゃぁぁぁーーーー　あびゃびゃびゃびゃびゃあ　」

一旦性器が裂け始めると、そこからは早かった。あっという間に弥生の膣と肛門が裂けてつながってしまう。その後、すぐに膣と尿道も裂けてつながる。弥生の性器からは噴水のように激しく血が噴き出した。弥生はもう悲鳴を上げる事しか出来なかった。

「ごあぁぁぁぁーーーーーーーー　」

それは人のものとは思えない獣のような咆哮だ。弥生の小さな体の何処からこんな声が出るのか、信じられない程の絶叫が響いている。

ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチィィーーッ

もう弥生の性器は完全に裂けていた。割れ目も尻の裂け目も本当に裂けている。性器からどぼどぼと血が流れているが、それでも容赦なく弥生の股がまだ裂かれていく。弥生のつるつるの恥丘も無惨に裂け、恥骨が剥き出しになっていた。それまで、激しく反り返って意味不明の悲鳴を上げていた弥生は、もう力なく垂れ下がり、ぶらぶらと哀れに揺れている。白目を剥き、口から泡を吹き、弥生はもう意識が失くなっているようだった。そして、弥生の体はヘソま

で裂け内臓が零れだしている。

ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ズバァァァーーーー！！

そして、ついに弥生は性器から真っ二つに完全に引き裂かれた。しばらくは股間から半分に引き裂かれた弥生の体はビクンビクンと大きく痙攣していたが、そのうちに動かなくなっていった。

哀れにも弥生は性器を散々拷問され、その性器から真っ二つに引き裂かれ完全に絶命していた。しかし、性器が引き裂かれた瞬間、弥生が絶頂に達していたのは、弥生本人しか知る由もない事だった。

こうして、西園寺弥生は無様に惨殺された。

性器の割れ目から股を裂かれ無様に絶命する弥生　後編（後書き）

股を裂かれる激痛でイッてしまう救いようのない弥生。この変態の弥生は未来永劫、性器を痛めつけられる事になる。

膣吊りで膣をズタズタにされ、小陰唇も切断される弥生（前書き）

今回も弥生は性器を痛め付けられ破壊されていきます。
弥生に残された生きる道は、もうそれしか残っていないのです。

膣吊りで膣をズタズタにされ、小陰唇も切断される弥生

膣吊りで膣をズタズタにされ、小陰唇も切断される弥生

弥生は両腕を背中に回され高手小手にきつく縛り付けられる。そして、弥生は仰向けに寝るよう命令され、言われるままに地面に寝た弥生の体には、胸には〝ヘンタイ〟と〝ツルペタ〟と焼き印され、腹部には縦に〝弥生〟と、恥丘には〝マンコ〟と焼き印が捺されているのが確認出来た。こんな焼き印を体に捺されてしまっては、人間の世界に戻れたとしてももう普通の生活を送る事は難しいだろうが、弥生は自分の無様なこの体が気に入っていた。

「今日の責め方を教えてやろう　人間の女を吊る方法で最も過酷といわれるものの一つ〝膣吊り〟だ　この名前を聞けば弥生なら分かるだろう　文字通り、膣に針を刺してそのまま吊り下げるわけだ　大概の女は途中で発狂してショック死するらしいぞ　弥生はどうかな」

恐ろしい事を楽しそうに言う〝千餐王〟は部下にすぐに膣吊りの準備をしろと指示をだす。頭上から吊り下げる為のロープが垂らされ、そのロープの先に何本もの釣り針状の針が付けられる。この釣り針を弥生の膣に突き刺し、そのまま吊り下げるのだ。しかし、膣壁に突き刺した針だけで人間が吊り下げられるわけがない。いくら女の体重が軽いとはいっても無理がある。そこで膣には、何十本もの針が突き刺される事になるが、それでも吊り下げるのは大変だ。これをやられた女は吊り下げる途中で膣がズタズタに引き裂かれ、

その激痛とショックで発狂して泡を吹いて絶命してしまう者がほとんどだった。膣で吊られ、さらにそのまま膣吊りされた状態で鞭で打たれる調教まで進んだ女は数える程しかいなかった。そして、その後に執行された子宮吊りでは、その残った女も全て発狂し哀れにも絶命していた。これはもう拷問と云うより、人間の女に対する残酷な処刑といえた。

今回、弥生はその膣吊りをされる事になる。弥生の女の部分が徹底的に破壊されるのだ。説明を聞いていた弥生は、恐怖で震えながらも今まで想像した事もない激しい性器処刑に、バルトリン腺から大量に粘液を分泌し、性器を激しく濡らしていた。

「膣で吊られる〝膣吊り〟なんて想像した事もありませんでした弥生、少し太っていますが持ち上がるのでしょうか」

弥生が不安気に呟くが、〝千餐王〟は問題ないと言う。

「心配するな　今まで吊った女のデータがある　膣にどれくらい針を刺せば吊る事が出来るか記録されているのだ」

弥生は仰向けで口と目をガムテープで塞がれ脚を大きく開かされると膝から脚を曲げられ、そのまま脚を伸ばせないように太ももと脛がベルトでまとめて締め付けられる。そして、そのまま大きく脚を広げられ押さえ付けられ性器を剥き出しにされた。その剥き出しの弥生のまだピンク色の性器に、リングにＬ字型のステーが付いた膣開口用の器具が用意され、弥生の膣に４本のステーが奥まで入れられる。そして、リングの部分のネジが締められていくと、ステーが拡がり、弥生の膣も拡がっていった。弥生の膣は十分作業が出来るように１０センチ以上にも拡げられ膣の奥に弥生のピンク色の可愛い子宮が見えているが、まずは膣の破壊が優先だった。すぐに弥生の赤黒い膣壁に釣り針状の太い丈夫な針を突き刺していく作業が

開始された。

ブツッ、ブツッ、ブツッ、ブツッ、ブツッ、ブツッ、ブツッ、ブツッ、ブツッ、ブツッ

「ふごっ、ふごっ、ふごっ、ふごっ、ふごっ、ふごっ、ふごっ、ふごうっ　」

拡げられた弥生の膣の最奥から釣り針が突き刺されていく。弥生は膣に針を刺され悲鳴を上げながらも、膣内のバルトリン腺から大量の粘液を分泌し、ピンク色の乳首も固く勃起していた。

ブッ、ブッ、ブッ、ブッ、ブッ、ブッ、ブッ、ブッ、ブッ、ブッ、ブッ、ブッ

「ふごっ、ふごっ、ふごっ、ふごっ、ふごっ、ふごっ、ふごっ、ふごっ、ふごっ、ふごっ、ふごうっ　」

弥生の膣壁に大量の針が突き刺されていく。弥生を膣吊りする為には、二百本以上もの針を膣に突き刺す必要がある。それだけでも弥生にとって凄まじい拷問である。針は弥生の泣き叫ぶ様子を楽しみながら、ゆっくりと粛々と弥生の膣に突き刺されていく。そして、弥生を膣吊りする為の用意が整った。弥生の膣に刺された針からのびる糸が束ねられ弥生の頭上から垂れているロープに結びつけられる。

いよいよ弥生の膣吊りが開始される。一気に引いて弥生の膣が裂けてしまわないように慎重にロープが少しずつ引かれていく。

「ふごっ！　」

ロープがピーンと張り、弥生の膣に負荷がかかり針が膣に食い込

む。そして、弥生の腰が少しずつ浮き上がってきた。

「ふ、ふんごぉぉぉーーーー　」

弥生の腰は完全に宙に浮き、さらにロープが引かれていく。無数の針が膣に深く食い込み、弥生は激痛でのたうち回りたいところだが、少しでも動くと膣が裂けそうで必死に耐えていた。そして、ついに弥生の体が宙に浮く。

「ふんごぉぉぉぉーーーーーーーー！！！　」

弥生は膣に刺された無数の針で、ぶらんと逆さ吊りになっていた。両腕を後ろ手に縛られ口も目もガムテープで塞がれ膣吊りにされている弥生の姿は無様なものだった。弥生は膣が裂ける恐怖から、なるべく揺れないように必死に耐えているが、それでも弥生の体重に耐えきれず膣壁は少しずつ裂けている。

「鞭で打て　」

残酷な命令が容赦なくくだされ、膣吊りされている弥生の体に鞭が叩き込まれる。

「ふごぉぉぉぉーーーーー　」

弥生のツルペタの胸に鞭が叩き込まれ、弥生の体が大きく揺れる。その勢いで弥生の膣がビリビリと裂けていった。

「ふごぉぉぉぉーーーーーー　ふごぉぉぉぉーーーーーー　ふごぉぉぉぉーーーーー　」

弥生は膣が裂けていく激痛と鞭で胸を打たれる激痛で哀れに泣き叫んでいた。

ビシィッ、ビシィッ、ビシィッ、ビシィッ、ビシィッ、ビシィッ、ビシィッ！！

容赦なく弥生は鞭で打たれ、ぶらぶらと大きく体が揺れる。揺れる度に針を刺されて吊られている弥生の膣が裂けていく。

「まだ、苦しんでもらわないと詰まらないからな　少し重量を軽くしてやろう　おいっ始めろ　」

〝千餐王〟の命令でハサミを持った部下が、弥生の日本人形のような綺麗な黒髪をジョキジョキと切っていき、弥生の髪は忽ち散切り頭にされてしまう。そして、次に立ち上がった河童は弥生の小陰唇を摘まみ引き伸ばす。そのまま小陰唇の根本をハサミで挟むとジョキンと切断していく。

ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ

「ふんごぉぉぉぉーーーーー！！　」

膣を裂かれる激痛に小陰唇を切断される激痛が加わり弥生は絶叫するが、弥生は左右の小陰唇を切断されてしまう。

「もう少し軽くしてやろう　」

その言葉にビクッと体を震わせる弥生だが、弥生の３つの小さな突起がハサミで同時に挟まれる。弥生は乳首とクリトリスに感じたハサミの刃の冷たい感触に身構えるが、躊躇なくハサミは閉じられ

た。

ジョキン、ジョキン、ジョキン

「ふんごぉぉぉぉぉーーーーーー！！」

弥生の3つの突起は、あっけなく切断され地面に転がる。弥生の股間と胸から血が流れ出し、逆さに吊られた弥生の体を赤く染めていく。敏感な部分を同時に切断され弥生は失神していたが、すぐに薬を嗅がされ覚醒させられる。弥生が失神して痛みから逃れる事など許される事ではなかった。苦しみぬいて殺される事が、弥生が生かされてる唯一の理由だからだ。弥生の性器への拷問はまだ続いていく。

膣吊りで膣をズタズタにされ、小陰唇も切断される弥生（後書き）

今回もお読み下さりありがとうございます。
このお話は、次回まで続きます。少しずつ書いていきますので、たまに覗いて貰うと更新されているかもです。

子宮吊りで子宮を徹底的に破壊され絶命する弥生（前書き）

また弥生は激しい拷問を受け、肉体、精神共に破壊されていきます。
苦手な方は気を付けて下さい。

子宮吊りで子宮を徹底的に破壊され絶命する弥生

子宮吊りで子宮を徹底的に破壊され絶命する弥生

膣吊りにされ、小陰唇、クリトリス、乳首、全て切除されてしまった弥生にさらなる苦痛を与える為、弥生の体がくるくると回されていく。そして、十分にロープが捩れたところで手が離される。弥生の体はくるくると高速で独楽のように回転を始めた。弥生の膣は遠心力で針が膣壁を引き裂いていく。

「ふんごぉぉぉぉぉぉーーーーーーー！！」

プシャーーー

ブリブリブリィィィ

弥生の膣から血が噴き出し、尿道からは小便が噴水のように噴き出し、肛門からは大便がぼとぼとこぼれ落ちていた。

「なかなか良い様だぞ、弥生」

周りの河童は弥生のその惨めな姿を笑いながら楽しそうに見ている。弥生は大小便を漏らしながら、くるくる回転していたが、どんどん膣が裂け体の位置が下がってきていた。

ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチィィィーー

「ふんごぉおおおおおーーーーーーーー！！！」

そして、ついに弥生の膣に刺さっている全ての針が、膣を引き裂いた。弥生は絶叫しながら地面に落下し膣からは血が流れ出していた。

「よし、次は子宮吊りだ　楽しませてもらうぞ」

膣を引き裂かれ哀れに泣いている弥生の膣がまた大きく開口される。そして、奥に見える子宮口に太い器具が無理やり挿入された。

ズブッ、ズブゥゥッ！

「ふぐっ、ふぐぅっ」

弥生の子宮に挿入された器具は、子宮内に入ると大きく爪が広がり、二度と抜く事が出来ない器具であった。その器具が再び頭上からのロープに結ばれる。そして、ロープが引かれていった。

弥生の体が少しずつまた持ち上げられていく。弥生の腰が浮き、体が浮いていった。

「ふごぉおおおーーーーー」

弥生の子宮に全体重がかかり、再び弥生が絶叫する。そこで〝千餐王〟は弥生の口に貼られていたガムテープをビリッと剥がした。

「いだあぁぁぁーー　マンコじぬぅぅぅ　弥生のマンコじんじゃいまずぅぅぅーーー」

途端に弥生は絶叫するが〝千餐王〟は冷静に弥生に命令する。

「今、何をされているのか自分でカメラに向かって言え、弥生」

「はい、弥生は今子宮で逆さに吊られていまず　子宮が千切れそうでいだいでず」

弥生は努めて冷静に言うが、声は震え涙声でガムテープで塞がれた目からは大量の涙が溢れていた。

「よし、それでは錘を付けてやろう」

弥生の体に錘を装着する作業が開始される。まず弥生の首に首輪型の錘が装着される。そして、なんと弥生のツルツルの恥丘に釘が打ち込まれていった。

トン、トン、トン、トン、トン、トン、トン、トン

「いだあぁ　いだいぃぃーー」

規則正しいリズムで弥生の恥丘に打ち込まれた釘に錘が下げられる。弥生の恥骨を貫通して打ち込まれているので、かなりの重量の錘が下げられていた。

ズルウゥゥ

「いだあぁぁぁーーーー！」

錘を装着された弥生の体が下がり、なんと弥生の膣口から子宮が顔を出していた。そして、それはどんどんと姿を現してくる。絶叫

し続けている弥生の子宮はもう半分以上膣口から体外に抜き出されていた。

「ふふ、鞭で打て　」

冷酷な命令がくだされ、弥生の剥き出しの子宮に鞭が叩き込まれる。

ビシィ、ビシィ、ビシィ、ビシィ、ビシィ、ビシィ、ビシィ、ビシィイイ！！

「あっぴゃあぁぁぁぁぁ　あぴゃぴゃぴゃぴゃぴゃぴゃぴゃ！！　」

子宮を直接、鞭で打たれ弥生は絶叫していた。

「何をされているか言えと命令した筈だが　」

「ううっ　弥生は今、子宮を直接鞭で打たれています　ううっ、いだいでずぅぅ　」

「どうだ　子宮を鞭で打たれる女など今まで一人もいないだろう嬉しいか弥生　お前が初めての女だぞ　」

「はい、こんな貴重な経験をさせて頂いて嬉しいです　あっばあぁぁぁぁーーーー　」

鞭打たれていた弥生の子宮は、更なる苦痛を弥生に与える為、真っ赤に焼けた焼きごてが用意された。そして、その焼きごてが弥生の子宮に押し付けられる。

ジュウゥゥゥーー！

「ふんぎゃあぁぁぁーーー　ゆるじでえぇぇぇぇーーー　じぬうぅぅぅーーー」

弥生の子宮が焼ける音と匂いが漂い、弥生が絶叫するが、〝千餐王〟の命令を思い出す。

「弥生は今、子宮を焼かれていまずぅぅ　もお、弥生の子宮、じんじゃいまずぅぅぅーーー　ゆるじでえぇぇぇぇーーー」

しかし、弥生が許される事など有り得なかった。弥生の子宮の至る所に焼きごてが押し付けられ焼かれていく。

ジュウゥゥゥ！！

「あっぴゃぁぁぁーーーー　もお、ゆるじでえぇぇぇぇーーー」

弥生は全身汗まみれになり子宮を焼かれていく。弥生の子宮の焼ける匂いが辺りに充満してきた頃、弥生の膣から露出してしまっている子宮の部分が全て焼き尽くされていた。しかし、それでもまだ弥生の子宮に対する拷問は終わらない。次には太いニードルが用意された。当然、このニードルは弥生の子宮に突き立てられる事になる。目を塞がれている弥生には知るよしもないが、弥生の周りに数人の河童が立ち、それぞれが両手にニードルを持ち弥生の子宮に狙いを定めていた。

「串刺しにしろ」

〝千餐王〟の命令で一斉に弥生の子宮にニードルが突き刺され、

ズブズブと串刺しにしていく。

「あっぴゃぁぁぁーーーー　いだい、いだい、いだいよぉぉぉーーーー　」

弥生は狂ったように泣き叫ぶが、ここでも〝千餐王〟の命令を思い出し忠実に実行する。

「弥生は今、大切な子宮を串刺しにされています　もお何本のニードルで串刺しにされたのか分かりません　」

震える泣き声でやっと言う弥生だったが、さらに弥生の子宮はニードルで串刺しにされる。

ブスッ、ブスッ、ブスッ、ブスッ、ブスッ、ブスッ、ブスッ、ブスッ、ブスッ、ブスッ、ブスッ！

「あっびゃぁぁぁぁーーーーー　だじげでえぇぇぇーーーーー！！　」

弥生の子宮は無数のニードルで串刺しにされ針山のようになっていた。その弥生の子宮はさらにまだ痛め付けられる。弥生の剥き出しの針山になった子宮に液体燃料がかけられる。

「燃やせ　」

その命令で弥生の子宮に点火された。燃料をかけられた弥生の子宮は激しく燃え上がる。

「あっ、じゃあぁぁぁーーーー　だれがあ、だじげでえぇぇぇー

ーーーー　あひゃ、あひゃひゃひゃひゃ……」

弥生は針山にされた子宮と股間を燃やされ、ついに頭がおかしくなっていた。いくら弥生が変態であっても、ここまで性器ばかりを拷問されては正気を保っていられる方がおかしかった。

「ようやく発狂したか　今までで一番粘ったな　さすが弥生か　子宮吊りされた時点で大概の女は発狂したからな　よし、また口を塞いで、錘をもっと吊るせ」

弥生の口にガムテープが何重にも貼られ、首に更に錘が追加された。弥生の体がぐんと下がる。そして……。

ズボゥゥッ！！

激しい音と共についに弥生の子宮が膣から抜け千切れてしまった。弥生は地面に落ちビクンビクンと痙攣している。子宮だけが、燃えたままブラブラと吊るされて揺れていた。弥生は処刑台の上に運ばれ、腕の拘束を解かれると今度は大の字に固定された。

「ククク、それではそろそろ死んでもらおうか　正中線から真っ二つにされた経験はないだろう　今回は貴様の性器から真っ二つにして殺してやる」

弥生の固定されている処刑台に回転ノコギリが設置されスイッチが入れられる。回転ノコギリは少しずつ弥生の性器に向かって動いていった。

チュイーン！！

ノコギリが弥生の性器を切断しだした。

「ふぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼ　」

弥生は塞がれた口で意味不明の音を出しながら切断されていく。弥生はもう恥丘は切断され、ノコギリはへその下まで進んでいた。固定されている弥生の体がノコギリで切断される振動でぶるぶると震え、血と肉片が飛び散っている。

「ふぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼ　」

もう胸まで切断された弥生は絶命している筈なのだが、口から音を出していた。そして、弥生は頭まで完全に真っ二つに切断され、もう音を出すことも動くこともなくなっていた。弥生はまた性器を破壊された挙げ句、残酷に処刑され絶命したのであった。

子宮吊りで子宮を徹底的に破壊され絶命する弥生（後書き）

またも弥生は性器を徹底的に破壊され、さらに残酷な処刑で絶命してしまいました。弥生がこの運命から逃れられる時がくるのでしょうか。

拘束されながらイクまで自慰を強要され、潮を吹いた後性器を破壊される弥生（前書き）

何時ものように弥生は大勢の観客の前で辱しめられ痛めつけられます。
変態の弥生はそうされる事で興奮してしまうので救いようがありません。

拘束されながらイクまで自慰を強要され、潮を吹いた後性器を破壊される弥生

拘束されながらイクまで自慰を強要され、潮を吹いた後性器を破壊される弥生

弥生は肩口まで覆う黒いロンググローブと太ももの付け根に食い込む黒いサイハイソックス以外全裸で黒いローファーを履いて歩いて行くと、所定の位置にそれは用意されていた。後方からでもよく見えるように少し高くなったステージが造られ、そのステージの中央の床から一本の金属製の長いパイプ状の棒が突き出ている。その棒は男性器を模しており先端が丸く小さな穴が空き、カリ首も造られていた。太さは４センチ程度、表面には凹凸がついている。弥生はそのステージに上がり、その性具をうっとりしたような目で見ると、突き出た棒の隣に立った。妖怪に捕らえられるまでは性経験のない処女であった弥生だが、捕えられ処女を貫通されてからは毎日休む間もなく性器拷問され、性器を破壊され続けているうちに弥生の内なる性癖が覚醒し今では進んで性器を破壊される事を望んでいた。

日本人形のような黒髪に地味な顔立ちの弥生ではあるが、その体は地味とは言えないものになっていた。つるぺたの胸の上部には〝ヘンタイ〟と焼き印され、胸の下部には〝ツルペタ〟と焼き印されているが、それだけではない。腹部には縦に〝弥生〟、ツルツルの恥丘には〝マンコ〟と焼き印されていた。そんな姿を堂々と晒している弥生を見れば、弥生がもうまともではない極度の変態であると誰もがはっきりと分かるだろう。そして、弥生は自分自身でも、自分は救いようのない変態であると認めていた。むしろ変態と思われ見られる事に喜びを感じていたのである。

弥生はステージの上で脚を大きく開くと、両手で性器を大きく開

き、自ら性器の中身を晒す。弥生の膣口や尿道口、ピンク色の膣前庭窟が剥き出しにされる。弥生のクリトリスはもう固く勃起していた。

「変態の弥生のマンコは、見られているというだけで、もうびしょびしょに濡れています」

弥生の言葉通り、弥生の膣口からは透明な液体が溢れ糸を引いて垂れていた。そして、早く入れてくれというように膣口はだらしなく口を開けている。さらに弥生は興奮のあまりピュッピュッと尿道口から小便も漏らしていた。

「それでは、弥生の変態拘束オナニーをご覧下さい」

弥生は横の突き出た棒を跨ぐと、先端を膣口に当て突き入れていく。ずっぽりと性具の棒を自分の性器に突き入れた弥生の両腕が高手小手に縛られ背中に鉄パイプも背負わされ体を曲げられないように固定されていった。そして、目と口にもガムテープが貼られ塞がれる。さらに弥生の足首に足枷が装着され外側から足枷に付けられた頑丈な鎖が引かれ足が閉じられないようにされた。弥生の体はどんどん拘束されていく。がに股で性器に性具を挿入している弥生の太ももに、もも枷が装着され、そのもも枷に重さ３０キロの鉄球がぶら下げられた。両方の太ももで６０キロもの重さになる。

「ふぐぅ」

弥生がその重さに耐えるように足に力を入れて踏ん張った。この重さに負けてしまえば、膣に挿入している性具にそのまま子宮ごと串刺しにされてしまう。弥生はもう腕も足も拘束され、その性具を自力で抜く事は出来ないのだ。弥生は必死に足を踏ん張り耐えてい

るが、踏ん張り過ぎて放屁してしまった。

ぶほうっ！

大きな音が連続で弥生の肛門から漏れ、悪臭が辺りに漂う。その弥生の無様な姿をさらに惨めにするため５リッターのイルリガートルが用意され、原液のグリセリン溶液が一杯まで注がれた。そして、イルリガートルからのチューブが弥生の肛門にズブッと挿入され抜けないように固定され、コックが開けられ弥生の中にグリセリンが注入されていく。弥生は拘束され、太ももに鉄球をぶら下げられ、浣腸もされてしまった。が、それで終わりではなかった。弥生の小陰唇に釣り針状の針が刺され、それにも５００グラムの錘が下げられていく。弥生の左右の小陰唇に三つずつ計六つの錘が下げられた。そして、残るクリトリスにも釣り針が突き刺され錘がぶら下げられ、ようやく弥生の準備が完成した。

「よし、弥生　自慰を始めろ　イクまで自慰するんだぞ」

弥生は〝千餐王〟の命令で腰を上下に動かし始めるが、太ももに鉄球がぶら下げられているのでスムーズに腰が動かせない。それでも弥生は必死に腰を上下に動かし自慰行為に励んでいる。無様な姿だった。拘束され目も口も塞がれ、性器に錘を下げられ浣腸もされながら自慰行為を強要される。普通の若い女性がこんな事を強要され撮影までされたら死んでしまう程の恥辱を与えられながら弥生は興奮していた。

・・・もっともっと、弥生を無様で惨めな姿にしてください　・・・

弥生は腰を上下に動かしながら息が荒くなってきていた。

「ふんっ、ふんっ、ふんっ、ふんっ　」

弥生の鼻の穴が大きく膨らみ、さらに呼吸が荒くなる。股間では、ズピョズピョと弥生の濡れた膣と性具がこすれ音を立て粘液が糸を引いている。弥生は太ももものも枷に錘を付けられながら腰を激しく上下に動かし自慰に励んでいた。

「ふごっ、ふごっ、ふごっ、ふごっ　」

弥生の息遣いがさらに荒くなってくる。弥生の肛門から注入されているグリセリンの原液も、もう半分以上弥生の体の中に入れられてしまっている。錘を付けられている弥生の性器は激しい上下動で血が滲んでいた。こんな状態でありながら弥生は絶頂を迎えようとしていた。

・・・あひっ、あひっ、イクッ、イクッ、イクウゥゥゥ　・・・

弥生は全身汗まみれになり鼻息も荒くなっている。腰を激しく上下に動かしている鉄球を下げられた弥生の太ももはぶるぶると痙攣していた。

「鞭で打て　」

拘束され浣腸もされながら自慰している弥生の体に一本鞭が容赦なく打ち込まれる。

ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシィィィ！！

「ふんごぉぉぉーーーー」

弥生は鞭打たれ絶叫しながらも腰を動かすのは止めなかった。

・・・イクッ、イクッ、イクゥゥゥ　弥生をもっと惨めで無様な格好にして下さいぃぃ　・・・

絶頂寸前の弥生の右の鼻の穴にチューブが挿入され奥の奥まで突き入れられる。

ヂュゥゥーー

そのチューブから即効性の媚薬が弥生の体内に大量に注入される。絶頂寸前の弥生の体がさらに火照ってきた。強力な媚薬が投与され弥生はもう体全体が性器になったような感覚だった。浣腸も鞭も弥生にとって快感でしかなかった。その弥生の目隠しはそのままに、口に貼られたガムテープが剥がされる。

「無様な声を聞かせるのだ」

「あああぁぁぁぁーーーー　いぐぅ　いぐぅぅぅ　あっぴゃぁぁぁーーーー」

弥生は狂ったように絶叫し、腰をこれ以上ないほど高速に上下させる。弥生の膣から粘液が流れるように溢れだし、肛門からもグリセリン液と腸液、液状の便が漏れていた。

「あっぴゃぁぁぁーーーー　いぐぅぅぅぅーーーー　マンコごろじでえぇぇぇーーーー」

プシャァァーーーー

弥生は潮を吹いて絶頂に達していた。そして、弥生が潮を吹いた瞬間、弥生が膣に入れている性具の先端の穴から濃塩酸が噴出される。

「あっびゃぁぁぁーーーー　じぬうぅぅーーーー」

弥生の子宮や膣が塩酸で溶かされていくが、それだけでは終わらない。

「くくく、足を広げろ」

弥生の足枷に付けられた鎖が引かれ、弥生の足が広げられていき、それに伴い膣に挿入されている性具が弥生の性器の奥に押し込まれていく。弥生はゆっくりと子宮を串刺しにされていった。

「あっばぁぁぁーーーー　いだいぃぃぃーーーー」

弥生は塩酸で子宮を溶かされながら串刺しにされていく。

「くく、すぐには殺さない　もっと苦痛を与えて尻子玉を成長させないとな　お前の好きな小陰唇切除もやってやろう」

〝千餐王〟の指示で弥生の足を開く鎖は動きを止め、弥生は子宮を串刺しにされた状態で放置される。そして、ハサミを持った河童が弥生の股間の下にしゃがみこみ、錘を下げられている弥生の小陰唇をびろーんとさらに伸ばし、ハサミの刃を当てる。

「切断しろ」

ジョキーン

「あびゃぁぁぁーーーー　いだいぃぃぃーーーー」

弥生が絶叫するが、弥生の小陰唇は根元から切断されていく。

ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ

「いだあぁぁぁーーーー　ゆるじでえぇぇぇーーーー」

しかし、弥生の小陰唇は無惨に切断され、反対側の小陰唇も切断されていく。

ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ

「あびゃぁぁぁーーーー」

弥生は無様に口からぶくぶくと泡を吹きはじめていた。そんな哀れな弥生の姿を楽しみながら小陰唇は切断され、クリトリスにも彫刻刀の刃が当てられ、スパッと根元から切除される。

「あひぃぃぃーーーー」

何時ものように弥生の性器が破壊されていく。当然、この程度では弥生の性器破壊は終わらない。弥生の会陰と恥丘に、まるで板に打ち込むように釘が打ち込まれ、そこに電線がつなげられる。

「通電してやれ」

弥生の性器に躊躇なく電流が流される。

「あばばばばばばばばばばばばばばばばっ　」

弥生の性器に通電されると同時に、膣に挿入されている性具がドリルのように高速で回転を始めた。

「あぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶっ　」

弥生の膣から血と肉片が飛び散っていく。凄まじい光景だが、さらに弥生の足枷に付いている鎖がまた引かれ始めた。弥生の足がピーンと横一直線になるが、鎖は止まらずに引かれていく。

「あぎゃあぁぁぁーーーー　マンコじぬうぅぅぅーーーー　」

弥生の性器がぶちぶちと音を立てて引き裂かれていく。弥生は塩酸で子宮を溶かされながら回転ドリルで串刺しにされ、通電されながら股を裂かれていく。

ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチィィィッ！！

「あんびゃあぁぁぁーーーー　」

絶叫とともに弥生の割れ目が本当に裂け血が噴き出した。肛門も裂けてしまったので注入されていたグリセリンと大便も大量に噴き出している。弥生は性器を破壊され、また無様に発狂してしまっていた。弥生が発狂したのを確認した〝千餐王〟は最後の指示を出す。

「よし、最大の電流を流せ、そして串刺しにして股から引き裂いて殺せ　」

弥生は強力な電流を性器に通電され性器を焼かれ、回転する性具で口まで串刺しにされ、同時に股から真っ二つに引き裂かれ、哀れに絶命していた。

拘束されながらイクまで自慰を強要され、潮を吹いた後性器を破壊される弥生（後書き）

弥生はまた性器を破壊され、発狂して絶命してしまいました。
こんな事が繰り返され、弥生の頭はもう初めからおかしくなってきているのは間違いありません。
次回があれば、さらにおかしくなった弥生が登場するかもしれません。

大勢の人間に凌辱・調教・拷問される弥生　1（前書き）

今回は、今までとは少し違う雰囲気かも知れません。
弥生が変態なのは勿論ですが……。

大勢の人間に凌辱・調教・拷問される弥生　1

大勢の人間に凌辱・調教・拷問される弥生　1

「はじめまして、私は西園寺弥生といいます　さあ皆さん、今日は皆さんに朗報です　私を満足させる事が出来た方は、ここから逃がしてあげますよ　人数に制限はありません　自信がある方は挑戦して下さい　よく考えて私を満足させて下さい　制限時間は一人１５分　私が潮を吹いてイッても満足しなければ失格です　チャンスは一度切り、失格になったら二度とチャンスは与えられません」

顔を赤らめて言う弥生の言葉で周囲にどよめきが起きる。今、弥生の前に集められた人間は、尻子玉を抜く為河童に捕らえられた人間の中から選抜され連れて来られた男女である。もちろん弥生の言葉に嘘はない。弥生を満足させた人間は、脳を弄られ記憶を消された後人間の世界に送り返される事になる。ここで死を待つだけの生活から抜け出せる事が出来るのだ。歓声が上がるのも無理がない事であった。しかも、人数制限はなく弥生を満足させれば何人でもＯＫなのだ。

集められた男女は目の前に立つ弥生を見つめた。日本人形のようなおかっぱ黒髪に、大人しく真面目そうな顔。太い眉毛に大きな瞳。美人とはお世辞にも言えないし、可愛いという程幼い顔立ちでもなかった。慣れればまあ良いかなと思う程度の顔立ちであった。菖蒲柄の着物を着た体は小柄で、手を前で合わせスッと背筋を伸ばして立った姿勢からも真面目で大人しい清楚な娘という印象をここにいる全ての男女が抱いていた。なので、その弥生が〝潮を吹いてイク

”と言った時には一様に驚いた表情をしていたが、その容姿では男との接点はなかったのだろうと推測される。それなら、少し可愛がってやれば満足するだろうと男たちは考え内心ほくそ笑んでいたが、女の見方は違っていた。男と接点がない女は歪んだ感情に陥っている事がほとんどだ。この女も何か特殊な嗜好を持っているのは間違いない。そう読んでいた。この時点で女の方が弥生の真実に近付いていた事になる。

「チャレンジする方は、あのドアから一人ずつ中に入って来て下さい　私は中で待っています　あの部屋の中には様々な道具も用意してありますので、それを使用するのも勿論ＯＫです　５分間、誰も入って来なければ、そこでこのチャレンジは終了となります　何か不明な点、分からない点があれば今質問して下さい　」

すると、さっそく一人の女が手を上げた。

「あの、西園寺さんを満足させればＯＫなんですよね　例えば、面白いお話しをして、それで西園寺さんが満足すれば、それでもＯＫですか？　」

「もちろんですよ　どんな事でも私を満足させてくれればＯＫです　」

弥生は笑顔で答えるが、続いて男が手を上げる。

「犯しても良いんだよな　それで、あんたが満足すれば良いんだろう　」

「もちろん、犯してくれて構いませんし、私の内に遠慮なく射精してくれて構いません　私がイカなくても、私が満足すれば良いです

制限時間内に私を満足させる事だけが解放の条件です」

「犯す時、あんたが抵抗する事はないのか　抵抗されて制限時間が過ぎたら、それでも失敗になるのか」

「ええ、時間が過ぎたら失敗です　ですが、私は抵抗しませんよ命令してくれれば、それに従います」

弥生の言葉に男は下卑た笑いを浮かべる。

「なら俺が四つん這いになってケツの穴拡げろと言ったら、その通りにしてくれるのか」

「もちろん、しますよ」

平然と答える弥生に一同は驚きを隠せなかったが、集められた男女は、ようやく主旨が理解出来たという顔をする。とにかく、この男に縁の無さそうな女をどんな事でも良いから満たしてやれば良いという事だ。

「もう何もなければ私は部屋の中に入ります　あなたたちで順番を決めて入って来て下さい　それと出口は別になっていますので、チャレンジ済みの人に情報を聞く事は出来ませんよ　入り口の上にはご覧のように二つのランプが付いています　青いランプが点けばチャレンジ成功、赤いランプは失敗という事です　それで入った方の合否が分かります」

弥生は、それではと静かにドアを開けると中に入っていった。残った人々は顔を見合わせる。とにかく、まず5分以内に誰か入らなくては千載一遇のチャンスが不意になる。情報を共有する事は出来

ないのだから誰から行っても同じなのだ。むしろ、犯すなら一番に入って犯してしまった方が有利な気がする。弥生を犯そうと考えていた男たちは一斉にドアに向かおうとし争いが起きる。醜く我先にと争っていた男たちは周囲で監視している河童から矢で射貫かれ倒れていった。

「ヤヨイサマハ、アラソイヲコノマヌ　アラソウモノハ、シャサツスル　」

弥生を犯そうとしている残った男どもは、ひっと息を呑んで退いていく。それを女たちは冷静に見ていた。男どもは馬鹿だわ。犯すだけなら初めから私を犯して満足させなさいという筈、それを言わないのは他に何かあるのは間違いないのよ。お話しだけでも満足させれば良いと言った。だから、むしろ犯すのは悪手。女たちは考え込んでいた。あの女を満足させるには何が良いのかを……。最後のヒントは部屋の中にあるという道具だ。どんな道具が置かれているのかで、あの女の望む事を察する事が出来るかも知れない。女たちは、ただ犯せば良いと思っている男たちを心底馬鹿にしていた。

・・・私なら、たった15分で満足なんてしない　男はみんな馬鹿だわ　・・・

女たちは内心、男は全て失敗するだろうと考えていた。

＊　＊　＊

男がドアから中に入ると、そこは小さな小部屋になっていた。その小部屋の奥に、もうひとつドアがある。そして、そのドアの両脇

には武装した河童が立っていた。

「ヤヨイサマハ、コノオクダ」

「ハイルガヨイ」

男が中に入ると着物姿の弥生が背筋を伸ばして入ってきた男を真っ直ぐ見つめて立っていた。

「時間がねえ　何されるか分かっているんだろう　さっさと着物脱いで股ひろげろ」

「はい」

乱暴に命令する男に弥生は素直に従い、すぐに着物を脱いで全裸になると横になり足を開いた。

「くくく、本当に素直じゃねえか　男に犯されるの待ってるみたいだな　それにしても、なんだその焼き印は、どっかの男に飼われていたのか」

男は一瞬弥生の体に捺された焼き印にぎょっとするが、深く考える事もなく弥生の性器に目を向ける。そして、遠慮なく弥生の性器に触るが、まだ弥生の性器はそれほど濡れてはいなかった。男は棚に並んでいる容器からローションを見つけ手に取ると勃起している自分の性器に塗りつける。

「おめえのマンコ濡らしている時間がねえから、これでいかせて貰うぜ」

男はローションを塗った自分の性器の先端を弥生の膣口に押し付ける。弥生は目を閉じ口を半開きにして、その時を待っているように見えた。そして、男は弥生の両足を腕で持ち上げ、一気に性器を弥生の膣に突き入れる。

ズボゥッ！

「ううっ、痛いっ　」

無理矢理、まだ濡れていない弥生の膣に根本まで押し込み、痛がる弥生の腰を押さえ付け激しく腰を振る。弥生の目からは涙が流れていた。

パン、パン、パン、パン、パン、パン

無理矢理入れられ犯された事で多少興奮したのか弥生はバルトリン腺から粘液を分泌し始め性器が濡れてきていた。それで、音が変化してくる。

グチョ、グチョ、グチョ、グチョ

「おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おっ　」

弥生の半開きの口から声も漏れている。

「ブスのわりにはマンコは具合が良いじゃねえか　おら、もっと力入れて締め付けろ　」

「おぉっ、おぉっ、おぉっ、おぉっ、おぉっ　」

「いいぞ、このままなかに出してやる　おめえもイケぇ」

ドピュ、ドピュ

プッシャァーー

弥生は男に無理矢理犯され潮を吹いてイッテいた。男はすっきりした顔で立ち上がり、弥生を見下して言う。

「おい、早く俺を解放しろ　満足しただろ」

男は勝ち誇ったように言うが、弥生はむくりと起き上がると壁のボタンを押した。すると、奥の壁がスライドし中から〝樹木子〟の無数の枝がのびてきて男の体を捕える。

「残念です」

「どうしてだ　潮吹いてイッテたじゃねえか」

「体が気持ち良くても、心が満足していないですから失格です」

「ふざけるな　結局全員失格にするつもりじゃないのか　希望を与えるふりして汚ねえぞ」

「解放するというのは本当ですよ　私を満足させたらね」

男は泣き喚きながら〝樹木子〟の枝で連れ去られていった。集められた人間が見守る前で、一つ目のドアの上にある二つのランプの〝赤〟が灯った。一同からため息がもれる。一人目が失敗したという事だ。これから5分以内に誰かが入らなければならない。人間た

ちは顔を見合わせていた。

大勢の人間に凌辱・調教・拷問される弥生　2（前書き）

弥生を満足させて、この地獄から解放される為、挑戦していく人間たち。
果たして彼らは無事解放されるのだろうか……。

大勢の人間に凌辱・調教・拷問される弥生　2

大勢の人間に凌辱・調教・拷問される弥生　2

女をイカせる事には自信があると豪語していた一人目の男が失敗した事で、男たちには動揺が走っていた。ただ普通に犯すだけでは駄目なのかも知れない。ようやくそこに気が付いたが、ならばどうすればと考えるといいアイデアが浮かばなかった。

「奴は自信が有り過ぎて失敗したんだ　俺がやってやる　マンコで駄目なら他の穴を犯してやるさ　」

二人目の男がドアを開けて入っていった。そして、弥生と対面した男は、弥生を全裸にし四つん這いにさせると尻を高く突き出させた。

「両手で尻を開いて俺にマンコとケツの穴を見せろ　」

「はい　」

素直に弥生は返事をすると両手で、ぐいっと臀部の双丘を大きく開いた。男の前に弥生の小さな肛門と桜色の小振りな性器が晒される。男は弥生の二つの穴を見ながら同じ様にローションを取り自分の性器に塗りつける。この男もまた弥生の性器と肛門にはローションを塗ろうともしなかった。そして、弥生の腰を両手で押さえ付けると、弥生の小さな肛門に性器の先端を当て一気に突き刺す。

ズボッッ！

「あ、うぅっ　」

弥生が声を上げ腰を引こうとするが、男はそれを許さず弥生の腰をがっしりと押さえ激しく腰を振る。

パン、パン、パン、パン、パン、パン、パン、パン

「あおっ、あおっ、あおっ、あおっ、あおっ　」

激しい行為の音と弥生の声が部屋の中一杯に響く。弥生は肛門を激しく犯され涙ぐんでいた。男はさらに激しく腰を動かしている。その激しさで弥生の肛門から腸液が漏れだしていた。しかし、男は構わず弥生の肛門を犯し続ける。

パン、パン、パン、パン、パン、パン、パン、パン

「あうっ、あうっ、あうっ、あうっ、あうっ、あうっ　」

・・・ケツマンコだけじゃなく、弥生のマンコにも入れて下さい　・・・

弥生は自分の膣も同じ様に子宮を突くほど激しく犯して欲しいと望んでいたが、男はそのまま弥生の直腸内に大量に精液を放出する。

ドピュ、ドピュ、ドピュ

「くくく、どうだ　ケツの穴を犯されて満足したろう　ここまで激

しくケツの穴を犯された経験などないだろうからな　早く俺を解放しろ」

弥生の肛門はよほど激しく犯されたのか、男が性器を抜いた後もぽっかりと開いたまま腸液と精液を垂らし、弥生はうっうっと哀れに泣いていた。男は弥生のその姿を眺め、自信たっぷりな態度をとっているが、壁がスライドすると〝樹木子〟の枝が男の体を絡めとり運んでいった。

・・・せっかく、お尻の穴を犯しているのに射精しただけで終わりでは満足しませんよ　最低でもそのまま私の中に放尿するくらいしてもらわないと　お尻の穴だけじゃなくて、マンコの穴の中にもおしっこしてくれれば、もっと嬉しいのに　・・・

弥生はどうしてこんな簡単な事が出来ないのかと首を傾げていた。外のドアの上部では、また赤いランプが点灯し、連続で失格となった事が判明する。男たちの集団にはさらに動揺が広がっていった。その為一人の男が不安そうに周囲で警備している河童に恐る恐る尋ねていた。

「あの　本当にあの女が満足すれば解放して貰えるんですよね？満足しても失格なんて事はないですよね」

「アノオンナ、デハナイ　ヤヨイサマダ　ヤヨイサマハ、ウソハ、イワナイ　ヤヨイサマガ、マンゾクサレレバ、ホントウニ、カイホウサレルダロウ　アノオカタノタメニモ、チエヲシボルノダ」

安堵した男たちであるが、どうすれば弥生が満足するのか皆目見当もつかなかったが、早く次の者が入らなければいけない。三人目に無理矢理選ばれてしまった男は、着物を脱がした弥生を見て考え

る。体に焼き印を捺されている事から、この女は普通ではない。まあ、この容姿だから男に相手にされずにいたのは間違いない。おそらく、奴隷として飼われていたのだろう。ならば、優しさに飢えているのでは、そう男は考えた。男は弥生を仰向けに寝かせ股を開かせると、その弥生の割れ目をくぱぁと開き顔を近付けた。弥生の強烈な女の匂いが鼻につくが、男は弥生の性器を舌で丁寧に舐め始めた。小陰唇の襞の隙間にも舌を入れ、尿道も舌先で刺激しながら、鼻でクリトリスも同時に刺激する。尿道は小便の味がするが、構わず男が刺激していると、弥生はチョロチョロと小便を漏らし始めていた。

「おっ、おっ、おっ、おっ、おっ　」

弥生は声も上げ始めている。男はさらに弥生の膣に舌を突き入れ、弥生の膣壁を舐め始めると弥生の粘液が溢れ出てくる。

「いぐっ、いぐっ、いぐっ、いぐっ、いぐぅぅぅーー　」

シャーー

弥生は潮を吹いてイッテしまった。男は顔面に弥生の潮を浴びながら、放心状態の弥生を見下ろし、さらに駄目押しのように汚れた弥生の性器にまた口をつけ綺麗に舐め始める。弥生の性器は、吹いた潮も、分泌した粘液も綺麗に舐めとられ、男は時間一杯まで弥生に刺激を与えようと、今度は弥生の勃起した乳首を口に含んでいた。男は弥生がイッタ事から自分は解放されるだろうと考えていたが、壁がスライドすると〝樹木子〟の枝が男を捕える。男は信じられないという顔で運ばれていった。

・・・ただ愛撫だけでは物足りないですよ　私を満足させるなら、

クリトリスや乳首を噛み千切るくらいの事をしてくれないと　・・・

またも、赤いランプが点灯し男たちは自信喪失していた。5分以内に次の者が入っていかなければならないのに誰も入って行こうとしない。時間がどんどん過ぎていく。

「まったく男は情けないわね　女を満足させる事も出来ないの　誰も行かないなら私が行くわ」

女の集団の中から一人の女がツカツカと歩いて行くとドアを開け中に入っていった。

女は弥生を改めて見つめると着物を脱ぐように命令する。弥生は素直に着物を脱ぎ、女の前に裸体を晒した。女は弥生の体をしげしげと眺める。

・・・この女、焼き印まで捺されているのに、それを隠そうともせず堂々と私に見せている　間違いなくこの女、真性の変態だわ　この変態女が満足するような変態プレイをすれば良いわけね　・・・

女は部屋の中を見回した。

・・・思った通り変態プレイに必要な道具は揃っている　間違いないわね　・・・

女は弥生を机の上に仰向けにさせると手足を机の脚にロープで拘束し動けないようにする。弥生は仰向けで足を開いたまま拘束された。そして、弥生の口に、口を開いたまま固定する開口具を装着し、その開いたままの口に漏斗を入れた。弥生は自分が何をされるのか不安そうな顔をしているが、女はカテーテルの袋の封を切ると、中

からカテーテルを取り出し弥生の尿道口に当てる。

「ふふっ、こんな物まで用意してあるって事は、これを使ってやられる事を想定していたんでしょう　ホント、救いようがない変態女だね　」

女は軽蔑した顔で弥生の尿道にカテーテルを突き入れようとしたが手を止める。

「マンコ、びしょびしょに濡れてるわ　あんた、本当に変態だねカテーテルにローションつけてたけど、あんたみたいな変態にはローションなんて要らないね　」

女はローションを拭き取ってしまいカテーテルを弥生の尿道に入れていく。

「ふうううぅーー　」

本来物を入れる穴ではない尿道にローションもつけずに無理矢理挿入され、弥生が苦痛の声を上げるが構わず女はカテーテルを挿入していく。そして、３センチほど入れた所でカテーテルが弥生の膀胱に突き当たった感覚が手に伝わってきた。ここで無理に入れては弥生の膀胱頸部の括約筋を損傷してしまう。こんな変態女の膀胱など損傷しても良いのだが、女は弥生の括約筋を馴染ませる為、カテーテルを前後に何度も動かしてから膀胱内に突き入れる。

「１０センチ以上入れると膀胱内の粘膜を傷つけるというからねでも、ギリギリまで入れてあげる　どう、嬉しいでしょう　変態のブス女　」

女は弥生の尿道にカテーテルをずるずると入れていった。

「ううっ　」

弥生は、ローションもつけずに尿道に入れられるカテーテルの激痛に涙を流していた。しかも、この女は弥生の尿道を痛め付ける為、わざと太いカテーテルを使用している。弥生はカテーテルで尿道をザリザリと擦られ、膀胱内に限界まで長くカテーテルを挿入され尿を採取されようとしていた。そして、女はカテーテルのもう片方を弥生の口に挿している漏斗にテープで貼り付ける。カテーテルから弥生の小便が流れ出し、漏斗から弥生の口の中に入っていく。

「どう、搾りたての自分のおしっこは美味しいでしょう　良く味わって飲みなさい　」

弥生は、涙を流しながら口に注がれる自分の小便をゴクゴクと飲んでいた。

大勢の人間に凌辱・調教・拷問される弥生　2（後書き）

男たちの挑戦は今の所失敗に終わり、次に女が弥生を責め立てる。
自分の小便を飲まされる屈辱に弥生は涙を流していた。

大勢の人間に凌辱・調教・拷問される弥生　3（前書き）

尿道にカテーテルを入れられ自分の尿を飲まされる弥生。
しかし、弥生への責めはそれだけでは終わらなかった。

大勢の人間に凌辱・調教・拷問される弥生　3

大勢の人間に凌辱・調教・拷問される弥生　3

弥生は尿道にカテーテルを入れられ、そのままそれを口に注がれ自分の小便を飲まされていた。

「うごっ、うごっ、うごっ　」

泣きながら自分の小便を飲む弥生の惨めな姿をカメラで撮影しながら女は次の準備に入る。当然、弥生をこの程度の辱しめだけで終わりにするつもりはなかった。

・・・もっと辱しめてあげる　・・・

女は太いチューブとシリンジを用意して、２００ｍｌ容量の巨大なシリンジにグリセリン液の原液を充填する。そして、弥生の肛門にシリンジを突き刺した。

ヂュュュューーー

「うびぃぃぃーー　」

女はシリンジのプランジャーを押しグリセリン液を弥生の肛門から中に注入していく。弥生は自分の小便を飲まされながら、肛門から注入されるグリセリン液の冷たさに、次に自分がされる仕打ちを

想像した弥生は激しく性器を濡らし始めていた。女は一回の注入では終わりにせず、続けて二回目の注入をする。弥生の下腹部が膨れていき、注入するにも抵抗が大きくなってくるが、それでも女は注入を止めなかった。そして、二回目を全て注入しても終わりにしなかった。三回目、四回目と続けて弥生の肛門から注入していく。弥生の下腹部は膨れ上がり破裂しそうである。結局、女は弥生の中に2リッターものグリセリン液を注入してしまった。弥生は小便を飲まされながら、苦しそうな表情で全身汗まみれになっていた。

「さーて、次はこれ　変態のあんたがお待ちかねのものだよ　」

女は太いチューブを持ち、その先端を弥生の肛門に突き入れた。

ズブウゥゥゥ

「あぼおぉぉぉぉーー　」

おかしな声を上げる弥生の肛門にズブズブとチューブを奥まで押し込んだ女は、チューブの反対側を弥生の口に挿してある漏斗に固定した。そのチューブの中を弥生の肛門から大便が押し出されていく。激しく浣腸され、もう止める事が出来ない状態の弥生は、ぶりぶりと排便しチューブの中に大便が押し詰められていく。そして、目を見開く弥生の眼前で大便がチューブから漏斗の中にどろどろと落ち出した。

「おごっ、おごっ、おごっ、おごっ　」

弥生は小便だけでなく、自分の大便も強制的に食べさせられていた。弥生は涙を流しながら自分の口に入ってくる大便を食べ続ける。

「どう？　自分の糞の味は？　変態のあんたなら嬉しいでしょう」

女は楽しそうに自分の大小便を食べさせられる弥生の姿を見ていたが、慌てたように次の準備にかかる。

「いけない、時間一杯あんたを辱しめてあげないとね　もう、上の口からはお腹一杯食べたでしょう　次は下の口に食べさせてあげる」

女は手早く弥生の膣に、桜井式の膣鏡を奥まで押し込み、くぱぁと最大まで開口する。女は弥生の膣の奥に見える子宮を確認し笑みを浮かべていた。そして、弥生の口に挿した漏斗に付けてあるチューブとカテーテルを取り、鉗子を使いなんと弥生の子宮口に入れてしまった。

「おごぉぉーー」

目を見開き驚愕する弥生の子宮の中に、小便と大便が入っていく。女の大切なところに大小便を注入されてしまい、弥生は子宮からチューブを抜こうと暴れるが、厳重に拘束された体は動かす事が出来なかった。ボロボロと泣きながら弥生は子宮に自分の大小便を注入されていく。そして、タイムリミットがきた。

外の扉の前で見守っていた男女の集団は、初めて点灯した青いランプに歓声を上げていた。今まで、解放される事などないのではと半信半疑な状態であったが、こうして解放される人間が現れた。確かな希望が生まれてきたのだ。そして、誰もがそれぞれ腕を組んで真剣に弥生を満足させる方法を考え始めた。自信ありげだった最初の男二人が、軒並み失敗した事で普通のセックスではおそらく弥生を満足させる事は無理なのだろうと認識していた。大人しそうな顔をしていたが、あの女はやりまくっている〝やりマン〟なのだろうと

全員が思っていた。実際には弥生はここに捕らわれてから初めて破瓜を迎えた訳でその想像は見当外れであったのだが、普通の事をしていては駄目だという点では的を得ていた。

＊　＊　＊

「おめでとう　あなたは私を満足させてくれました　約束通り、ここから解放いたします」

「ほ、本当にここから出られるのですか？」

女は半信半疑だったが、弥生は勿論ですと頷く。

「それにしても、随分酷い事をしてくれましたね　おかげで満足出来ましたが……」

女は顔を赤らめて弥生を見つめると小さな声で話した。

「私も女だから、私がやられたら満足するなと思った事をやったんですよ　本当はもっと時間をかけて、子宮の中をおしっこでパンパンにしたかったけど、時間がなかったのでそこまで出来なかったです」

「あなたも変態なんですね　お友だちになれそうです」

「はい、もしまた会う事があったら、今度は私にも是非同じ事をしてください」

「そうですね　でも私は自分がやられる方が好きなので、今度はもっと酷い事を考えておいてくださいね　」

女は、弥生に感謝しながら後ろの扉から出ていった。女は、この後ここでの記憶は消され人間界に送り帰される。その点については弥生はしっかりと約束は守るという事を徹底していた。

＊　＊　＊

ようやく一人の解放者が出た事で明るい表情になった男女は話し合って順番を決め、今度は一人の男が弥生の前に立っていた。男は弥生を全裸にし、両手を上げ、股を開いて立つよう命令する。男はノートに指示を書き付け、この通りにするよう弥生に命令する。

「ぶ、ぶひっ　」

さっそく弥生は男の命令に従いって返事をする。返事は全てブタの鳴き声でするよう書かれていた。そして、弥生は次の指示に従い、自分の股間に右手を伸ばすとクリトリスの包皮を剥き指先で擦り始めた。そして、左手は自分の小さな胸を掴み乳首を刺激しだす。指先で摘まんだり、転がしたりしているうちに弥生の乳首は固く勃起してきた。

「おっ、おっ、おっ、おっ、おっ　」

弥生の口から小さく声が漏れ始め、股間からも糸を引いて粘液が溢れてきていた。そう、弥生は立ったまま自慰するよう命令されていたのだ。弥生は男の見ている前で自慰をしていたが、男も弥生の

自慰を見ながら自分の勃起した性器をしごいていた。二人は向かい合わせでお互いの自慰を見ながら自慰している事になる。

「おっ、おっ、おっ、おっ、おっ」

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ」

弥生の手の動きが速くなり、男のしごく手の動きも速くなっていた。

「おぉぉーーっ」

「あぁぁーーっ」

シャァァーーーーッ！

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

弥生が潮を吹くと同時に男も弥生の身体に向かって射精していた。弥生の下腹部に男の精液がべっとりと付着し、弥生は絶頂に達し放心状態になっているが、弥生はすぐに男の指示を思い出し男の前に正座して口を大きく開く。男は、その開いた弥生の口目掛けて放尿した。そして、弥生の口一杯になると一旦放尿を止める。男の小便で満たされた口を閉じると弥生は、ゴクンと小便を飲み干した。

「ぶひっ」

弥生は男に合図するとまた口を開く。男はまた弥生の口の中に放尿を始めた。そして、口の中が小便で一杯になると弥生は男の小便を飲み干した。それを男が小便を全て出しきるまで弥生は繰り返し、

弥生は男の小便を全て飲み干していた。男は、自信たっぷりにどうだという顔で弥生を見下ろしていたが、扉が開き〝樹木子〟の枝が男を捕らえていった。

「残念ですね　狙いは良かったのですが、私におしっこを飲ませる飲尿だけじゃなくて、頭からおしっこを浴びせる浴尿くらいはやって貰わないと満足しませんよ」

弥生は残念そうに呟く。弥生の本音は少しでも多くの人間を救い出したかったのだが、この部屋はしっかりと監視されている。弥生の性癖を熟知している〝千餐王〟が覗いているのだ。弥生が満足していないのに人間を解放してしまっては、そこでこの弥生が考えたイベントも中止されてしまうだろう。それを避ける為にも本当に弥生が満足した人間のみを解放するしかなかった。弥生は自分が犠牲になるのは構わないが、他の人間は少しでも助け出してあげたかったのである。

扉の外では再び点灯した赤いランプに落胆の声が溢れていた。

大勢の人間に凌辱・調教・拷問される弥生　3（後書き）

ようやく一人の解放者が出た人間であるが、まだ多くの人間が捕らわれたままだった……。

大勢の人間に凌辱・調教・拷問される弥生　４（前書き）

弥生の考案した人間救済のイベントも、もう終盤に差し掛かっていた。しかし、弥生の思惑に反して解放された人間は微々たるものだった……。

大勢の人間に凌辱・調教・拷問される弥生　4

大勢の人間に凌辱・調教・拷問される弥生　4

弥生は全裸で大きく開脚されたまま、逆さに吊るされていた。吊るされている弥生の前には性具を持った女が立っている。女の瞳は弥生の股間、性器に注がれていた。

「あなたのその顔じゃあ経験はほとんどないでしょうね　もう何人もこの部屋に男が入っているから、処女って事はないでしょうけど、間違いなく経験は少ないと思うけどどうなの？　それとも、手当たり次第やりまくるヤリマンなのかしら　」

女は吊るされている弥生に問いかける。

「はい、私はここに捕らわれる前は処女でした　」

弥生が正直に答えると女は気の毒そうな顔になる。無理もない。つまり、初めて犯されたのが人間ではないという事だ。

「それは気の毒ね　因みにどんな奴に犯されたのかしら　」

今度は女は興味津々という顔で尋ねてくる。

「はい、真っ赤に焼けた鉄パイプです　それで私の処女膜を貫通して膣と一緒に焼いて貰いました　死ぬほどの激痛でしたが、河童の

皆さんは楽しそうに喜んでいましたよ　処女を失う時って、あんなに痛いんですね」

女は凄まじい事を平気で言う弥生に退いていた。

・・・こいつ、おかしいよ　それを普通と思ってるの　マンコに焼けた鉄パイプってなんだよ　そんなのやられたら死ぬよ　・・・

「ま、まあいいわ　とにかく経験の少ないあんたを開発してあげる頭の中が真っ白になる快感を味わわせてあげるわ」

女は性具を持ったまま弥生に近付いていった。

＊　＊　＊

もう、弥生が発案したこのイベントも終盤に差し掛かっていた。残りの人数が少なくなる中、弥生を満足させて解放された人間は、ほんの一握りの人間だけだった。〝千餐王〟に監視されている以上、不正な事は出来ない。弥生は自己嫌悪に陥っていた。

・・・私が普通の女なら、もっと満足して助かる人も多かったのに、どうして私はこんなに変態なの　・・・

弥生は全て自分の性癖が異常だからだと思っていたが、これは弥生の性癖からそんなに満足させられる人間は現れないと確信していたからこそ〝千餐王〟が許可したイベントだった。今、弥生はこの軍団で欠かせない存在になりつつある。そんな弥生の希望を叶える事で、弥生も最近は進んで協力するようになってきていた。先日も

天狗の里に攻め込み大天狗を仲間に引き入れる事に成功した。十鬼神の橋姫も弥生と戦う事を避けるように撤退していった。〝千餐王〟の野望は順調に進んでいるのだ。多少の人間の尻子玉を失う事など何でもない事だった。別に人間など、また捕えて補充すればいいのだから……。それより、特別な尻子玉を持ち、戦いの戦力にもなる弥生の方が遥かに大切な存在なのである。今では〝千餐王〟は弥生の願いなら多少無理な事でも叶えてやるつもりでいた。

＊　＊　＊

女は弥生の股間の割れ目を見つめると、くぱぁと割れ目を開き性器の中身を露（あらわ）にする。そして、持っていた器具を弥生の膣に突き刺し、ズズゥッと押し込んでいく。

「ふふ、時間内にあなたのポルチオを開発してあげるわ　ポルチオは女の性感帯の一つ　クリトリスみたいな普通の性感帯と違うのは開発が必要な事　ここを開発された女は、連続でイキ続ける事が出来るのよ　あなたに、頭の中が真っ白になる連続イキを味わわせてあげるわ　」

女は弥生の膣に挿入した膣鏡を最大まで開く。膣鏡の開いた奥に弥生のコロッとしたピンク色の子宮が見えている。

「ポルチオというのは、この子宮頸部付近の事　ここを開発してあげるんだけど、時間がないから薬も使わせて貰うわね　普通にやると、けっこう時間がかかるからさ　」

女は弥生の子宮に直接浸透性の媚薬を塗ってしまう。もちろん、

クリトリスにも塗布する。効果は、あっという間に現れた。

「おっ、おっ、おっ、おっ、おっ」

弥生が声を出し始め、吊られたまま腰を振りだし、全身が汗ばんでくる。

「マ、マンコお願い　マンコ痛くして下さい　」

「ふふ、本当にあなたは変態ね　でも、もう少し焦らさないといけないのよ　まだ我慢してもらうわよ、変態さん　」

「おっ、おぉぉぉーーーー　」

弥生は乳首もクリトリスも硬く勃起させ、バルトリン腺から粘液を大量に分泌していた。

「そろそろ頃合いかしらね　さあ、いくわよ　」

女は弥生の子宮にソフトタイプのバイブを当て押し潰すようにほぐしていく。そして、次にはバイブのスイッチを入れ振動を加える。

「ひあぁぁぁーーーーー　」

弥生が絶叫する。さらに女は先端の尖ったもう一つのバイブも入れ、弥生の子宮の別の部分に当てる。振動の強さも周波も違う二つのバイブで責められ弥生は半狂乱になっていた。

「イグッ、イグッ、イグぅぅっ　」

プシャーーーッ

弥生は勢いよく潮を吹いていた。しかし、快感は止まらない。

「ポルチオの快感はイッテもイッテも止まらないのよ　これが〝連続イキ〟よ　ポルチオは脳と直結してるとも云われているから狂っちゃうかもね　とにかく時間一杯イカせ続けてあげる」

「あっぴゃあぁぁぁーーー　またイクうぅぅーー」

弥生はもう何も考えられず、ただ自分の体全体を駆け巡る快感に絶叫していた。

「ふふ、凄い声だわ　ポルチオでイク時はどんな女でも絶叫するっていうからね　普段あまり声を出さない女でも狂ったように声を出すらしいわよ　それに連続イキの最後は失神するらしいけど、それまで時間があるかな」

女は時間を確認する。

「時間が押してるから、反則だけどもう少し薬を使わせてもらうわ」

女は棚から最も強力で即効性の媚薬を取り、今度はそれを注射器で吸い取る。そして、弥生の子宮に注射器の針を突き刺した。

ヂュゥゥーー

そして、全て注入してしまう。その後、すぐにバイブで刺激を与え始める。弥生はもう狂ったように吊られた体を揺らしている。弥

生の体から汗と涙と鼻水とよだれ、そして性器から溢れた粘液が飛び散っている。

「だじげでえぇぇーーっ　もうじぬうぅぅーーーっ　あっびゃあぁぁーーーー」

弥生はずっとイキ続けて失神寸前だったが、女はそんな弥生を容赦なく責めたてる。

「あっぴゃぁぁーっ　マンコ、マンコ、あづいぃぃぃーっ　だじげでえぇぇぇーっ」

脳を直撃する想像を絶する快感に弥生は、自分の中で大事な何かがプツンと切れてしまった感覚があった。

「あぴゃぱぱぱぱぱぱぁぁぁーーー」

「あれっ？　狂っちゃた？」

女の思った通り、大量の強力な媚薬を注入されポルチオを開発され、連続イキでイカされ続けた弥生は発狂してしまっていた。もともと経験の少ない弥生が媚薬とポルチオでイカされ続けては発狂しない方がおかしいといえた。もっとも、ここまでされれば、どんな女でも発狂してしまうのではと思わせる程の容赦のない責めだったともいえる。

「あぴゃぱぱぱぱぱぁぁぁ　あっぴゃあぁぁぁーーー」

発狂してもまだ弥生はイカされ続けていた。女は、また弥生の子宮に媚薬を注入した。そして、バイブでポルチオを刺激し続ける。

・・・どうせ狂ったのなら、もう快感なしでは生きられない廃人にしてあげる　・・・

女は唇を舌でペロリと舐めると、弥生の勃起している乳首にも注射器で媚薬を注入する。さらにクリトリスにも深く針を刺して大量の媚薬を注入し、肛門にも忘れずに注射針を刺す。

・・・まだまだ、いくよ　・・・

女は弥生のクリトリスの根本、包皮との隙間にも注射針を刺す。尿道、膣、会陰、弥生のありとあらゆる箇所に女は注射器で媚薬を注入していった。そして、ポルチオだけでなく、乳首とクリトリスにはローターをガムテープで貼り付け、肛門にもアナルバイブを押し込み振動させる。

「あぶぶぶぶぶぶぶ、ぶっぶうぅぅぅぅーーー　」

「あははっ、もう何言ってるか分からないよ　ウケるぅ　」

弥生は全身を性感帯にされ、発狂した後でもイカされ続けていた。バルトリン腺は粘液を大量に分泌し洪水のように性器から溢れ、逆さに吊られた弥生の体を濡らしていく。その弥生の姿を見ているうちに女は自分の気持ちもどうしようもないほど残酷に昂ってきているのに気付いていた。

大勢の人間に凌辱・調教・拷問される弥生　４（後書き）

ポルチオという初めての性感帯を開発され連続イキの快楽地獄に堕とされ哀れにも発狂してしまった弥生。その弥生の姿を見た女にも変化が訪れる。

大勢の人間に凌辱・調教・拷問される弥生　5（前書き）

今回、弥生はかなり酷い事になりますので、性器破壊など苦手な方は御遠慮ください。
よろしくお願いします。

大勢の人間に凌辱・調教・拷問される弥生　5

大勢の人間に凌辱・調教・拷問される弥生　5

弥生は媚薬を注射されポルチオを開発された挙げ句、連続イキでイカされ続け、ついに発狂させられた。もう弥生の頭の中には、性の快感の事以外何もなかった。全てが性快感で塗り潰されてしまったのだ。

「あぴゃあ、あぴゃぱぱぱぱぱぱぁぁぁーーー　」

無様な姿だった。意味不明の言葉を吐きながら、逆さに吊られたまま腰を激しく動かして、弥生はイキ続けている。

弥生をそんな姿にした女は、だんだんと残虐な気持ちが湧き起こってきた。

・・・もう、この女　徹底的に壊してやる　・・・

女はさらに弥生のポルチオを刺激し、同時に肛門も刺激する。弥生の肛門に突き刺したアナルバイブをずぼずぼと激しく動かしているうちに、弥生の肛門から大便がどろりと漏れ出していた。

「うわっ、汚ない　この女、ウンコ漏らしてるよ　人前でウンコ漏らすなんて、恥じらいってものがないね　」

女は弥生の肛門からアナルバイブを抜くと、途端に大便が文字通

り噴き出した。

ぶり、ぶり、ぶり、ぶり、ぶりぃぃぃぃ

「この女、マジ　汚ない　もう我慢出来ない　あんたの股の汚ない穴、全部壊して使えないようにしてやんよ　」

女は浣腸器を見つけ高濃度のグリセリン液をいっぱいに満たし弥生の肛門に突き刺した。

ぢゅーーっ

シリンジ内の全てのグリセリンを残す事なく弥生の中に注入する。もちろん、1回では終わらない。女は浣腸器にグリセリンを満たすと、何度も何度も弥生の中に注入した。弥生の腹が膨れ、注入にもかなり抵抗が感じられてきても女は、力任せに弥生の中に無理矢理注入していた。そして、直径5センチもあるアナルプラグを無理矢理押し込んで、すぐには排泄出来ないように弥生の肛門を封印する。

「あははっ、お腹パンパンに膨らんでるよ　可哀想に苦しいよねでも、もっと苦しめてあげる　マンコもズタズタにしてあげるからね　」

どうやら女は徹底的に弥生を痛め付けるつもりのようであった。

「ふふっ、こんな物も置いてあったよ　ここに置いてあるって事は使っていいって事だよね　」

女が手にしていたのは小型の電動ドリルだった。

「これ確かドリルの部分付け替えられるんだよね　」

女はぶつぶつ言いながら、棚を探し太さの違うドリルを発見する。

「へぇ、ここまで用意してあるって事は間違いないね　これを使って穴を開けて欲しいって事なんだね　ここまでくると変態というより頭がおかしいね　まあ、それならお望み通りにしてあげるわ　」

女はまず直径１０ミリのドリルをセットし弥生の性器を開く、そして、弥生の尿道に狙いをつけドリルの電源を入れ押し込んでいく。

チュイーン

「あぶぶぶぶぶぶぅぅぅ　」

高速で回転するドリルの高い音と弥生の絶叫が響き渡る。女は弥生の尿道にドリルをどんどん突き入れていき、１０センチも突き入れてしまった。そして、女が弥生の尿道からドリルを抜くと、まるで噴水ように弥生の尿道から血が噴き出した。

「あははっ、おもしろーい　おしっこの穴、拡がっちゃったね　」

女は楽しそうに笑いながら血にまみれたドリルを付け替えている。今度は直径１５０ミリもある巨大なドリルを装着していた。

「さあ、こんな物を用意していたあんたのお待ちかねの事をしてあげるわ　して貰いたくて仕方なかったんでしょう　もっとも、もう頭がおかしくなって理解出来ないでしょうけどね　」

女は弥生の膣口にドリルの先端を当て、残酷な笑みを浮かべた。

「あんたの望んでいた事　あんたの女を壊してあげるわ　このドリルを突き入れて、あんたの膣と子宮をぐちゃぐちゃにして大きな穴を空けてあげる　」

女は電動ドリルのスイッチを入れる。

チュイーーン

高速で回転するドリルの回転音が響き、女は弥生の膣にドリルを押し込んだ。

「さあ、あんたのマンコを完全に殺してあげるわ　」

ギュイーーーン！！

「あぴゃぴゃぴゃぴゃぴゃぁぁ、あっぴゃあぁぁぁぁぁーーーーっ　」

弥生の膣が削り取られ血と肉片となり消滅していく。もちろん、膣だけではない直径１５センチものドリルを突き入れられているのだ。弥生の小陰唇も大陰唇もクリトリスも、弥生の股間、性器の全てが肉片に成り果て消滅していた。それでも、女は嬉々として弥生の性器にドリルを突き入れていた。もう１０センチ近く弥生の性器にドリルは突き入れられ、いよいよ弥生の子宮を破壊する位置まできていた。

「ほらいくよ　あんたの女の最後だ　」

女は弥生の性器にドリルを押し込んでいく。

ギュイーーーン！！

「あばばばばばばばばばばばばばばっ　」

「あっはぁぁーーーーっ、おもしろーーいっ　」

面白そうに弥生の性器にドリルを突き刺す女は、もう２０センチ近く弥生の中にドリルを突き入れていた。もう完全に弥生の子宮は破壊され、卵巣もドリルの回転に巻き込まれ肉片と化しているのは間違いなかった。

女がドリルのスイッチを止め抜いてみると、弥生の股間にはぽっかりと大きな穴が空いていた。そこにはもう弥生の性器は存在していなかった。弥生の性器は全てが消滅していた。女は、そこで終わりにはせずに、弥生のぽっかり空いた股間の穴に液体燃料を入れ、点火する。弥生の股間から炎が激しく立ち上がり弥生の肉が焦げる匂いが辺りに漂う。

「お股が燃えてるよ　どんな気持ちか訊きたかったけど、あんたもうまともに喋れないもんね　残念　」

女は燃えている弥生の股間を楽しそうに眺めていたが、今度は弥生の顔面に液体燃料を吹き付けていた。

「あんたの不細工な顔も焼いてあげる　」

残酷に笑った女は躊躇いもせずに弥生の顔面に点火した。弥生の盤面が燃え上がる。さらに女は蝋燭に火を点け、その火で弥生の乳首を焼き始めた。弥生は股間、顔面、乳首と焼かれビクンビクンと体を大きく痙攣させていたが、そのうちに動かなくなっていった。

弥生は体を残酷に焼かれ絶命していた。すると、扉が開いて武装した妖怪が入ってくる。そして、女をガシッと捕らえていた。

「ちょっと、ここにある物は使っていいって言ってたよね　それに殺しちゃダメなんて言ってなかったし　私、悪い事してないよ　」

女は狼狽えて暴れるが逃れる事は出来ない。

「あなたは記憶を消され人間界に帰されます　」

「へっ？　」

「弥生様は、自分を殺すような人間は合格なので帰すようにと仰っていました　死んでしまっては評価を伝えられないですが、自分を殺すほど徹底的に壊してくれれば満足しているのは間違いないとの言付けです　」

・・・あんた、本当に変態で頭がおかしかったんだね　・・・

女は頭の中で思ったが口には出さずにいた。

＊　＊　＊

弥生が考案したこのイベントも最後の一人になっていた。最後の男は、弥生と向き合い〝名城弘毅〟だと名乗った。

「お互い名前くらい知っていた方がいいと思いまして　それでは衣服を全て脱いで下さい　」

その男の普通な感じに弥生は不安をおぼえていた。普通のセックスでは私は満足しませんよ。弥生は、名城を普通の男だと思っていたが、それは次の言葉で認識を新たにする。

「僕がやることは非常にシンプルです　ある映画のワンシーンを再現するつもりですが、テリファーという映画をご存知ですか」

男は笑いながら言うが、弥生はもちろん知っている。そして、あの映画で再現するシーンと言ったら、あの場面に違いない。弥生は確信し、改めて名城の顔を見る。

「知っていますよ　あのシーンを再現するつもりですね　でも、あなたに〝アート・ザ・クラウン〟と同じ事が出来るのですか」

「へえ、知っているのに落ち着いていますね　僕が出来ないと思っているのですか　残念ですが、やりますよ　僕は何としてでも戻りたい　おそらくあなたに普通の事をしていては満足させる事は出来ないでしょう　あなたの体の焼き印からみて、あなたは被虐趣味であるのは間違いない　そのあなたを満足させる為には相当な事をしないとね」

「分かりました　それでは時間がありません　すぐに準備を始めた方がいいでしょう」

「本当に落ち着いていますね　もしかして違うシーンと勘違いしていませんか　僕がやるのは」

「分かっていますよ　私のマンコから真っ二つに切断するんですよね　あの映画の一番の見所です」

名城はそれと分かって落ち着いている弥生に驚いていたが、確かに時間がない。名城は弥生の腕を背中に回しきつく縛りあげると、急いで開脚逆さ吊りにする。

「映画の中の女の子は何も言わず切断されましたから、あなたには今の気持ちを訊いておきます　どうです、これからマンコを切断される気持ちは？」

「怖いですよ　当たり前でしょう　マンコ切断されるのですよ　怖くない訳がないじゃありませんか」

よく見ると吊られている弥生の体はぶるぶると震えていた。

「良かった、安心しましたよ　それでは、あまり騒がれるのも嫌なので口を塞ぎますね　それと、救いを求めるような目で見られるのも嫌なので目も塞ぎます」

名城は弥生の口に弥生が穿いていた下着を押し込みガムテープを貼り付ける。そして、弥生の目の上にもガムテープを貼り付け塞いでいった。

「もう少し準備しますね」

名城は弥生の小陰唇をくぱぁと開きテープで開いたまま固定する。弥生の尿道や膣が丸出しにされていた。

「さあ、準備ＯＫです　映画では手引きのノコギリでしたけど、時間がないのでこの用意されている電動の回転ノコギリを使わせてもらいますね」

電動ノコギリのスイッチを入れた名城は弥生の性器に近づけていく。

「ふぅ、ふぅ、ふぅ、ふぅ、ふぅ、ふぅ　」

弥生の鼻息が荒くなり、弥生の尿道からチョロチョロと尿が漏れてしまっていた。

「あははっ、ホントに怖いんですね　その恐怖に震えて漏らす姿、良いですよ　それじゃ、いきますよ　それっ　」

ギュイーーーン！！

「ふごおぉぉぉぉーーーーーっ　」

弥生の性器はノコギリで切断され、弥生は絶叫し反り返っていた。

「ふごおぉぉ、ふごおぉぉぉぉーーーーーっ　」

弥生はもう恥丘の半分まで切断され、膀胱から尿が噴き出し、肛門も切断されているので大便も漏れだしていた。名城はノコギリを動かしながら弥生をどんどん切断していく。そのうち、絶叫し反り返っていた弥生の体がだらんと垂れ下がり、弥生は静かになっていった。それでも、名城はノコギリを動かし続ける。

ズバァァッ！

そして、弥生の体は性器から頭まで完全に真っ二つに切断されていた。二つに分かれた弥生の体はぶらぶらといつまでも揺れていた。

誰もいない外の扉の上では青いランプが点灯していた。

大勢の人間に凌辱・調教・拷問される弥生　5（後書き）

弥生の考案したイベントは終了しました。数は少ないが、それでも何人かの人間を救い出せた事は弥生にとって嬉しい事であった。それにしても、性器を処刑される事は弥生にとってもう日常になってしまっているのかもしれない。

性器を弓の的にされる弥生（前書き）

今回も弥生は酷い目にあっていきます。
本編の方が終盤に近付いていますので、こちらのお話しも終わりに向かって終息していきます。

性器を弓の的にされる弥生

性器を弓の的にされる弥生

「だじげでえぇぇ、もおゆるじでぇぇぇぇ　」

弥生は無様に号泣していた。いつものように激しい責めが弥生の性器を襲っている。毎日のように性器を拷問されている弥生だが、その苦痛に慣れる事はない。むしろ、その痛みを知ってしまったが故に、却って恐怖で震える事になる。これから凄まじい激痛が自分の性器を襲う。そう分かってしまう為に、弥生は恐怖で泣き叫ぶのだ。本日の拷問処刑メニューを告げられた時、弥生はもう自分が殺されるまでの苦痛を全て理解していた。全て経験している責めだからだ。弥生は今日も性器だけを集中的に拷問され処刑される。それはもう逃れられない運命だった。また、あの耐え難い地獄の激痛のなか、性器を壊されていき処刑される。弥生が泣き叫ぶのも無理はなかった。

「ぶぎゃぁぁぁーーーー　」

弥生は全裸にされ柱に付けられた鎖で手足を四方に引かれ空中にうつ伏せにされていた。

「引き伸ばしの拷問だ　これだけでもかなりの苦痛を伴うが、当然これだけでは終わらない　弥生の好きな性器拷問を同時に執行するから喜べ　」

しかし、弥生の耳にはもう言葉は届かなかった。手足が思い切り引っ張られ、間接がギシギシと音を立てている。弥生は上から見ると〝土の字〟の形に拘束されていた。そして、弥生の剥き出しの性器に木刀が打ち込まれている。

ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ

「ひぎぃぃぃぃーーーー」

弥生の柔らかい性器に木刀が叩き込まれる鈍い音と弥生の悲鳴が響き渡る。弥生は大陰唇も小陰唇もクリトリスも木刀で滅多打ちにされていた。手足を引き伸ばされ身を守る事も出来ない弥生の柔らかく敏感な性器に木刀が容赦なく叩き込まれる。

ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスウウッ！

「あっびゃぁぁぁーーーー」

弥生の涙と鼻水を流し苦痛に歪む顔がアップで撮影されている。もちろん弥生の木刀を叩き込まれている性器も鮮明に撮影され、弥生の顔と性器が画面上で並んで観られるよう編集されていた。弥生の号泣する惨めな顔と、叩き潰されていく無様な性器を同時に観る事が出来、この撮影動画は好評を博していた。

シャァァァーーーー

木刀を性器に打ち込まれ弥生は勢いよく尿を漏らしていた。

グシャッ、グシャッ、グシャッ、グシャッ、グシャッ、グシャッ、グシャッ

「あびゃびゃびゃびゃびゃ　あっびゃぁぁぁーーーー」

尿を漏らしながらも弥生は許される事なく性器に木刀を打ち込まれる。それでも、弥生はツルペタの胸で乳首を勃起させ、バルトリン腺から粘液を分泌し性器をグショグショに濡らしていた。

さんざん木刀を打ち込まれた弥生の性器に次の性器拷問メニューが準備される。大容量のイルリガートルが三つ用意され、各々からのびるチューブが弥生の肛門、子宮、尿道に容赦なく奥深くまで挿入され、コックが捻られ中の液体が注入されていく。

「あびゃあぁぁぁぁーーーー　ぢぬうぅぅぅーーーー」

弥生の絶叫が響き渡る。弥生は直腸、子宮、膀胱に塩酸を注入されていた。肛門と尿道から注入されている塩酸は薄めてあるが、子宮に注入されている塩酸は逆に濃い塩酸が注入されている。弥生の股間から子宮が溶ける異臭と白煙が上がっている。

「だじげでえぇぇぇーーーー　ゆるじでぐだぢゃいぃぃぃーーーー」

弥生は涙と鼻水とヨダレで汚れた顔で必死に許しを乞うが、許される訳がない。弥生は性器を破壊され尻子玉を抜かれる為だけに存在を許されているのだ。弥生が苦しめば苦しむ程、惨めで無様な姿を晒す程、周囲は歓声に包まれ盛り上がっていく。

「あびゃあぁぁぁぁーーーー」

弥生の股間の3つの穴から、ドロリとした赤黒い液体が流れ出している。塩酸で溶けた体組織が血と混じり流れ出しているのだ。凄まじい光景だった。

「あびゃあぁぁぁぁーーーー」

弥生は絶叫し続けている。当然の事だった。体を、性器を溶かされているのだ。その苦しみは筆舌に尽くし難い。それでも、弥生が許される事はない。それもまた当然の事だった。

「ようし、なかなか良い表情になったぞ、弥生　次は小陰唇だ　いつものこれをやらねば不満が残るであろうからな」

弥生の股間に冷たい光を放つハサミを持った河童が近付いていく。弥生は塩酸を注入されたまま小陰唇もハサミで切断されていく事になる。河童は弥生の小陰唇をびろーんと引き伸ばすとハサミの刃で挟んだ。

ジョキン！！

「あびいぃぃぃーーーー」

弥生の小陰唇を切断する音が響き、続いて弥生が絶叫する。

ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ

「いだあぁぁーーーっ、ゆるじでえぇぇーーーっ」

弥生の左の小陰唇が無惨にも切り取られていた。そして、続いて右側の小陰唇もジョキジョキと切り取られていった。弥生は涙と鼻

水を大量に垂れ流し号泣している。弥生の性器は小陰唇を切除され血を流している。もちろん、その間も塩酸は注入され続け、弥生の子宮をはじめ、弥生の体を溶かし破壊し続けていた。

「ゆるじでぐだぢゃい　もおごろじでえぇぇーーーっ　」

体の中を焼かれる、そのあまりの苦痛に弥生が懇願するが、当然その願いは聞き届けられない。

「さてと、これから弥生には我が兵の訓練に付き合ってもらう　弓の的になってもらうからな　」

大開脚されている弥生の股間を眺めながら〝千餐王〟は笑っていた。そして、弥生の子宮、尿道、肛門から、ようやくチューブが抜かれ、弥生への塩酸責めは終了した。〝千餐王〟は選抜した兵士の前で説明する。

「この空中に拘束されている弥生の性器を弓で狙ってもらう　見事、弥生の子宮を射ち抜いた者には褒美を授けよう　」

王の言葉に選ばれた兵士たちから歓声が上がった。早速、弓を射つ順番が決められ一人目から弓を構えた。そして、弥生の性器目掛けて慎重に狙いをつけ矢を放つ。

ヒュンッ

鋭い風切り音が響く。

ドスゥッ！

「ひぎゃあぁぁーーーっ！」

矢は弥生の大陰唇に深く突き刺さっていた。狙いを外しがっくりと肩を落とす河童を押し退け、次の河童が弓を構えた。弥生の性器から矢が抜かれ、準備が整うと二番目の河童も矢を放つ。

ドスゥッ！

「ひぎいいいいーーーーーっ！！！」

一際大きな絶叫が響き、矢は弥生のクリトリスに命中していた。弥生のクリトリスは矢で射貫かれ消滅してしまっていた。〝千餐王〟は、がっくりと項垂れる弥生の髪の毛を掴み顔を確認する。弥生の顔は大量の涙と鼻水で汚れ無様なものだった。

「どうだ、弥生　嬉しいか」

「ううううっ……　は、はい、変態マゾの弥生はクリトリス射貫かれて嬉しい……です……」

泣きながら答える弥生に満足した〝千餐王〟は、次の矢を射つよう促す。

ドスゥッ！

「あぶうぅぅぅーーーーっ！！」

次の矢は弥生の性器を外れ、弥生の肛門に深く突き刺さっていた。弥生の体がガクガクと痙攣する。

「なかなか当たらんな　これでは時間がかかってしまうので時間制限をしよう　」

王の命令で空中にうつ伏せに手足を引き伸ばされて固定されている弥生の乳首に太い釣り針が突き通される。そして、その釣り針に錘がぶら下げられた。

「あびゃあぁぁーーっ、ちぎれるうぅぅーーっ　」

絶叫する弥生を楽しそうに眺めながら〝千餐王〟が宣言する。

「弥生の乳首が千切れて錘が落ちたらタイムオーバーだ　それまでに弥生の子宮を射貫いてみろ　」

〝千餐王〟の言葉に弓を持ち並んでいる河童たちは、前の者に早くしろと急かし始めた。自分の順番がくる前に、弥生の乳首が千切れてしまってはそこで終わってしまう。とはいえ慌てて射っては弥生の性器、それも子宮を射るのは難しい。実はこれは、兵士に戦場での戦いの心得を学ばせる為に、弥生自身が進言し採用されたものだった。早く正確に射る。弓手にはそれが求められる。これからの戦いの中で遠距離攻撃は必須だ。そのレベルを上げておくための策だった。

ヒュンッ

ドスゥッ！

「あびゃあぁぁぁーーーっ　」

矢は弥生の割れ目に突き刺さっていた。しかし、残念な事に膣口

は外れ、尿道と膣の間に突き刺さりブルブルと揺れている。そして、もう矢を抜く間も惜しむようにすぐ次の矢が放たれた。

ドスゥッ！

「あびゃびゃびゃびゃびゃあーーーっ　」

またも弥生の子宮からは外れ、矢は弥生の会陰に突き刺さっていた。連続で性器に矢を射ち込まれ弥生が暴れた為、乳首ももう千切れそうになっている。残りの時間は少なそうだった。

ヒュンッ、ヒュンッ、ヒュンッ

立て続けに矢が放たれ、それは弥生の股間に命中し突き刺さる。弥生の肛門に尿道に膣前庭窟に矢が突き刺さり、弥生は絶叫し激しく暴れた。弥生の乳首に付けられた錘もぶんぶんと大きく揺れ、そして、ついに弥生の乳首が千切れ錘が落ちていく。

ヒュンッ

その瞬間、最後になるであろう矢が放たれた。

ドスゥッ！

「あっぶうぅぅぅぅーーーーっ　」

弥生は大きくのけ反り絶叫した。その最後の矢は、見事に弥生の膣を裂きながら子宮に突き刺さり貫通していた。弥生は口から泡を吹いて、体をびくびくと痙攣させている。

「見事だ　それでは褒美をやろう　この弥生をすきにして尻子玉を食すがいい」

”千餐王”の言葉に小躍りした河童は、巨大な鉈のような武器で弥生の腕と脚を切断していく。弥生はあっという間に四肢を切断され、頭と胴体だけになっていた。河童はその弥生の首にロープを巻き、首吊りにすると下から弥生の肛門に腕を突き入れた。

ズボウゥゥッ

弥生は肛門から尻子玉を抜かれ、泣きながら笑い、そして、静かになっていった。

性器を弓の的にされる弥生（後書き）

最後の戦いに向けての準備がなされ弥生の運命も加速されていきます。弥生の本当の最後はどうなるのか。それまでは弥生は、尻子玉を抜かれる為に拷問され続ける事になるでしょう。

地面から突き出た杭で自慰しながら鞭で打たれ潮を吹く変態マゾ弥生（前書き）

本編の方では、いよいよ最後の戦いが始まります。
弥生はその準備の為、隠してきた自分の本性をさらけ出す覚悟をします。

地面から突き出た杭で自慰しながら鞭で打たれ潮を吹く変態マゾ弥生

地面から突き出た杭で自慰しながら鞭で打たれ潮を吹く変態マゾ弥生

弥生は会談の席にいた。弥生の両隣には河童の王である”千餐王”と大天狗太郎坊が控えている。

「お久しぶりですね、九尾　あの時（注）は私の仲間を救って頂いて感謝しています　あの時、私は自分の都合で助ける事が出来なかったので代わりに救って頂いて有り難かったです　それでそれとは別に、あなたの力を私に貸して貰えませんか　」

「どういう事なのか、わたくしにはさっぱり分かりませんが、説明していただけますか　青姫　それに、わたくしの力などなくとも、その隣にいる河童と天狗がいれば十分ではないですか　」

「あなたなら気がついていると思いますが、異界も含めたこの世界に危機が迫っています　その危機を回避するために力を貸して欲しいのです　すぐに返事をくれとは言いません　また改めて伺わせて頂きます　」

呆気にとられる九尾を後にして外に出た弥生はポツリと呟いた。

「私の本性をさらけ出して多くの人に知って貰わねば……　私が頭のおかしい変態マゾだと認識してもらって蔑んでもらわないと……　」

弥生はくるりと千餐王と太郎坊を振り向く。

「二人とも協力して下さい」

弥生は決意を秘めた顔で言った。

＊　＊　＊

弥生は、全裸に黒いサイハイソックスだけ穿いていた。ツルペタの胸に寸胴の体型。焼き印も捺された無様な体を晒し、見晴らしの良い丘の上に設置された自慰用の太い杭の前に立つ。杭は二本地面から突き出ていた。一本は直径１０センチある杭で、丸く滑らかな先端から少し下が括れたようになっている。それは、まるで巨大な男性器のような形をしていた。そして、もう一本は太い杭に並ぶように４センチの杭が突き出ている。こちらの同じ様に男の陰茎のような形状をしていた。弥生は、その杭を見ただけで性器を濡らし始めていた。二本の杭、それはその見た目通り弥生の膣と肛門に突き刺し自慰するための性具である。

弥生は二本の杭の上に股がると慎重に自分の膣と肛門に性具の先端を当て、腰を下ろしていく。

「おっ、おぉっ」

小さく声を上げた弥生の膣と肛門に性具がずるりと入っていく。弥生はがに股になり足を開いて性具を膣と肛門に挿入したまま両腕を背中に回す。

「準備、お願いします　」

弥生の言葉で周囲に控えていた妖怪たちが一斉に動き出す。まず、弥生は両腕を高手後手に縛りあげられ、太ももに革の丈夫なベルトが巻かれ、地面に設置された鎖と連結される。これで弥生は、自分で膣と肛門から性具を抜く事は不可能になった。そして、釣り針状の針に錘が付けられた拷問具が弥生の小陰唇に突き刺されていく。

「ひぎぃぃぃぃーーーっ　」

絶叫する弥生にかまわず錘は弥生の小陰唇に左右5個ずつもぶら下げられた。もちろん、小陰唇だけではない。小陰唇にさげられた錘よりも一回り以上大きい錘がクリトリスに突き刺されぶら下げられる。

「あぎゃあぁぁーーーーっ　」

敏感な小さな突起に針を貫通され再び絶叫する弥生に撮影機器が向けられる。そして、カメラに向かって挨拶するよう命令された。

「私は西園寺弥生　御覧のような変態です　」

弥生が挨拶を始めると、顔のアップから弥生の体の隅々をカメラは嘗めるように撮影していく。焼き印を捺されたツルペタの胸、同じく焼き印を捺された腹部、そして、大量の錘をぶら下げられ杭状の性器が突き刺さる性器。また逃げられないように固定された太ももやきつく縛られた両腕もアップで撮影された。

「ド変態の弥生は、この格好のまま腰を上下に動かしてオナニーします　弥生は今まで隠してきましたが、こんな事をされるのが大好

きな変態なんです　今まで隠していてすいません　思い切り軽蔑して下さい　もう一度言います　弥生はマンコを痛めつけられ調教されるのが大好きな変態マゾです　私のマンコはまだ、オナニーを始めていないのに、もう濡れてしまっています　これを御覧の皆様はこんな弥生を蔑んで笑って下さい　それでは、ド変態マゾの弥生が無様にイク姿をお楽しみ下さい」

弥生は挨拶が終わると、目に黒い布がぐるぐる巻かれ目隠しもされてしまう。さらに首にロープが巻かれ、もし弥生が意識を失ったりしたら、そのまま首吊りになるようにされてしまう。そして、弥生の硬く勃起した二つの乳首にも蝋を染み込ませた木綿の糸が巻かれ点火されてしまう。弥生の乳首で二つのオレンジ色の炎が揺れていた。

「あぢゃあぁぁぁーーーーっ」

乳首を燃やされ弥生は絶叫するが、それで火が消される事はない。弥生の乳首が燃え尽き炭になるまで炎が消される事はないのだ。そして、早く自慰を始めるよう弥生は命令される。弥生は目隠しから大量の涙を滲ませながら、がに股で足を開いたまま腰を上下に動かし始めた。乳首の炎も上下に揺れ、性器に付けられた錘も激しく揺れぶつかり合いカチンカチンと音を立てる。弥生は、乳首を炎で焼かれる激痛と、小陰唇とクリトリスを錘で引き千切られる激痛に泣きながらも腰を上下に動かす。

「あぶっ、あぶっ、あぶっ、あぶっ」

こんな目にあいながらも弥生は息が荒くなり、膣と肛門に突き刺されている性具状の杭は粘液と腸液で激しく濡れてきていた。弥生の上下に動かす腰の動きも加速度的に速くなっていく。

「あひっ、あひっ、あひっ、あひっ、あひっ　」

天を仰いで声を上げる弥生の前後に、鞭を持った妖怪が現れた。
そして、拘束され自慰を続けている弥生に向かって鞭を思い切り叩き込む。

バシィッ、バシィッ、バシィッ、バシィッ、バシィッ、バシィッ、バシィッ!!

「あびゃっ、あびゃっ、あびゃっ、あびゃっ、あびゃっ、あびゃっ、あびゃっ　」

弥生は鞭打たれながらも腰の上下の動きは止めようともしない。
それどころか、さらに激しく腰を動かし始めていた。

「イグッ、イグッ、イグッ、イグッ、イグッ、イグウゥゥッ　」

弥生は自慰しながら体を鞭で打たれ、絶頂に達しようとしていた。
その様子を察知した妖怪は強烈な鞭の一撃を弥生の性器と肛門に思い切り叩き込んだ。

「あっ、びゃあぁぁぁーーーーっ　」

プシャァァーーーッ!

弥生は、激しく潮を吹いてイッテしまっていた。しかし、これで終わりではない。弥生の乳首はまだ炭になっておらず、小陰唇もクリトリスも千切れてはいない。イッテしまったからといって弥生が許される事はないのだ。

次に弥生に注入する為の媚薬が用意される。その媚薬は人間界で使用されている媚薬の、ゆうに数百倍の効果のある異界の媚薬だ。その強力な媚薬が、弥生の会陰に注射針が深く刺され注入されてしまう。さらに尿道と膣の間にも注射針が刺され注入される。これだけでも廃人になってしまう程の量だが、弥生は口を無理矢理開かされ、この媚薬を経口投与もされてしまう。弥生は人間界には存在しない強力な媚薬を飲まされ、注入されてしまい、体が、性器がどうしようもないくらい火照ってきていた。

「あぢゃあぁぁーーーっ、あぢゃぢゃぢゃぢゃ、あぢゃあぁぁぁーーーっ」

弥生は無様に声を上げ、狂ったようにまた腰を上下に動かしだした。その激しさは先程までの比ではない。弥生の膣と肛門からは、粘液と腸液に混じり血が流れ出していた。自分の膣と肛門を傷つけても弥生はかまわず腰を激しく動かす。もう、乳首が燃やされている感覚も、小陰唇とクリトリスが千切れる感覚も弥生にはなかった。ただ自分の膣や子宮に性具を突き入れる感覚だけが弥生を動かしていた。もう弥生は子宮口を突き破り、子宮の中に性具を突き入れ、子宮を串刺しにしたい。その欲求だけが弥生を支配していた。

「おぼっ、おぼっ、おぼっ、おぼっ、おぼっ」

弥生は自分の子宮を性具で串刺しにするためさらに激しく腰を動かしていく。弥生の膣から流れる血の量が爆発的に増え、弥生の腰が上下に動く幅も大きくなっていく。もう、おそらく弥生の子宮口は破壊され、性具の先端は弥生の子宮の中に入っているのかも知れない。弥生の乳首は真っ黒に焼け、小陰唇も千切れ幾つかの錘が地面に落ちていた。それでも、弥生は腰を動かすのを止めない。

「イグッ、イグッ、イグッ、イグッ　」

弥生は再び頂点に登り詰めようとしていた。弥生の体に叩き込まれる鞭も激しさを増していく。そして……。

ズボウォォッ！！

激しい音がして今まで以上に性具が深く弥生の膣と肛門に突き刺さっていた。

「あびゃあぁぁぁーーーーーっ　」

プシャァァーーーッ

弥生が絶叫し、潮を吹くと同時に膣と肛門から血が大量に噴き出した。弥生は泡を吹いて気絶してしまい、首吊り状態になっている。自分で子宮を串刺しにして破壊した弥生は哀れにもこのまま絶命するかと思われたが、次の命令がくだされた。

「良いだろう、爆破しろ　」

弥生が子宮を串刺しにした性具の先端には爆薬が仕込まれていた。弥生が子宮を串刺しにしたら、その後、子宮ごと爆破して弥生にトドメをさす計画が初めから出来ていたのである。そして、躊躇なく起爆スイッチが押された。

ボスゥゥゥッ！！

鈍い音が響き弥生の下腹部が全て吹っ飛んだ。小陰唇も大陰唇もクリトリスも膣も尿道も膀胱も子宮も卵巣も、全てが肉片となり消

滅していた。下腹部の失くなった弥生はぶらーんと完全な首吊りになり、その胸では乳首が燃え尽き炭になっていた。弥生は哀れにもぶらぶらと揺れる物言わぬ物体になっていた。

＊　＊　＊

翌日、アイテムで再び生を受けた弥生は宣言する。

「もう時間がありません　私が今まで自分のマンコにして貰いたいと思った事を全てやって貰います　」

この世界の最後の時が迫ってきているのを感じた弥生は今まで以上に自分の性器を破壊する行為を切望する。そして、弥生は台の上に仰向けに大の字に固定される。その弥生の大きく開いた足の中心、性器に向かって回転ノコギリが迫っていく。

チュイーーン！！

「ひぎぃぃぃぃーーーっ　」

回転ノコギリの刃が弥生の性器を本当の割れ目に変えていく。回転ノコギリは容赦なく弥生の性器を切断していき、恥骨ごとへその下まで真っ二つに切り割いていた。ビクンビクンと痙攣する弥生の頭が巨大な岩で潰され完全に絶命させられる。

また、弥生は両腕を縛られ開脚させられ、ズボッと膣から口まで串刺しにされる。そして、その後肛門からも串刺しにされた挙げ句、頭を爆破され完全に絶命させられる。

弥生はそれから毎日性器を破壊され絶命させられた。

（注）Ｒ１８「性器処刑され惨殺されるヒロインたち」全６話及び、本編三部１２話を参照

地面から突き出た杭で自慰しながら鞭で打たれ潮を吹く変態マゾ弥生（後書き）

性器破壊、その名の通り性器爆破、性器切断や性器串刺しなど、これまで弥生が密かに抱いていた願望。
その自分の本性をさらけ出し、性器破壊を本当に連日実行される弥生。
性器を破壊され絶命する時、弥生は何を思ったのか……。

この番外編も、このお話で一応完結とさせて頂きます。本編が長引くようであれば、あと一話くらいいけるかな……。

新しいリアクション機能というものが実装されたようです。使ってみて貰えると嬉しいです。
よろしくお願い致します。

土下座して足の指を舐め許しを乞う弥生（前書き）

一話書いたので投稿しておきます。
まだ、時系列的にもおかしくないと思うので……。
完結詐偽みたいですみません。
本編で、九尾が用事が出来たと言って席を外した後のお話しです。

土下座して足の指を舐め許しを乞う弥生

土下座して足の指を舐め許しを乞う弥生

「お前がこんな変態であったとは嬉しいですね　もっと早くに知り合えていたら、毎日たっぷりと痛め付ける事が出来ましたのに　」

残念そうに言う橋姫の足先を泣きながらペロペロと舐めている者がいた。両腕を高手後手に縛りつけられ全裸にされている女が、必死に橋姫の足指の間まで舐めていた。よく見ると女は首輪もはめられ足首にも足枷が装着され、その足枷には鎖で鉄球がつながれていた。これでは、この女が逃亡しようと試みても、それが叶う事はあり得なかった。橋姫は、その女の体に鞭を叩き込みながら足を舐めさせていた。

「もう、お許し下さい　橋姫様　」

「許す訳がないではありませんか　これから、お前の大好きなマンコ処刑を執行して殺して差し上げますよ　嬉しいでしょう　」

すると、女はそれまでと打って変わり嬉しそうな声を上げる。

「ああ、嬉しいです　早く私のマンコ、ぐちゃぐちゃに壊して下さい　想像しただけで私のマンコは濡れてしまっています　」

「本当に救いようのないド変態ですね　まあ、私も楽しいですよ

人間というのは本当に面白い　」

橋姫は、自分の足を舐めている女の顔を蹴り飛ばした。そして、無様に仰向けに転がった女の顔を跨ぐ。

「飲みなさい　一滴残らず飲み干しなさい　」

そう言うと橋姫は、女の顔に跨がったまま放尿した。透明な液体が女の顔に降りかかる。それを女は大きく口を開いて受け止めていた。ジョボジョボと女の口の中に小便が溜まっていく。女は、口一杯小便を溜めると、ごくりと飲み込んだ。

「ふははっ、良いですね　美味しいですか、弥生　」

小便を飲んでいた女は西園寺弥生だった。

「はい、美味しいです　弥生の汚いマンコにも、おしっこかけて洗って下さい　」

弥生は上気した顔で橋姫に懇願する。橋姫は弥生の足をガバッと大きく開くと、弥生の性器に向かって放尿した。

「あ、ひいぃぃーーーっ　」

弥生は自分で腰を動かし、自分のクリトリスや尿道や膣に小便が当たるように調整していた。

「あひっ、あひっ、あひっ、マンコいくうぅぅっ」

弥生は自分の性器に小便を浴びせられ、それだけで声を上げイキ

そうになっていた。そんな弥生を橋姫は穢らわしい物でも見るような目で見ていたが、そこで弥生をイカせずに放尿を止めてしまう。

「まだイカせないよ　さあ、立ちなさい　そして、足を開くのです」

橋姫の命令で弥生はよろよろと立ち上がり、足を大きく開く。その弥生に橋姫は、釣り針に錘の付いた拷問具を見せる。

「この錘は一つ３００グラムの重さがあります　この錘をあなたの体中に大量に付けていきますね　マンコだけと思わないで下さいね　あなたの女を壊していきます　まず、舌を出しなさい」

橋姫の命令で弥生がベロンと舌を出すと、橋姫はその舌を摘まみ釣り針を突き刺す。

「ふぐうぅぅっ」

「ふふ、一つじゃないですよ」

橋姫は続けて弥生の舌に釣り針を突き通していき、弥生は四つもの錘を舌に下げられていた。更に舌だけではなく、下唇と上唇にも錘を付けていく。それだけでは終わらなかった。弥生の鼻にも釣り針が通される。鼻の左右と鼻中の三ヶ所に錘が下げられた。

「ふぐうぅぅっ」

弥生は顔面に大量の錘を釣り針で装着され、俯いて泣いているが、それを橋姫は許さない。弥生の高手後手に縛られている腕と背中の間に鉄棒を通す。そして、その鉄棒に弥生の腰と首をベルトで固定

した。

「せっかく不細工な顔を飾り付けてあげたのだから、きちんと前を向かなければダメでしょう　」

　橋姫は弥生の髪を掴み顔を上げさせると、弥生の右の頬に鉄串を突き刺した。そして、鉄串をそのまま押し込んでいき左の頬まで貫通させる。弥生の目から涙が大量に溢れ出すが、橋姫は弥生の頬に貫通させた鉄串の両端を背後の鉄棒にベルトで固定し、弥生が頭を動かせないようにする。

「いい顔ですね　次は胸にいきますよ　まあ、これだけ貧相な胸ですと乳首中心になりますが、とはいえこの僅かな胸の膨らみも容赦しませんよ　」

「ふぐっ、ふぐうぅっ　」

　舌と口に錘を大量に下げられて喋れない弥生が何か訴えているが、それを無視して橋姫は弥生の乳首に釣り針を刺し錘をぶら下げていく。

プスッ、プスッ、プスッ、プスッ、プスッ、プスッ、プスッ、プスッ

「ふごおぉぉーーっ　」

　弥生は乳首にも片側四つ錘を下げられ、乳首が引き千切れそうなほど伸ばされていた。更に橋姫は弥生のほとんど膨らみのない胸にも無理矢理長い鉄串を突き刺していき左の胸の膨らみを貫通させた。そして、そのまま右の膨らみにも鉄串を突き刺していく。

プツンッ

「ふごおぉぉーーっ　」

絶叫し続ける弥生の二つの小さな胸の膨らみを一本の鉄串が横に貫通していた。橋姫はその鉄串の両端にもベルトをかけ、弥生の背中の鉄棒に固定する。

「なかなか良い姿になってきましたね　次は弥生のお待ちかねのマンコですよ　たくさん錘を付けてあげますからね　さあ、もっと大きく足を開きなさい　」

橋姫の命令で弥生は泣きながら足を開き股間の性器を晒す。橋姫はその弥生の足に鉄パイプを取り付け、足が閉じられないようにしてしまう。そして、弥生の左の小陰唇をびろーんと伸ばし、釣り針を刺していく。

プスッ、プスッ、プスッ、プスッ、プスッ、プスッ、プスッ、プスッ

「ふぐうぅぅっ　」

弥生は左の小隠唇に8個もの錘を付けられてしまった。その重量は2キロ以上。弥生の小隠唇は惨めにも10センチ以上伸ばされて、少しでも動いて錘が揺れたら小隠唇が引き千切れてしまいそうだった。が、更に橋姫は右の小隠唇にも釣り針を刺していく。

プスッ、プスッ、プスッ、プスッ、プスッ、プスッ、プスッ、プスッ

「ふぐうぅぅーーーーっ　」

右の小隠唇にも8個もの錘を下げられ、弥生の性器には計4キロ以上の錘がぶら下げられていた。弥生の膝はガクガクと揺れ、今にも弥生は倒れそうであったが、それを見た橋姫は弥生の首にロープを巻き、頭上の枝振りの良い木にかけ、弥生を軽く首吊り状態にする。これで、倒れる事も許されなくなった弥生の性器に橋姫はまだ釣り針を刺していくつもりのようだった。まず、クリトリスの包皮に錘を2個付ける。そして、クリトリスにも釣り針を貫通させ、3個の錘を付けてしまった。弥生のクリトリスが引き千切れそうなほど伸び、弥生が絶叫している。弥生は股間に6キロ以上の錘を下げられ、動く事も出来ず、ただ絶叫する以外なかった。

「いい姿ね、素晴らしいわ　それに、なかなか丈夫なマンコね　これだけ錘を下げられても千切れないなんてね　でも、これから引き千切ってあげるからね　」

橋姫は一本鞭を手にする。この鞭を弥生の体に叩き込み、錘を全て叩き落とすつもりだった。弥生は、鞭を構える橋姫を見て、足を限界まで開き、腰を前に付き出して橋姫が鞭で性器を打ちやすい姿勢をとっていた。

「あら、偉いですね弥生　私がマンコを鞭で打ちやすい格好をしてくれて　でも、残念　最初は顔面と胸の錘を叩き落とすのよ　」

そう言いながら橋姫は慣れたように鞭を振る。

ヒュンッ！

鋭い風切り音の後、弥生の顔面に鞭が叩き込まれ、釣り針で付けられていた錘が、幾つか飛び散った。

パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ

「あ、ぎゃあぁぁぁーーーっ　」

弥生の頬を串刺しにしている鉄串以外の錘が全て叩き落とされていた。弥生の顔面は錘が飛び散る時に釣り針で引き千切られ血塗れになっている。橋姫は続けて弥生の胸に鞭を叩き込む。

パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ

「うっ、ぎゃあぁぁぁーーーっ　」

弥生の胸の錘も鞭で叩き落とされ、弥生は絶叫する。

「さあ、あとは弥生のお待ちかねのところですよ　ほら、早く鞭で打って貰いたいでしょう　きちんとお願いしなさい　」

橋姫の命令で弥生は泣きながら口を開く。

「弥生のマンコを鞭で打って下さい　お願いします、橋姫様　変態の弥生はマンコを鞭で打たれると気持ちよくてイッてしまいます早く思い切り鞭で打って下さい　」

弥生が言い終えると同時に、弥生の錘が大量に下がっている性器に鞭が叩き込まれた。

バシィィッ！

「ひぎぃぃぃぃーーーーっ　」

鞭の一撃で幾つかの錘が千切れ飛んだが、橋姫は全ての錘を叩き落とすつもりである。続けて弥生の性器に鞭を叩き込んでいく。

「マンゴ、じぬうぅぅっ　」

弥生は絶叫しながらも大きく足を開き腰を突き出していた。弥生の性器を引き千切り、どんどん錘が飛び散っていく。

バシィッ、バシィッ、バシィッ、バシィッ、バシィッ、バシィッ

「あびいぃぃーーーっ、イグ、イッちゃうぅぅぅーーっ　」

弥生は性器が血塗れになりながら恍惚の表情を浮かべている。橋姫は、その弥生の表情を見て更に激しく鞭を叩き込んでいた。そして、弥生のクリトリスから下がっていた錘が、クリトリスを引き千切って飛んでいった瞬間……。

プッシャァァーーッ

弥生は潮を吹いて失神し首吊り状態になっていた。橋姫は弥生の首のロープを外すと意識を失った弥生をうつ伏せにし尻を高く持ち上げる。その弥生の背中に尻の方を向いて馬乗りに跨がった橋姫は、鋭い槍を手にすると弥生の膣に狙いを付けた。

「じゃあ、逝きなさい、弥生　」

槍を思い切り振り上げた橋姫は、そのまま弥生の膣に突き刺していく。

ズボウゥッ！

「！！！！！！！！！！！！！」

そして、鬼の力で槍をそのまま押し込んでいった。

「おっ、ばあああぁぁぁぁっ　」

弥生が口から血を吐き、槍の穂先が飛び出していた。弥生は性器から口まで完全に串刺しにされ、ビクンビクンと体を痙攣させるが、橋姫はもう一本槍を手にしていた。

「一本じゃ満足できんだろう、弥生　」

橋姫は、また弥生の性器に槍を突き刺した。

「おぼおおおぉぉぉっ　」

弥生の口から二本目の槍が飛び出す。

「まだまだ、いくぞ弥生　」

橋姫は続けて弥生を串刺しにする。三本、四本、五本……。弥生の口も裂け、五本の槍が飛び出していた。こうして、西園寺弥生は五本もの槍で性器から口まで串刺しにされ、哀れに絶命した。

＊　＊　＊

九尾が異界に戻ると、弥生と橋姫の間に何か奇妙な感じがあるの

に気付いた。

・・・ふむ、わたくしの不在の間に何があったのでしょう　・・・

が、それよりも早急に月に向かう必要がある。九尾は二人に、それでは参りましょうと言う。

「ええ、橋姫様　準備はよろしいですか　」

弥生は奴隷のように跪き、橋姫の足を舐めていた。

土下座して足の指を舐め許しを乞う弥生（後書き）

お読みくださりありがとうございます。
今度こそ本当にここで終了ですね。
もし、また何か書くとしたら、もう過去のエピソードしかないですけと……。書いたりして……。
弥生の運命が気になる方は、本編の方でお会いしましょう。
ありがとうございました。

伊集院明日菜の願望・前編（前書き）

本編は既に完結済みで弥生も消えてしまいましたが、このエピソードは弥生を慕う明日菜の妄想という設定で書いてみました。

伊集院明日菜の願望・前編

伊集院明日菜の願望・前編

西園寺弥生は太ももに食い込む黒いサイハイソックスだけの姿にされ、両腕は背中に回され縛り付けられていた。さらに弥生は、自慰をして汚してしまい、さらに潮を吹いて濡らしてしまった自分の白い下着を頭に被せられている。鼻と口に当たる部分に丁度下着のクロッチが当たるように被せられている為、弥生は自分自身の恥ずかしい臭いを嗅がされていた。自分のきつい臭いを嗅ぎながら弥生の息は、ハァハァと荒くなっている。そして、弥生は大きく足を開き、腰を前に突き出していた。

「ド変態の先輩には相応しい無様な格好ですね　こんな格好をさせられて興奮しているのですか、息が荒いですよ　先輩は本当に救いようがない変態ですね　」

伊集院明日菜は、興奮している弥生の姿を心底軽蔑したような蔑んだ目で見ていた。

弥生の目の前には一本の先端が男根状になった太い杭が地面から突き出している。直径１００ミリ、地面から１００センチ程突き出た杭を弥生は潤んだ瞳で見つめている。

「ド変態の先輩が大好きなオナニー用の杭ですよ　早くマンコの穴に入れたいですか　それなら私にお願いしなさい　」

明日菜が冷たい声で弥生を突き放す。

「うぅ、明日菜様、お願いします　変態の弥生のマンコの穴に入れさせて下さい　弥生のマンコはびしょびしょです　」

「へぇーっ、それなら足を大きく開いてマンコ見せて貰いましょうか　本当にびしょびしょか確認しますよ　」

「はい、明日菜様　」

弥生は素直に明日菜の命令通り足を大きく開いた。弥生の股の中心から、ツーッと糸を引いて粘液が垂れ落ちている。確認するまでもない、弥生の性器は明日菜が見た事もないほど大量に濡れていた。

「想像しただけで糸を引くほど濡らすなんて、先輩は明らかに異常ですね　これはお仕置きが必要ですよ　」

「はい、明日菜様　変態の弥生にきついお仕置きお願いします　」

明日菜は木刀を手にすると下段に構えた。狙いは一点、弥生のだらしなく口を開いて粘液を垂らしている性器だ。明日菜は、チャッと木刀の向きをかえる。そして、そのまま弥生の股間の割れ目、性器に思い切り木刀を叩き込んだ。

バキャッッ！

「あびゃあぁぁぁーーーーっ　マンコ、じぬうぅぅーーっ　」

弥生が絶叫して地面に転がり、のたうち回る。明日菜は、その弥生の顔面をローファーで踏みつけた。さらにグリグリと顔面を押し

潰す。

「誰が倒れていいと言いました　倒れてお仕置きから逃れようとしても無駄ですよ　絶対に許しませんよ、先輩　さあ、早く立って股を開きなさい　」

容赦なく明日菜に命令され弥生は泣きながら起き上がる。そして、大きく股を開いた。その途端、弥生の性器にまた木刀が叩き込まれる。

バキャァァーーッ

「あぶうぅぅぅぅーーーっ　」

今度は弥生は倒れずに耐えていたが、太ももはぶるぶる震え、もう一撃入れられれば、また倒れてしまいそうであった。

「ゆるじでくだぢゃい、明日菜様　私のクリ、つぶれてしまいますぅ……　」

「はぁっ、本当は嬉しいくせに……　早くクリ潰して下さいとお願いしなさいよ　」

弥生は涙と鼻水を垂らし、震えながらチョロチョロと尿を漏らしていた。

「ううっ……　明日菜様、弥生のいやらしく勃起したクリを惨めに潰してくらひゃい　弥生のクリを徹底的に殺してくだちゃい　」

明日菜は、よく言えましたと、また弥生の性器に木刀を叩き込む。

バキャァァッ

「あぶうぅぅぅーーーーっ　」

ぶしゃっ

明日菜の一撃でとうとう弥生の小さなクリトリスは潰れてしまっていた。

「あびゃぁぁぁーーーーっ　」

クリトリスを潰され弥生は絶叫する。口からはブクブクと泡を吹いているが、弥生は必死に耐えていた。

「あははっ、クリ潰れちゃいましたね先輩　もう、クリ使ってオナニー出来ませんね　でもね、先輩　もう先輩はオナニー出来なくなるまで私が先輩のマンコ徹底的に壊してあげますからね　ド変態の先輩は嬉しいでしょう　さあ、それでは最後のオナニーをさせてあげますよ　」

明日菜は小柄な弥生の体を吊り上げ、地面から突き出た自慰用の男根状の杭の上に降ろしていく。そして、弥生の膣口に位置を合わせ杭を突き挿れていった。

「痛いぃぃっ、裂けるぅぅっ　」

弥生が泣き叫ぶが明日菜は構わず弥生の体を杭の上に降ろしていく。

ズリュウウッ、ビリビリビリィィッ

「あびゃぁぁぁーーーーっ、マンコ、死ぬぅぅぅーーーっ　」

弥生の膣は無理矢理に杭を突き刺され、膣壁が裂けてしまっていた。しかし、明日菜は残酷に命令する。

「ほら、先輩の大好きなオナニーをして下さいよ　ちゃんと撮影してあげますからね　顔を上げて、腰を上下に激しく振って下さい　」

弥生は腰を動かそうとするのだが、膣が裂ける激痛で動かせずにいた。明日菜は、そんな弥生の姿を見て爆笑している。

「ド変態の先輩がマンコの穴が裂けるくらいでオナニー出来ないのですか　笑ってしまいますね　それならオナニー出来るようにしてあげますよ　」

明日菜は注射器に媚薬を入れると弥生の潰れたクリトリスに針を突き刺し、ヂューッと媚薬を注入していた。さらに、会陰にも注射器を刺し注入する。

「まだまだ注入してあげる　もう戻ってこれなくなるほど注入してあげますね、先輩　」

明日菜は弥生の大陰唇、恥丘、乳首と次々に媚薬を注入し、錠剤の媚薬も一瓶弥生の口に入れ飲ませてしまった。そして、弥生の肛門にチューブを深く押し込む。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あぶぅぅぅーーっ　」

しばらくすると弥生の目の焦点が合わなくなり全身から汗が噴き出してきた。弥生の肌も火照ったようにピンク色に染まり、膣に挿れた杭が下まで濡れるほど粘液も溢れだしている。

「ほら、気持ちよくなったでしょう先輩　早くオナニーしなさい」

明日菜の言葉で弥生は腰を上下に激しく動かし出す。明日菜は弥生の後ろに回ると、肛門に挿れたチューブにシリンジを装着する。そして、シリンジにブランデーを満たすと弥生の中に注入していった。

「あぁ、熱いいいいっ　お腹の中、焼けるぅぅぅっ　あひいいいいーーーーっ」

弥生はブランデー浣腸され、腸が焼ける激痛に泣き叫んでいた。だが、それでも腰を動かすのは止まらなかった。

「あづーーーっ　いぐーーーーっ」

明日菜はそんな状態の弥生に鞭を叩き込んでいた。

バシッ！バシッ！バシッ！バシッ！バシッ！バシッ！バシッ！バシッ

「あひいいいいーーーっ」

ブシャァァーーーッ

鞭打たれながら自慰する弥生の肛門から液状の大便が噴き出した。

「先輩、だらしないですよ　もっと我慢しなさいよ」

明日菜は更に激しく弥生に鞭を叩き込んでいた。

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n3162jj/

性器を完全に破壊され、泣きながら処刑される西園寺弥生

2025年8月25日02時21分発行